徳川忍法系図

南原幹雄

徳間書店

徳川忍法系図

南原幹雄

徳間書店

徳川忍法系図

南原幹雄

徳間書店

ISBN4-19-124374-8 C0093 P1400E(0) 定価1400円
(本体1359円)

徳川忍法系図／南原幹雄

三代将軍家光の命を
狙う甲賀不動丸　守る
伊賀組頭領 服部半蔵

江戸城下を舞台に二組の忍者集団
が繰りひろげる凄絶な戦闘の連続！

徳間書店　定価1400円（本体1359円）

南原幹雄

徳間書店

音もなく、その敵がもどってきた。
塀上をつたってせまってきた。
敵が翔んだ。片手に忍び刀をかざしている。
不動丸は地上からそれをねらった。
不動丸は相手の忍び刀をかわした。
と同時におのれの忍び刀を相手の頭上に振り下した。
（やった！）
脳天を割ったとおもったが、敵はなんと自分の片腕で忍び刀をうけた。想像もできぬ防禦法であった。
片腕が肘のところからとんで、空中に舞いあがった。
けれども敵は微塵も動揺を見せぬばかりか、体勢もくずさぬ。痛みもまったく見せぬ。
不動丸のほうが動揺した。人間わざとはおもえなかった。文字どおりの妖魔かと思った。（本文より）

徳川忍法系図

南原幹雄

徳間書店

徳川忍法系図

南原幹雄

徳間書店

徳川忍法系図……目次

甲賀大黒天 5
熱風来たる 35
迅雷の如く 68
流星墜つ 100
月光瞬く 130
疾風紀尾井坂 160
妖雲起る 189
二代目毘沙門天 220
落日燃ゆ 250

装画・題字／村上　豊
デザイン／秋山法子

甲賀大黒天

一

江戸城下を筑波颪（おろし）が吹きすさんでいる。

晴れてはいるが、砂塵が舞いあがり、空がどんより曇っているようにさえ見える。

ころは寛永だが、まだ江戸城下は完成途上である。江戸の各地で建築工事や道路、橋などの構築がさかんにおこなわれ、伝馬や車力（しゃりき）がいきかい、町なかはきわめて雑然としている。新興の活気にあふれてはいるが、浪人や食いつめ者たちが大勢ながれこんできて、江戸はまだ秩序がととのってはいなかった。

まして師走（しわす）となると、人のこころも町の空気もどことなく騒然としている。商人も職人も一年間のしまいと新年の準備とで家業にいそがしく、往来をゆく人々の表情もせわしげである。

なかでも日本橋は、江戸城下の中心地である。五街道の起点であり、ここから五畿七道にいたる一里塚がはじまる。橋上の往来は一日中間断なく、また橋の下をくぐる魚船、荷船の出入りも朝から夕

までひっきりなしである。

師走も中旬に入った昼下り……。

風呂敷に荷をつつんだ中年の行商人が小田原町のほうからやってきて日本橋をわたりはじめた。呉服、太物類か薬種をあつかう行商人と見えた。

空っ風が橋の上を音をたてて吹きぬけている。

行商人はこころもち背をこごめるようにして、まともに風をうけながらあるいていった。

むこうから老若さまざまな者たちがあるいてくる。いずれもせわしげに足をはこんでいる。店者、職人、武士、車力、子づれの女……などが、大勢すれちがっていった。

行商人は肩に背負った荷を一度ゆすりあげて、いそぎ足で青物市場のほうへあるいた。橋のむこうは高札場と青物市場である。

そのとき、材木を車につんだ車力がむこうからやってきた。江戸は幕府創立いらい各地いたるところで工事をやっており、車力が町にあふれている。車力をやりさえすれば、食うにはこまらないといわれている。

車力はほとんど橋の真ん中をわたってくる。橋には勾配がついているので、車はかなり勢いがついていた。

行商人はわずかに左へよけた。

すれちがう瞬間、行商人はなにやら呆然とした顔をした。

車力はがらがらと音をたてて車をひいてゆきすぎた。

行商人は数歩あるいたころから歩行がおかしくなった。よろよろとふらつきながらあるきつづけ、ついに肩の荷とともに腰からおち、仰むけにたおれた。

「おい」

「どうしたんだ?」

通行人たちが寄ってきて、声をかけた。

が、行商人は一言もこたえず、自分の喉をくるしそうに指さした。

「ああっ……」

通行人の一人が顔色をかえて悲鳴をあげた。

たおれた行商人の喉が鎌で切ったようにすぱっと深く裂かれていた。裂け目から奥の赤い肉と器官がのぞいている。

やがてその裂け目から血があふれてきた。

「誰がやったんだ?」

「どいつの仕わざだ……」

通行人たちは寄ってきて、口々にいったが、行商人が刃物で切られるところを見た者は一人もいなかった。橋の上で行商人におそいかかる者を見た者もいなかった。

橋の上で異常な振舞はいっさいおこなわれなかった。空っ風が砂塵をまきあげているとはいえ、白昼のことである。通行人たちは自分の目をいぶかしんだ。

「妖怪の仕わざか?」

「鎌鼬、かもしれない……」

鎌鼬はつむじ風のためにおこる真空によってできる自然現象だが、昔はイタチのせいだとおもわれていた。

橋の上の通行人たちが寄りあつまってきて、騒ぎになったが、行商人は喉を深く裂かれているため

に言葉を吐くことができない。
しかも血がとめどなくながれでて、さらに出血のために呼吸が困難になっていった。
ひい、ひい……としばらくくるしんでいるうちに、通行人が大勢見まもる中で、ことっと息絶えてしまった。
その翌々日。幕府伊賀組与力鵜飼三十郎は朝はやく組屋敷をでた。
「ええ笹ィ、笹」
「笹やァ、笹……」
三十郎は煤竹をたばねた荷を肩にかついで江戸の町中をながしあるいた。
師走中旬といえば大掃除の時季である。江戸城大奥は例年十三日が御煤払、大掃除の日ときまっている。大名屋敷、旗本屋敷もそれにならって、その前後の日に煤払をおこなう。さらに町家もそれを真似て、この中旬に煤払をするならわしが近年ひろまっていた。
その煤払になくてはならぬのが煤竹である。
法被、股引に尻からげをして草鞋をはき、煤竹の束をかついで、三十郎は町から町へ売りあるいていった。
江戸は今日も筑波颪の空っ風が吹いている。空っ風は江戸名物だから、この時季しかたがないが、これがあばれまくると顔をあげてはあるけない。
三十郎はただ煤竹を売りあるいているのではない。あるきながら、それとなく前後、周囲に注意をむけている。とりわけ通行人には気をつけていた。
この月に入って、もう三人の伊賀者が路上で何者とも正体のわからぬ者におそわれ、たおされていた。いずれもたった一太刀で致命傷をこうむっていた。喉仏を切り裂かれたり、延髄や心臓を畳針のような凶器で一突きにされていた。とても尋常とはいえぬ腕前である。
やられた伊賀者はおのおの一騎当千の強者だ。しかも伊賀者ばかりねらっておそいかかる相手にはかくべつの怨念か、ほかの意図があるとかんがえられたのである。
三十郎は十分に警戒していた。もし相手を見つけることができても、勝負して自分が勝てるという保証はなかった。自信はよくて五分五分である。すこしでも油断をすれば負けるだろうという気がした。
午前中、三十郎は芝、木挽町、三十間堀方面をあるいたが、それらしい相手には出くわさなかった。
午後から京橋をわたり、日本橋、神田方面にやってきた。
「ええ笹ィ、笹」
しぶい声で呼ばわりながら三十郎は禰宜町の盛り場へ入っていった。ここには歌舞伎芝居、操り芝居などのほか各種の見世物や大道芸が寄りつどい、江戸随一の繁華街をなしている。男色や隠し売女の店もある淫蕩の巷である。
年の瀬でありながらこの歓楽街はふだんとすこしもかわりなくにぎわっている。いや年の瀬のあわただしさをよそに、かえってさかんな賑わいを見せている。
禰宜町をとおりぬけて、吉原遊廓のほうへ三十郎はむかった。
そのとき、むこうから二人づれの浪人者がやってきた。羽織はよごれ、裾のすり切れた袴をはいたあぶれ者の感じのする浪人者だ。
関ケ原役、冬夏の大坂陣、さらに諸大名の断絶や改易などで、世上には浪人者があふれ、このごろ治安上の大きな問題にもなっていた。
「笹やァ、笹……」

呼ばわりながら三十郎はあるいた。

浪人たちは往来の中央を我がもの顔にあるいてくる。浪人たちの後ろには焼芋(やきいも)の釜を車につんだ焼芋屋がやってくる。

三十郎は煤竹が浪人者たちに触れてはまずいとおもった。こういう手合は、触らぬ神に祟(たた)りなしだ。喧嘩をしても負ける気づかいはないが、ことをおこすのは面倒だ。

三十郎は内心で注意しながら、浪人者とことなくすれちがった。

ややほっとしたとき、目前に焼芋屋の車がせまっていた。

「焼芋ィ、焼芋ィ……」

そういって車をひいてくるのは変哲もない親爺だ。年齢は三十代にも、見方によっては五十代にも見える。背丈も中肉中背、まったく特徴のない、目立たぬ男である。

ところが、すれちがう瞬前、

(!)

三十郎は冷水を全身にあびたような恐怖におそわれた。焼芋屋の親爺からすさまじい殺気を感じたのだ。

おもわず三十郎は懐中の忍び刀の柄へ手をのばそうとした。

けれども、親爺は無表情で、三十郎へ一瞥もくれずにとおりすぎた。

(間違いだった……)

そうおもった一瞬、三十郎の瞼のうちで火花が炸裂した。

「やっ」

三十郎はみじかい声を発して、宙へとんだ。同時に煤竹がぱっと空に舞っていた。

三十郎は宙をとびながら、懐中から一尺余寸の忍び刀をぬきざま、親爺の頭上へおもいきり振りおろしていた。

が、わずかな勘のくるいがあった。三十郎は宙へとぶとき背中にかなり衝撃をうけていた。そのために、親爺はからくも必殺の忍び刀をさけていた。

地におりたったとき、三十郎は背中におもい痛みを感じていた。相当深くやられたようだ。

「何者だ?」

誰何(すいか)したとき、

「甲賀大黒天――、とおぼえておけ」

ひくい一声をのこして、その人物ははやくも人ごみに姿をくらましていた。

二

夜に入って、空っ風が吹きやんだ。

そして霧がわいた。桜田濠、半蔵濠からわいた凍霧(いてぎり)は暗く冷えびえとたちこめて、麹町の細長い町筋をながれ、谷あいへしずんでいく。

夜更けの霧の中を音もなく人影がゆく。

人影は麹町から清水谷のほうへむかった。そのあたりは昼間でもあまり人通りのないしずかなところで、夜更けになると、狐狸が横行するといわれている。

清水谷にいたるやや手前に、くずれかけた塀にかこまれ、門柱も片方がわずかにかしぎ、門扉はこ何年もあけたてされたことがないかのように蔦(つた)やシダ類の這う武家屋敷がある。

霧はこの武家屋敷をもつつんでおり、内部をうかがうことは不可能である。

人影は霧の中に没して、見えなくなった。

しばらくたつと、人影は塀のくずれたところをくぐって屋敷内に入りこんでいた。〈古法十忍〉という忍術の基本でいうところの〈如響忍〉。すなわち地の利、気象条件を利しておこなう術の初歩である。

屋敷内はいたるところ老樹、大木がおいしげり、枝を張り、根を隆起させており、さらに池をうがち、大小の石組が横たわっている。はじめておとずれた者では足の踏み場にもまよう有様である。どこが玄関で、どこに庭につうじる木戸があるかもわからぬ。

第一に、現在人が住んでいるのかいないのかもさだかではない。狐狸が棲みつくにはうってつけのようなところである。

人影はここをあるき慣れているとみえ、母屋とおぼしき建物の軒下をすすんだ。そして大きな庭石のかたわらにひそんだ。

ぼぉう　ぼぉう……

しばらくすると木菟のひくい鳴き声が寒空にひびいた。木菟は昼間も目が見えぬわけではないが、このんで夜活動する。寒さのきびしい夜などはとくに木菟が活動をこのむときである。

ぼぉう　ぼぉう

応答するがごとくに屋内からも木菟の声がながれてきた。

人影はふわっと濡縁へあがった。そして難なく雨戸を一枚はずし、屋内へ入った。音もなく廊下をすすんだ。〈足なみ十ケ条〉という忍者の歩行の心得でいうところの〈すり足〉をもちいている。

屋内の一カ所に、ぼうっと障子に明りのうつっているところがある。人影はそこへむかっていった。

「三十郎にございまする」

人影は明りのうつる障子のところで中へ声をかけた。昼間の煤竹売りにかわる鵜飼三十郎の姿である。

「入れ」

まねいたのは、この屋敷の主人というよりも、幕府の伊賀組をあずかる頭領服部半蔵である。初代から三代目の半蔵だ。服部家は二代半蔵正就が改易されて、一時絶家していたが、初代半蔵の三男忠正が元和二年ふたたび服部家をおこして、地下におけるはたらきを再開していた。

半蔵のいる部屋は十畳の板張りである。半蔵はそれまでノミをふるって背丈三尺ばかりの観音像を一心不乱に彫っている最中だった。すでに荒削りをおわって、部分的な彫りに入っていた。

半蔵はこの年（寛永十五年）四十代後半の、忍者としての円熟期にある。身心の練磨はすでに絶頂の域に達し、技の精妙さは古今無類と評される。もう二十年ものあいだ幕府の隠密機関をあずかり、殺生地獄のつづく中で修羅のはたらきをおこなってきた。ときに罪なき者を斬り、故ない者を屠って幕政の犠牲にしてきた。

その罪業の垢にまみれた手で、半蔵は観音菩薩像を彫っている。罪業消滅をいのるためでなく、犠牲となった者の菩提供養のためでもない。半蔵はおのれの精神の統一、身心練磨のために、深夜ノミをふるうのである。

「鎌鼬の正体がわかりましてございます」

と三十郎がいったとき、一瞬だけだが、半蔵の眸がきらっとひかった。

「おまえ、傷をうけているな」

「面目なきしだいにございます。背中に一太刀やられました。なかなかおそろしき敵でございまし

た」

常人ならば養生のために何日も寝つくほどの傷である。三十郎は伊賀伝来の塗薬をつけただけで、今こうしている。

「その正体は？」

「甲賀大黒天と名乗りました」

三十郎は焼芋売りの親爺をおもいだしながらこたえた。

「大黒天……、というたか」

「そういいました」

「甲賀毘沙門天が死んですでに五年めだ。大黒天はその仇討ちにわれらの前にあらわれたというべきか……」

半蔵は元和九年から寛永十年まで約十年間にわたってくりひろげた自分と甲賀毘沙門天道順との死闘をおもいかえした。

毘沙門天の称号は甲賀最高位の者にさずけられる栄誉である。大黒天の称号はそれに次ぐ甲賀忍者の栄誉だときいたことがある。

毘沙門天も大黒天も仏教の守護神で、しかも戦闘をつかさどる忿怒の神である。大黒天は密教では自在天の化神といわれ、その姿は頭巾をかぶり、左肩に大きな袋を負い、右手に打出の小槌をもっている。

「左様でございましょう。それで伊賀者をつぎつぎにたおし、戦いをいどんでいるのです。大黒天のねらいは最後に伊賀者頭領をひきだし、これをたおすことでございましょう」

と三十郎はいった。

「きっと左様であろう。わしをたおして甲賀がうけた恥辱をはらし、伊賀への報復をこころざしていることはまちがいない」

すこぶる厄介な事態になった。けれどもこれは甲賀忍者にとってやむをえぬことであった。そのままほうっておけることではなかった。甲賀者の誇りや面子のためだけではない。甲賀が伊賀の下風に立てば、天下各地の甲賀者たちははたらき口をうしなう恐れもあった。うしなわぬまでも、伊賀者よりも甲賀者のほうが安い代価ではたらかなければならなくなるかもしれぬ。これは到底しのびがたいことだ。

こういう事態をふせぐため、大黒天は究極、半蔵に勝負をいどんでいるといえた。

「甲賀大黒天、おそるべき技の持ち主でございます」

「おまえが傷を負うたのだから、大黒天のつよさがわかろうというもの。並の伊賀者では手に負えまい」

と半蔵はいったが、さらに大きな気がかりがあった。それは簡単には口にできなかった。

三十郎もそのようである。

「毘沙門天は駿河大納言様にやとわれ、上様へ刃を向けた者でございます」

「左様じゃ……」

といって、半蔵は言葉を切った。

駿河大納言忠長は二代将軍秀忠の三男坊であり、三代将軍家光の弟であった。家光は生まれながらの将軍と世間ではいわれているが、実際にはそうではなかった。慶長、元和のころといえば、まだ長子相続制が確立していなかった。兄弟を生んだお江与の方は家光よりも忠長のほうを溺愛した。それにひきずられて秀忠の愛も忠長へかたむいた。そのために将軍嗣子に一時は忠長のほうがなるのでは

ないかという臆測がうまれたほどだ。

忠長も父母の愛情にあまえ、家光が将軍嗣子になり、さらに将軍になってからも増上慢がたえず、傲(おご)りの態度がなおらなかった。そして忠長の周囲には、彼をミコシにかつごうとする反将軍派勢力が自然にできあがった。紀伊大納言頼宣(よりのぶ)、加藤肥後守忠広(ただひろ)などである。忠長にやとわれていた毘沙門天道順は、刺客として家光をねらったが、それを半蔵にはばまれ、両者死闘をくりひろげたあげく毘沙門天はやぶれ去ったのである。そして加藤忠広は改易され、忠長は切腹を申しつかって、元和、寛永前期にわたってくりひろげられた徳川家の兄弟争闘の幕は閉じたのだった。

半蔵が今いだいた懸念は過去のこの戦いをおもいおこさせるものがあったからだ。

「大黒天が上様暗殺という毘沙門天の遺志をもうけついでいたら、面倒なことになるかと存じます」

三十郎がその懸念を口にした。

「今のところ皆目、見きわめがつかぬ。そうならぬことを念じるばかりじゃ」

半蔵はそういって沈黙した。

「毘沙門天をやとった忠長公はすでに亡く、駿河大納言家も絶家いたしております。しかしながら毘沙門天の遺志は甲賀者たちにうけつがれておりますやもしれませぬ」

三十郎はあくまでもその心配をしていた。

「しばらく大黒天と甲賀者の動静をうかがうことが肝要であろう。さらに大黒天へのそなえをきびしくいたせ」

命じておいて、半蔵はふたたびノミをとった。

その後はもうそばに三十郎がいるのを意に介さなかった。口中で呪文をつぶやくように経をとなえながら、観音像を彫りつづけていた。

三十郎は入ってきた経路をそのまま逆にとって屋敷をでて、まだ凍霧のはれぬ清水谷をあるいていた。

三

冬枯れの武蔵野の風景がひろがっている。

太古の面影をしのばす森や雑木林がえんえんとひろがり、荒漠たる丘陵地につらなる。それは多摩丘陵へつながり、さらに丹沢の山塊へもつづく。

ずっと手前には一筋の灌漑用水路が帯状にながれ、その両側に田園風景が展開している。

豊多摩(とよたま)郡渋谷村は、江戸の西南郊、四谷と目黒のあいだにはさまれた地である。山林にかこまれ、川や谷があり、そのあいだを点綴(てんてい)して荒野、耕地がひろがるしずかな農山村地帯だ。

正月の風景はいっそうしずかで、おだやかである。

晴れた空には武者絵凧がいくつかあがっている。

この地の産土(うぶすな)神である渋谷八幡のほうから獅子舞のお囃子(はやし)がながれてくる中で、寒スズメの鳴き声がきこえる。

日がかなり高くなったころ、渋谷往還から折れて村道を入ってくる一人の男の姿があった。農村ならどこにでも見かける農夫である。けれども年の初めであるから、ふだんの野良着を一張羅の紋付小袖、白足袋、雪駄にかえ、手には年賀の品とおぼしき酒の小樽をさげている。

男はとある一軒の百姓家へ入っていった。

玄関には一応の松飾りがしつらえてあるが、どことなくさびしげなたたずまいの感じられる家だ。

掃除や片付けなどはよくいきとどいているが、活気が感じられない。
男は入口を入って、声をかけた。
しばらく間があってから、応答があった。女の声である。
やがて、男の前にこの家の女主人らしき者が姿をあらわした。
家は百姓家であるが、でてきた女主人には農夫の女房とは信じがたいおくゆかしい雰囲気がある。年は三十路に達していようが、白い細面にただよう芯のつよさと臈たけた感じには、女主人の生まれと過去が反映していそうだ。
「しばらく無沙汰をつづけておりました。ご機嫌はいかがでございましょうか。本日はふだんの無沙汰のお詫びと、新年のご挨拶にうかがいました」
男の言葉つきと物腰にも、まったくの百姓そだちとはうかがわれぬ一本筋のとおったものが感じられた。
「ご無沙汰はこちらも同様でございます。気づかいは無用になさってくださいませ。けれども久方ぶりに会うことができて、うれしゅうございます。源心どのもずいぶんご立派になられましたな。まあ、おあがりくださいませ」
女主人はそう挨拶した。年齢も女のほうがわずか上なのだろうが、態度にもどことなく鷹揚な物腰が感じられた。
源心と呼ばれた男はやや遠慮がちに上にあがった。
「頭領のご位牌にまず挨拶させてくださいませ」
源心はそういい、仏間にみちびかれた。
仏間には簡素な仏壇がもうけられ、位牌がおかれ、ささやかな供物と香華がかざられている。

源心は仏壇の前に立ち、位牌をおがんだ。
甲賀毘沙門天道順
俗称が位牌にしるされている。忍者に戒名はないのである。
位牌をまもる女主人は道順の未亡人である。
「源心どのは甲賀者のうちで大黒天を名乗っておいでのお方ですから、一年でも一カ月でもはやく伊賀の頭領服部半蔵を討って、空いている毘沙門天の称号をついでいただきたいとおもっております。それでなくては道順がいつまでも浮かばれません」
未亡人は仏間から座敷へ源心を案内して、まずそういった。そういったときに未亡人の姿勢と表情にはかつて甲賀者たちをひきいた頭領の夫人としての気位がのぞいた。
「おっしゃられるまでもなく、わたしはそのつもりです。そのために諸国修行の旅にでて、身心の鍛練をおこない、技をみがいてもどってまいりました。服部半蔵を討って、甲賀者の面目を回復いたす覚悟です。そして道順さまの遺志はかならずわたしがひきつぐつもりでおります」
源心は道順未亡人の前で自分の決意をあきらかにした。
「けれども、半蔵は容易ならざる者です。簡単には討ちとることはできません。闇雲に攻めても、かえってこちらが負けてしまうでしょう。半蔵に勝つためには十分な準備をいたしませぬと」
未亡人の目から見ると、まだ源心には不安がのこるようだ。経歴からいっても、あきらかに半蔵に歩がある。いかに源心が勇敢で、野心にあふれ、戦闘の技にみがきをかけたとはいっても、半蔵をたおすのは至難のワザである。未亡人には道順をたおした半蔵のおそろしさが骨身にしみている。
「今、着々と準備をいたしております。そのうちに半蔵はいやでもわたしの前に姿をあらわしてくるでしょう。今その仕組をこしらえています」

源心にとっては、半蔵をたおすことは目的ではなくて、手段である。甲賀最高位の毘沙門天をたおした半蔵を討たなくては、源心は毘沙門天の位をつぐことはできぬ。いつまでも大黒天の位にあまんじていなくてはならないのである。それは誇り高き源心にとって到底我慢のできることではない。源心は大黒天の位に満足していなかった。

「いつまでも毘沙門天の位があいているのは、甲賀にとっての不名誉、この上ない恥辱です。そのいちばんちかくにいるそなたが一日もはやく位につくべきでしょう」

こういったとき未亡人の表情がさらにきびしいものになった。未亡人の中で燃える報復の情念が一段とたぎりたったものとおもわれた。

「おもん様は、わたしが毘沙門天の位につくにふさわしいとおかんがえですか」

源心は一瞬あらたまって、未亡人につよい視線をそそいだ。おもんは未亡人の名である。

源心の視線はおもんの顔と姿態にねばりついた。

おもんは道順の後妻であり、まだ色香を十分にのこしている。姿態には内に秘めたるみずみずしさと色香の深さを想像させるものがある。

源心は自分が毘沙門天の地位につけば、そのときおもんも公に手に入れることができるとかんがえた。おもんは毘沙門天という位に付随している女だとかんがえることができるからだ。

源心は毘沙門天の位をなんとしても獲得しなければならないし、おもんもほしい。源心を半蔵への戦いにかりたてているものは、その両者である。

「大黒天が半蔵をたおして毘沙門天になるのがいちばんこのましいとおもいます。けれども、大黒天がぼやぼやいたしているあいだに、ほかの甲賀者がもし半蔵をたおしたとすれば、大変むつかしいことになるでしょう」

おもんがいった。

「そのときは大変むつかしい……」

源心も同意した。けれども、源心は半蔵をたおせる者は自分しかいないと確信にちかいものをいだいていた。

「わたしはそなたが半蔵を討つことをねがっています」

おもんがそういったとき、源心のうちでうずくような欲望がおこってきた。

「おもん様、そのときがくるのをお待ちくださいませ」

源心は自分がおもんを手に入れることをかんがえていた。

「待っておりましょう」

おもんは源心の視線をはねかえすようにいった。

道順は五年前、半蔵との戦いにやぶれて死に、おもんと前妻が生んだ娘桔梗（ききょう）をのこした。

今おもんと桔梗は江戸からはなれたこの農家で道順の菩提をまつり、しずかな暮しをおくっている。

桔梗は道順が死んだとき、まだ十歳であった。ぼつぼつ年ごろにちかい娘になっているはずである。

源心はその日、この家を辞去しなかった。

おもんのすすめに乗じて、この家の玄関脇の小部屋で宿泊していく光栄に浴した。

源心は寝入ってから、二刻（約四時間）あまりで目をさました。そのつもりで寝入ったのである。

源心は夜具の中でじっと目をあけていた。

時刻は子（ね）の刻（午前零時）と丑（うし）の刻（午前二時）のあいだごろだ。

屋敷内は寝しずまっている。この家にはおもんと桔梗のほかに年老いた下男が一人いるだけである。

源心は夜具の中で精神を統一し、聴覚をとぎすました。すぐれた忍者は遠見（とおみ）、遠聴（とおちょう）の法で一里四

方のものを見、音をきくことができる。
源心は今この屋内における寝息をききとるべく耳をたてた。
やがてかすかな寝息が二カ所からつたわってきた。いずれも女の体から発するたおやかでおちついた寝息である。いささかも不安のない寝息だ。下男は別棟で寝ている。
源心は寝息をきいただけで、性別はもとより年齢、体軀までも想像ができる。
二カ所からつたわる寝息を源心はききわけた。一つはおもんのものであり、もう一つは桔梗である。
源心はおもんの寝息をたどっていった。たどった先は仏間にいきついた。
桔梗の寝息をたどると、昼間案内された座敷にいたった。
源心はこの家をおとずれるときから、ひそかに下ごころをいだいていた。できるものならおもんを我がものにしておきたいという不逞なる野心だ。
甲賀で毘沙門天を称するには、おもんの承諾が必要とされている。おもんがいなければ桔梗の承諾がいる。そのためには、ものにしておくのがいちばん確実な方法だとかんがえた。
それでなくても、おもんは今から隠遁めいた暮しをさせるにはもったいない女だ。おもんくらいの女を甲賀者の中からさがすのはむつかしい。
おもんをものにするには、今夜が千載一遇の好機である。
源心はおもんの熟れきった体を想像した。もうなかば頂戴したも同然だとかんがえた。
おもむろに夜具から立ちあがり、小部屋をしのびでた。小部屋から仏間までは廊下でつながっている。
物音をまったくたてることなく、源心は仏間の前に立った。耳をたてると、相かわらずおもんはやすらかな寝息をたてている。

おもんは道心あつく、まして貞操の念堅固な女である。まともからいっては、とても体をひらかせることは不可能だ。
が、源心には十分な成算がある。おもんが源心の腕の中でもだえる表情すら今から想像していた。
障子戸にかるく手をかけた。そしてそのまま音もなくひいた。
仏間の中は有明行灯をともしていない。真っ暗である。けれども源心の目には室内の有様がほとんど見てとれる。
おもんはやすらかに熟睡中だ。
源心はおもんの寝顔をじっと見つめ、九字を切って、印をむすんだ。〈不動呪縛〉、俗にいう金縛りをかけたのだ。これがきくと、当人は自分の意志ではおもいのままなうごきがとれなくなる。
やおら源心は仏間へ入っていった。
仏壇へ頭をむけて、おもんはねむっている。
源心は夜具にちかづいてゆき、はらりと掛け具をとりはらった。
白い夜着に身をつつんだおもんの寝姿があらわになった。寝みだれのない姿だが、襟の合わせ目からわずかに白い胸がのぞき、裾のほうは脛、臑のあたりから下が見えている。
そのとき、異常を察したとみえて、おもんが目をあけた。
しかし源心は夜目はきくが、おもんには暗闇でなにも見えぬ。
源心はおもんの体におおいかぶさってゆき、一気に胸の襟をおもいきり左右にひろげた。夜目にも白く、おもんの両の乳房があらわれた。
「ああっ……」
おもんがちいさな声をもらすと同時に、源心はおもんの口を片手でふさいだ。

「おもん様、おしずかに。おしずかになさらなければ、あなた様が娘御のまえで恥をおかきになりますぞ」

おもんの耳もとへ口を寄せ、あつい息をふきこむようにささやいた。そして瞬時の隙もあたえず、自分の膝でおもんの足をぐいと割っていった。

いきなりのこととて、おもんには防禦の姿勢がとれなかった。まことにあっけなく足をひらいてしまった。

（うう……）

おもんはもがいたが、体はすっかり源心に押さえこまれている。ほとんど身うごきができぬ。声もでずに口の中でくぐもった。

「おもん様を我がものにいたしとうございます。源心のねがいかなえてくださりませ」

ふたたびささやくと、おもんはいやいやをするように首をふった。

けれどもそのとき素ばやく源心の手はおもんの片方の乳房をとらえていた。乳房はまだ張りをうしなわず、いささかも形がくずれていない。源心は遠慮会釈なく、乳房を揉んでいった。

おもんは必死で源心の手をはらいのけようとした。けれども不動呪縛がきいているために、おもいのままにはうごけなかった。気持とは裏腹に、在分に乳房を揉まれた。

「おもん様、あらがっても無駄でございます。すでに前もって仕掛けをいたしております」

源心は勝ちほこったようにいって、手を下へのばしていった。

すでに足はひらいており、簡単に股間をとらえることができた。しかもそこは秘局から泉のようにあふれでる液で、まるで水浸しのようになっている。

夕餉（ゆうげ）の馳走をうけたとき、源心はひそかにおもんの吸物の椀に甲賀伝来の媚薬をとかしこんだのだ。

その効能ははっきりとおもんの体にあらわれていた。秘局をまさぐると、とめどなく液がわきでてきた。

やがて、おもんの口からかぼそいあえぎが洩れはじめていた。

源心は腹の下におもんをおさえこみ、ひとおもいにつらぬいた。

四

源心は渋谷村でおもんを手ごめにした後、消息をたった。

源心の行方を知る者は誰もいなかった。

消息をたった数日間……。源心は暗い天井裏で息をひそめるような暮しをつづけていた。朝も昼も、夜も、天井裏にひそみつづけて、時がくるのを待っていた。

暗い天井裏とはいっても、狭いところではない。建物の広さだけでも何百坪もある大名屋敷だ。起居に不自由はない。食べるものにもこと欠かぬ。排便などの用は、夜寝しずまったころおりていって、屋敷の庭でたして、土をかけておく。そして又、天井裏にもどるのだ。

大名屋敷の天井裏に何日間もひそんでいると、大名の暮しというものがよくわかって面白い。今までわからなかった些細なことがわかったり、従来おもいちがいをしていた事柄が訂正されたりして、一人うなずくことがあった。

大名屋敷とはいっても、ここは小石川安藤坂にある紀州家付家老（つけがろう）安藤飛驒守の江戸屋敷である。先代の当主安藤帯刀（たてわき）は家康側近の寵臣であったが、家康の第十子頼宣が紀州家を創立するにあたって、付家老となった。みずから紀州田辺に三万八千石の封土をもつ大名格身分ながら、紀州家の家政をつ

かさどったのである。

当代の飛騨守は帯刀の子である。

紀州家には安藤のほか、水野、三浦、久野三人の付家老がいるが、安藤家がもっとも格式がたかく、頼宣の信頼があつい。初代安藤帯刀は知謀の臣としてきこえ、権謀術数にたけた人物だった。二代目の飛騨守も年はわかいが、頼宣の信任はあつく、藩政をまかされて、十分にこれを切り盛りしていた。

頼宣は安藤が江戸にくるときは、みずから紀州家上屋敷をでて、安藤の屋敷にとまりにくることがよくあった。

源心は、頼宣が安藤の屋敷にくるのをひさしく待っていたのである。かねてから源心は頼宣じきじきに面談したいとかんがえていた。けれども紀州家の上屋敷は江戸城内にあって、侵入することは不可能ではないまでも、面倒であった。

源心はさらに十日ちかく、天井裏にひそみつづけた。

正月の半ばがすぎた。

暦ではもう新春である。まだ空気は肌をさすように冷たいが、日脚は日に日にのびている。それは天井裏からうかがう日没と日の出の時刻であきらかである。

それからさらに数日後、ようやく源心の待ちつづけた日がやってきた。頼宣が近臣数十人をつれて安藤の屋敷をおとずれたのだ。

安藤の屋敷が一時ににぎやかになった。人の出入りも頻繁になった。頼宣をもてなすための宴の仕度や、家来たちをふくめた宿泊の用意などで屋敷内はいそがしさをきわめた。

頼宣と飛騨守は広間で宴をもよおし、歓談に時をすごし、さらに腰元女中たちが踊りや琴などを披露して、宴は宵にははてた。

褥について、寝入ろうとしたとき、ふと頼宣はきき耳をたてた。自分を呼ぶ男の声をきいたような気がしたからだ。一室おいた座敷に宿直の近習がいるが、その者が呼んでいる声ではなかった。

（……？）

いぶかしんでいると、

「殿、殿様……」

ふたたびひくいくぐもった声がきこえてきた。今度はまちがいない。

（曲者っ）

呼ばわろうとしたとき、

「殿様、声をおたてになられますな。けっしてあやしい者ではございません」

あきらかに寝所の天井裏から曲者の声がした。

このときが源心にとって運命をわかつ瞬間であった。頼宣が大声をあげれば万事休すだ。天井裏で袋の鼠となれば、いかな大黒天といえども切りぬけるのは不可能にちかい。もし頼宣がこちらの話をきいてくれる気になれば、しめたものだ。頼宣を説得する自信があった。

もし頼宣が肝のちいさな男であったら、おそらく大声をあげて、近習を呼んだであろう。けれども頼宣はさすがに〈南海の竜〉と呼ばれるだけのことはある大胆不敵な殿様であった。

「天井裏などにひそんでおらず、ここにおりてこい。余に用件がありそうだ」

おもいのほかというよりは、源心が期待したとおりの態度にでた。源心は頼宣の大胆さを読んで、あえて賭けにでたのだ。

源心に気の迷いはなかった。危険はもとより覚悟の上で天井裏に約二十日もひそんだのだ。ふわりと頼宣の頭のほうに舞いおりた。頼宣と床の間の枕刀のあいだに位置をしめた。

「曲者、まず名を名乗れ」
　頼宣は夜具の上に悠然とおきなおって、恐れも見せずに源心をむかえた。源心にさえぎられて枕刀へ手をのばすことは不可能だが、頼宣はまず敵か味方かはっきりしない忍者を側にちかづけて、歯牙にもかけぬ態度を見せた。
（さすが）
　と源心は胸中、頼宣の肝の太さに感じ入った。
「甲賀大黒天、源心……と申しまする」
　そう名乗って辞儀をした。
「左様か、甲賀大黒天、何用でまいった」
　頼宣はこちらの肚の底まで見とおすようなつよい眸で見すえてきた。
「甲賀毘沙門天の遺志をつぐ者にございます。そのおつもりでおききくださいませ」
「申せ」
「わたくしをおやといくださいませ。きっと大納言様のおためになるかと存じまする。ご損はおかけいたしません」
　源心はずばり結論をいった。
「わしにやとわれて、何をいたす気か」
「大納言様の大望のお手つだいをいたす所存にございます」
「余の大望か？」
「左様です。大納言様がお望みを達するにはわたくしの力がぜひ必要ではないかと存じます」
「面白いことをいう甲賀者だ。余がどんな大望をいだいておると見る？」

「それはいわぬが花……、でございましょう。口にいたせば、いかなる大望も不都合を生ずる恐れがありましょう。いわず、かたらず、双方の腹のうちでわかっておればよいことでございます」
「わかった、大黒天。そちの申すことをきこう。只今からそちを召しかかえてつかわす」
　頼宣は果断にいった。迷いのない判断だ。
　源心のほうが一瞬の間をおいた。
「ありがたき幸せにございまする。大納言様のために粉骨砕身いたす所存でございます」
　源心はかしこまっていい、両手をついて、頭をさげた。
「毘沙門天とかわらぬ手当をあたえよう。毘沙門天におとらぬはたらきを期待いたしておる」
　頼宣は人のこころの機微をもよく知る殿様であった。
「ありがたきお言葉、胸にしみまする」
　源心はもう一度両手をついた。

五

　月が二月にかわった日の暁。半蔵は屋敷の裏門のそばで、ふと足をとめた。
　半蔵の眸は門柱のすぐちかくにおちている変哲もない小石を目ざとくとらえていた。ウズラの卵ほどの大きさの小石で、実際におちているのではなく、そこに置かれていたのだ。
　いわば、暗号の石である。老中松平伊豆守信綱から半蔵に呼びだしがあるとき、この小石が半蔵邸の裏の門柱ちかくにおかれるのだ。
　緊急の用がある場合、半蔵は松平邸か、あるいは城中の御用部屋に信綱をおとずれる。

信綱は家光の御七夜のときに御小姓についていらい家光と苦楽をともにし、以後小姓組番頭、六人衆（若年寄）とへて、老中に任じ、阿部忠秋、堀田正盛とともに幕閣の中枢にある。土井利勝、酒井忠勝両人も重鎮として健在ながらも、幕政の運営はほとんど家光近臣の信綱、忠秋らが中心になっておこなっている。半蔵はもう長年、信綱の命をうけてはたらいていた。

半蔵は今から屋敷へおもむけば、まだ登城前の信綱に会えるとおもった。その足で半蔵は松平邸へむかった。

信綱は以前は赤坂溜池のほとりに屋敷を拝領していたが、今は雉子橋門内に屋敷を持っている。清水谷から雉子橋まではかなりの距離がある。半蔵は番町の町筋へ入っていった。

番町は旗本の番方（武官）の屋敷があつまった東西十六町、南北八町にわたる広大な地域で、町筋も複雑をきわめている。暁であるから、まだ夜気がのこっており、未明の空には、星がよわい光をはなっている。

半蔵は麹町四丁目、大横丁、五番丁、五味坂……と雁行するようにすすんで、濠端一番丁から江戸城の濠ぞいにすすんだ。濠の反対側には旗本屋敷がつづいている。そのあいだに幕府御用地もはさまれている。御用地には空地もあれば、倉庫が建っているところもある。

（……？）

一つ角をまがったとき、半蔵は背中にからみついてくるいやな視線をおぼえた。尾行者がいるのではないかとうたがった。

半蔵はこころみに、道を一筋それてみた。

ところが、相かわらず背後の視線がついてきた。尾行者であることは間違いなかった。

しかも尾行の仕方からみて、半端な相手ではないようだ。相当な腕の者である。巻くのは困難だとおもった。

どう処置すべきか思案した。松平邸まで尾行者をつれていくわけにはいかぬ。

思案しているうちに、半蔵は大きな疑問にぶちあたった。

（罠ではないか……？）

信綱と半蔵の連絡方法を見やぶった者がいるのかもしれぬ。小石を置かれて、半蔵はうかうかとおびきだされたのかもしれない。

その疑いがしだいにふくらんでいった。だとすれば危い。油断は禁物だといましめた。

思案しているうちに、田安御門が見えてきて、九段坂にちかづいた。

（勝負をするならここだ）

半蔵は瞬間的にきめていた。相手は例の鎌鼬、甲賀大黒天ではないかとおもった。このところ大黒天は鳴りをひそめていた。今度はただの伊賀者ではなく、半蔵にねらいをつけたのだ。

坂にかかって、半蔵はゆっくりくだりはじめた。この坂は、俎橋へむかってくだる道である。

坂の右側は桜並木だ。ところが、坂をおりてきた半蔵の姿が途中で忽然と消えた。

時刻は払暁にいたっており、東の空はようやくしらじらと明けそめていた。

間もなく、半蔵が消えたところに農夫のような姿の男があらわれた。どこにでもいそうな平凡な農夫だ。

農夫はそこで立ちどまって四方を見やった。そのとき、

「甲賀大黒天」

かたわらの桜の陰の根方に腰をおろした半蔵が声をかけた。

農夫はおどろきはしなかった。半蔵のほうへむかって足を半歩ふみだした。

「服部半蔵、手合わせを所望する。覚悟はよいか」
源心は半蔵をにらみすえていどんできた。
「いかにも」
と応じたが、半蔵はまだ根方に腰をおろしたままだ。
「半蔵をたおして、道順の恨みをはらす」
源心はいい添えた。
「忍者は所詮、雇われ者だ。敵呼ばわりは笑止だ。道順はただ勝負にやぶれたまで」
「それでは今度は大黒天が勝負をいどむ。いさぎよく立ち合われよ」
「ことわったとて、承知はいたすまい。おうけいたそう」
そういって半蔵はゆっくりと立ちあがった。
「よくいった、半蔵、いくぞ！」
いうなり源心は一歩さがった。
九段坂にほかの人影はまったくない。野良犬の影さえ見えぬ。
半蔵は半身の位置をとり、腰から白扇をぬいた。まず小手だめし、相手の力倆をはかろうとしたのだ。
半蔵は白扇をひらき、それを横にたおして徐々に前方へかざしていった。服部家に代々つたわる伊賀流の秘伝〈扇隠れ〉だ。
白扇が見る見るうちに大きくなり、その扇面といわず一本一本の骨、要までがひろがっていった。そのむこうで源心の姿がしだいにちいさくなり、扇の大きさの中に入ってきた。
これを逆に源心のほうから見ると、扇の大きさははじめからかわらず、半蔵の姿がみるみるうちにちいさくちぢんでゆき、ついに扇の中にかくれていった。完全にかくれたとき、半蔵の姿はこの場から消えてしまう。
「伊賀流秘伝、見やぶったり！」
半蔵の姿があと一瞬で白扇にかくれてしまう瞬間をとらえて、源心はさけぶなり、鉄扇を白扇へむかってはっしと投じた。
半蔵は白扇を打ちおとされたが、かろうじて鉄扇をよけた。
源心は勢いに乗じてせまってきた。
半蔵は一歩、二歩後退した。
今度は源心が術をかけてきた。
「やあっ」
さけぶと同時に源心は右腕を左右にうちふった。
ぱあっと桜吹雪が舞うように無数のものが源心の手の中から空中に飛び散った。
空中にはなたれた後が異様であった。無数の飛沫が散るように、あるいは落花の雪が舞うごとく、空中いっぱいに散ったものは、まるで一つ一つが生きものであるかのようにうごきだした。羽根がはえた虫のように、幻聴による羽音さえたてて半蔵に空からたかってきた。
「甲賀秘伝〈揚羽舞い〉」
源心の声がきこえた。はじめは桜吹雪くらいの大きさであったものが、しだいに大きく成長し、中には揚羽蝶くらいの大きさになって、半蔵の顔といわず、首筋、襟、袖へむかって飛んできた。
払っても、はらっても、つぎからつぎに大小無数の奇怪な虫が際限なくたかってくる。そしてやがて視界のすべてがそれに占領された。

半蔵は源心の姿が見えなくなった。半蔵がはじめて経験した秘術である。

このような奇怪な虫がこの世にいるわけがない。源心がかけてきた幻覚、幻惑の秘術であることはわかっていても、そこから脱する術がなかった。

つぎに源心の忍び刀がおそってくることは必定である。けれども源心の姿をとらえることができない。

半蔵は身を捨てて、目をとじた。どうせ見えぬものならば、聴覚だけで勝負しようと必死のこころみにでた。

「やあっ！」

源心が斬りこんできた。その掛け声が虚空にひびいた。

「とおっ」

半蔵は無心のうちに空中へ高々と飛んだ。跳躍の瞬間、懐中から忍び刀をぬきはなち、まぢかの揚羽を一刀両断にした。

地上に飛びおりたとき、幻覚は消えていた。空中を無数に飛びかっていた奇怪なものはいっさいなくなっていた。

けれども半蔵は左足の大腿部におもい衝撃をうけていた。かなりの深傷を負ったようだ。

しかしそれ以上のしたたかな手応えをおぼえていた。

桜の根方に、源心の片腕が切りはなされて落ちている。

源心は片腕をうしなって、孤影呆然と立ちつくしていた。

熱風来たる

一

熱風が街道に吹きつけている。

熱風は、南の海をこえて、東海道、江戸湾へ上陸してくる。

梅雨あけに吹く南風を、白南風という。

汐の香とともに砂塵が東海道に舞いあがっている。もうもうと吹きおこって、数間先が見えぬばかりだ。

しかも熱い。

東海道を江戸へむかう者、江戸をたつ者、旅人たちは砂塵と汗にまみれている。

ここは、東海道の玄関口、高輪である。

高輪の大木戸が江戸との境であり、高輪の先が東海道の最初の宿場品川である。

当然のことながら、このあたりは人馬の交通がおおく、茶屋、茶店、飯屋、土産物屋がたちならん

でいる。
店々はヨシズで店頭をおおっているが、暑熱や砂塵をさえぎれない。
牛馬がひっきりなしにとおるので、おとしていく糞がたちまちかわいて、熱風に吹きあげられ、あたりに異臭をはなつ。
ともかくこの時季、日中の高輪は汗と塵、異臭のまじり合った町である。
真夏の太陽が西へまわりかけたころ、品川宿のほうから旅塵にまみれた黒い野袴姿の男がやってきた。
ぬきんでて背丈があるわけでなく、かくべつの偉丈夫ではないが、精悍さが顔と体をつつんでいる。頭髪から足の爪先まで男の汗くささがにおうような者である。
旅の荷物は何一つもっていないが、つれがいた。
十歳前後の少年である。
少年の父親であってもおかしくはない年頃だが、二人にかよい合っているのは肉親の情ではなさそうだ。その男が少年の庇護者であることはまちがいないが、二人のあいだには馴れ合った感情のいきがなかった。
少年は気位が高そうで、利発な顔だちをしている。この容貌をくらべても、二人が父子でないことが想像された。
が、二人の様子を見るかぎり、ふかい信頼でむすばれ合っていることがうかがわれる。
二人はここまで長い旅をかさねてきたようだ。
「江戸はもうすぐ先だ」
男がいうと、

「百日はこえたか」
少年がきいた。はるばる長旅をしてきた感慨が少年の顔に浮かんでいる。
「百日以上の旅でございました。間もなく、江戸の日本橋というところに着きます」
「そこに、ショーグンはいるのか」
「将軍は江戸城という城の中に住んでおります」
「そうか、江戸城の中だな」
「江戸城はふかい濠と堅固な石垣にかこまれており、普通ではそこへ入ることはできません」
男と少年はそんな話をかわしながら、大木戸をとおって江戸へ入っていった。ここの往来には石畳がしかれ、大きな木戸がもうけられている。夜間はこの大木戸が閉ざされ、街道の往来ができなくなる。
二人と前後して、旅人や荷をつんだ牛馬が往来した。
ここはもう江戸である。芝、新橋、日本橋とつづく江戸の幹線道路だ。
夕焼けの赤い雲が、富士、丹沢の山嶺にかかるころ、二人は日本橋についた。
江戸はまだ、日中の暑熱がのこっている。
白南風がはこんでくる海の風にも熱がこもっているのだ。
日本橋は江戸城下の中心地であり、全国里程の起点である。橋のタモトは大きな広場になっている。
広場の右手は青物市場で、左手は高札場と晒し場である。
人の往来はこの時刻もさかんである。橋の下をくぐる船影もひっきりなしに絶え間がない。広場に人影はおおい。武士、町人、百姓、あらゆる階級の人間がここにいる。
男は高札場へちかづいた。

少年がそれについていった。

少年は興味ぶかく広場の風景やそこに集散する人々をながめている。

高札場には大小さまざまの札が立っている。

男は、高札場の下に立った。

〈一、親子兄弟夫婦を始、諸親類にしたしくし、下人等に至るまでこれをあわれむべし。……〉

にはじまる人倫風俗に関する制札、伝馬駄賃に関するさだめ、切支丹禁制の札、不良売薬、毒薬、貨幣贋造に関する禁令などがある。

男はそのうちの一本の高札に見入った。

覚

一、異国へ奉書船のほか、船を遣わすことはかたく停止する。

一、奉書船のほかに日本人を異国へさし遣わしてはあいならぬ。もし忍んでまいった者があった場合は、その者は死罪、その船ならびに船主ともに留置して届けでよ。

一、異国にわたって居住した日本人で、帰ってきた者は死罪に処する。……

男の視線はそこまで読みくだってきて、高札をはなれた。

寛永十年いらいほとんど毎年のように公布されている〈鎖国令〉十七カ条である。

この年寛永十六年で、鎖国令は完成したといわれている。

「なんと書いてある?」

少年がたずねた。

「おれたちのことが書いてある。異国にわたって居住した日本人で、帰ってきた者は死罪に処する、とある」

男は平然とした様子でこたえた。

「死罪か。ちとおもすぎはしないか。人それぞれに事情(わけ)がある。いちがいに死罪とは無茶だ」

分別くさそうに少年は不満の表情を見せた。

「公儀の触れとはこんなものです。いちいち事情をきいていたら、触れにならぬ。いずれにしろ、つかまらなければ死罪にされるわけもない」

男は不敵にいった。

「フドウのいうとおりだ。いくら公儀でもフドウをつかまえることはできまい。死罪にすることはなおさらできない」

少年はそういってわらった。少年は男のことをフドウと呼んだ。目差(まなざし)には尊敬の色がある。

それにしても、十歳前後の少年にしては、言葉がませている。

「それはわからぬ。油断は禁物だ。おれたちをねらう敵はいろいろいる」

男はそういって周囲を見まわした。

二人は今年四月末、最後のポルトガル船サンビセンテ号に乗ってマカオから長崎にやってきた。

長崎出島の厳重な監視をやぶって脱出することができたのは、男が日本古来の特異な武術〈しのび〉の達人だったためである。二人は約一カ月半をついやして、長崎出島から今江戸についたのである。

「今夜とまるところはあるのか」

少年がきいた。

「心配はいらぬ。天下いたるところを我が栖（すみか）とかんがえればいい」
男がそうこたえると、
「それはニンジャのかんがえだ」
と少年はわらった。
「ひとつだけいっておくことがある。マカオ、ポルトガルの言葉はわすれることです。二度と口にしてはなりませぬ。口にすれば、死罪が待っている。おわかりか、国松（くにまつ）さま」
と男は少年の日本名を呼んだ。
「わかった。マカオ、ポルトガルの言葉はわすれよう。日本語だけをはなそう、それでよいな、ふどう丸」
少年はここではじめて男の名をきちんと呼んだ。
男はうなずいた。
男の名は、不動丸。さらにくわしくいえば、甲賀不動丸、である。
「国松さま、後ろをふりかえりますな、今夜の塒（ねぐら）につくまでは、けっしてふりかえってはなりませぬ」
不動丸は日本橋をわたって、大伝馬町のほうへむかいながら注意した。
「何者か、つけてくるのか」
少年はややきびしい顔になった。
「まだ尾行者かどうかわかりません。けれども高輪からずっと後ろについてきている者がいる」
不動丸は前を見ながらいった。
「もうあらわれたか……」

江戸へつけばいずれ危険が待ちうけているのは当然であった。
それを承知で、マカオから波濤何千里をこえて故国へもどってきた。見つかれば死罪が待っているばかりでなく、江戸には不動丸と国松をねらっている者が巷に目をひからしているはずであった。

二

明け方から、うだるように蒸しあつい。
ここは大伝馬町三丁目、またの名を通旅籠町（とおりはたご）という旅籠街だ。
この路地にあるちいさな旅籠丸大屋から、不動丸と国松は早朝のうちにでてきた。
昨夜は丸大屋を塒にしたのである。
「今から江戸の郊外へむかいます」
不動丸はそういって大伝馬町通りをあるきだした。
大伝馬町二丁目、一丁目あたりは問屋街である。木綿問屋、茶問屋、針問屋などが軒をならべている。
朝のはやい問屋街もまだ大戸、暖簾（のれん）をあげている店はほとんどない。
「江戸はむし暑くて、息ぐるしい町だな」
国松がいうと、
「おなじあつさでも、マカオは蒸しませんからな。すごしやすいところでした」
不動丸は国松とともに八年間をすごした異郷をおもいやった。
その八年間で日本は大層かわった。鎖国令で国を海外からとざし、外国人をことごとく追放したば

かりでなく、日本人が海外へでることも禁じた。と同時に海外にでていた日本人は帰国できなくなったのである。

日本は東洋の海に孤立した国になった。

国松が息ぐるしさをおぼえるのはそのためかもしれない。

「おれの生まれた国はこんなところだったのか」

好奇心のせいか、それとも失望のためか、国松はつぶやきをもらした。

「この国が国松さまのためにいいところかどうか、まだわかりません。すくなくともお命をねらっている者は何人もいる」

「それを承知でもどってきたのだ」

「おそらくお父上の墓まいりもかなわぬでしょう」

「そんなことはかまわぬ。けれども父上の遺志はなんとか継ぎたいものだ」

そういったときの国松の顔にはやはり決然たるおもいがひそんでいた。

「それはわたしも同感だ。しかし固い覚悟が必要になるでしょう。今の日本はお父上の敵がおさめている。周囲をすべて敵だとかんがえませねば」

「わかっている。味方はごくわずかだ」

「左様です。そうこころがけておいてください」

二人は江戸城下を西へむかった。

行き先は豊多摩郡渋谷村である。

日本橋からは、かなりの距離がある。

太陽がのぼってくると、昨日にかわらぬ熱暑がおそってきた。

汗と塵にまみれて、二人はあるきつづけた。

昨日感じられた尾行の影らしきものは、今日はなくなっていた。

いつ又あらわれるかもしれないので、警戒はしていた。

後ろからくるのは中年の行商人と若い百姓だが、行商人は新橋のあたりでいなくなり、百姓も芝に入ったころ姿が消えた。

芝をすぎると、江戸はもう田舎の風景である。山林や荒野がひろがり、川や谷もあり、そのあいだに田や畑の耕地がつづく。大名屋敷、旗本屋敷がまばらにたち、農家も点々と見える。まさに武蔵野の景観である。

青山まできたとき、不動丸の視線が一点に吸い寄せられた。

視線の先には変哲もない百姓の姿がある。年ごろは中年。体つきにはなんの特徴もない。

（あの百姓……）

だが、不動丸は芝をすぎたころから見えなくなった百姓ではないかとおもった。衣類の色は黒っぽいものから藍色にかわっている。けれども全体の姿の印象が酷似しているのだ。

忍者は人を記憶する場合に衣類や持物、さらに年齢などではおぼえない。そんなものは瞬時のうちにかえることができるからだ。

その人間の姿、形などかえることのできぬもので記憶にとどめる。全体でも部分でもかまわぬ。

コツさえつかんで修練をかさねれば、この鑑別法のほうがまちがいがない。

芝で消えた百姓が青山でふたたびあらわれるのはおかしい。

不動丸はあるきながら、この百姓を注意していた。

国松にはいわなかった。いえば国松が意識をして、こちらが気づいたことを相手にさとられるから

だ。

原宿村をとおって、渋谷村にちかづいていった。

この道は百人町、宮益坂、道玄坂とつづく。

宮益坂をちかくにしたとき、前をゆく百姓の姿がふたたび消えた。

不動丸のおもいすごしだったのかもしれぬ。

渋谷往還から村道へ入った。

かなり大きな垣根がこいをした百姓家が正面に見えてきた。

不動丸がその家の門へちかづこうとしたとき、

「もし」

とつぜん、横手から声をかけられた。

ふりむくと、農家の女房姿ながらも、いかにも見目のすぐれた女が村道に立っている。年は三十路に達したばかりのころだが、ひなびた中にも臈たけたうつくしさと色香を感じさせる女である。

「不動丸さま……」

「おもんさま」

二人はほとんど同時に呼び合った。

義理の姉と弟である。

「日本は国を閉ざしたそうですが、いつ日本に？」

「江戸には昨日もどりました。兄が死んだときました」

「六年前になくなりました」

「相手は服部半蔵だそうだが」

「服部半蔵と試合をいたして、亡くなりました。仕方がありません。道順は試合にやぶれたのですから」

明快すぎる返事を女は口にした。

おもんは甲賀毘沙門天道順の妻であり、不動丸の義姉であった。

「もしや、そちらのお方は……」

おもんは国松を見ていった。

「駿河大納言忠長さまの遺児、国松君だ」

不動丸は国松の素姓をあかした。

国松の名はかつて忠長の幼名でもあった。

「そのようなお方様をこんな荒家に」

おもんは国松にたいしてうやうやしく礼をした。

大納言忠長は二代将軍秀忠の三男であり、三代将軍家光の弟であった。幼少年時代は忠長のほうが利発で、父母の愛情も兄よりは弟のほうにふかかった。それが忠長の悲劇であったというべきで、忠長は家光と将軍位をあらそい、やぶれ、非業の運命をたどったのだった。

「おれは二歳のときから不動丸とともに異国にくらし、荒家にはなれている。遠慮は無用だ」

国松はおもんにそういった。

「忠長さまは幕命によって甲斐へ配流されましたとき、このままでは国松君の御命があぶないと察せられて、わたしたち兄弟に託された。この国は天下六十余州将軍のおさめるところであるから、将軍ににらまれた者は寸土といえども安全な地はない。それでわたしが国松君を背負ってポルトガル船に乗り、日本を脱出した。そして兄道順が最後まで忠長さまのおそばにおつかえしたのだ」

「世が世ならばお姿をおがむこともできないお方を……。わたしは大納言さまにおつかえいたしました道順の連れあいです」

おもんは身もちぢむような様子で国松を座敷へあげた。

「道順にはわが父が大層世話になったそうだ。かわって礼をいいたい。甲賀最高の忍者であったと聞く。位牌に線香をたむけたい」

武門最高の血筋に生まれながら、幼少のころからの異郷ぐらしで、国松は年齢よりはるかにおとなび、苦労もかさねていた。

「国松君はかかるお血筋の人だから、日本にもどったことがわかれば、お命をうかがう者もいるだろう。幕府でもきっと見逃してはおかぬはずだ。かといって滅多なところへおつれいたすわけにはいかぬ。つまるところ、義姉上をたよって、ここにまいった。国松君のお世話をいたしてもらいたい」

不動丸がそういうと、おもんは畳に両手をついた。

「もったいないことでございます。けれども若君さまにとりましては今が大変なときでございます。このようなところでは大したお世話もいたすことはできませんが、ぜひご逗留くださいませ。それが亡き夫の遺志に添うことでございましょう」

おもんは二つ返事で引きうけてくれた。

「おれは江戸でいろいろなさねばならぬ仕事がある。時いたるまで国松君のご面倒を見てもらいたい」

不動丸ははじめからおもんをあてにしてマカオから日本に引きあげてきたのだ。

「おもん、よろしくたのむ」

国松はみずから言葉を添えたので、おもんはなおさら恐縮して両手をついた。

「甲賀の中で、かわったことはないか。兄が半蔵にやぶれたために、甲賀者一同さぞ肩身のせまいおもいをいたしているだろう」

これも不動丸にとっては気にかかることであった。不動丸には毘沙門天の弟としての責任感がいくらかあった。

マカオを去って危険の渦巻く故国にもどってきたのも、国松の将来とのこされた甲賀者たちのことをかんがえてのことだ。

「大黒天源心が服部半蔵に勝負をいどんだとききました。決着はいまだ……」

大黒天のことを口にしたとき、おもんの口がやや滑らかさを欠いた。できれば触れたくないような口のおもさだ。

「大黒天は毘沙門天につぐ甲賀第二の者だ。この地位にある者は毘沙門天にかわって甲賀の誇りをまもらなければならぬ。源心が毘沙門天の地位につくためには、伊賀の半蔵をたおさねばならぬ」

不動丸はきびしい表情でいった。

三

一面に緑の世界がひろがっている。

その中を一本の灌漑用水路がつらぬいている。

田圃は今、一番草の季節である。

炎天下に白い笠をつけた農夫が、苗の緑の中にうずくまって草取りをしている姿があちこちに見える。

上をむけば白い雲。
田のむこうには武蔵野の山林が遥々とつらなる。
不動丸は一筋の村道をあるいてきた。
国松をおもんの家にあずけてきたので、ひとまず肩の荷がおりた。
けれどもそういつまでも国松のような貴種を百姓家にあずけておくことはできぬ。いずれはしかるべき人物に託して養育してもらわねばならないのだ。
おもいあたる人物が幾人かいるが、先方がひきうけてくれるかどうか自信がなかった。国松の養育をひきうけることは、幕府にたいして弓をひく者とうけとられる心配があるからだ。
身は将軍の孫、あるいは将軍の甥と生まれながら、ひろい天下に雨露をしのぐ栖(すみか)すら持たぬ国松があわれにおもえた。
世が世ならば将軍の子とはならずとも、せめて将軍の甥として江戸城内に屋敷をたまわるか、何十万石かの太守におさまる身である。その身がたった一人の甲賀者だけをたよって世にかくれた生活をしのばねばならぬことに不動丸のこころはいたんだ。
国松の行く末をかんがえれば、我が身は大切である。けれども我が身はこれから数多くの敵と戦いをまじえていかねばならぬ運命にある。
そうかんがえてきたとき、ふと、背後からくる人影が気になった。
(……?)
行商人のような風体をしている。
よもや、くるときに新橋あたりまで付けていたかに見えた行商人ではあるまいとおもった。
けれども、よもやというかんがえは持たぬ習慣が身についている。よもや、とかんがえて命をうしなった者は今まで数かぎりなくいるはずである。
まして、忍者の世界に、よもやはない。
村道をまがるときにうかがうと、衣類はあきらかにちがう。かかえている荷物もちがう。今のほうが大きな荷になっている。
年齢も朝見たときは四十代くらいに見えたが、今は二十代だ。
遠くから外観だけを見ると、似ているところはほとんどない。
もしうたがうとすれば、外観がほとんど似ていないことだ。
最大の共通点をあげるならば、両者とも不動丸の約半丁ほど後ろをひたひたとあるいてくることだ。
不動丸は背後を警戒しながらあるいた。
行商人の足がはやくなったようだ。
気がつくと、間隔は今までの半分ほどにちぢまっていた。
しばらくいくと、もう数間後ろにせまっていた。
前方には田と畑がひろがっている。
田の草を取っている農夫が四半丁(二十余米(メートル))ほど先にいる。
白昼、人目のあるところでは襲撃はあるまいとおもうべきだが、不動丸は最悪の場合を予想した。
背後からちかづく足音とかすかな気息がつたわった。
「何用だ?」
と向きなおったとき、すでに一尺余寸の長さの忍び刀をぬきはなった行商人がすぐ背後にせまっていた。
「問答無用っ」

その一語とともに、するどい切っ先がおそいかかった。
不動丸はすかさず飛びのいた。
右手ははやくも同様の忍び刀をにぎっていた。
「昨日(きのう)からまつわりついていた糞蠅(くそばえ)だな」
一度空を切らせておいて、不動丸は相手の様子を見た。素姓と力量をはかってみた。
忍者であることはまちがいない。
相手は返事をしないで、また飛びこんできた。
初回以上にするどい攻撃が顔面をねらってきた。
今度も一歩、不動丸はさがった。さがりながら、相手の力量を見きわめた。
(強敵だが、負けるおそれはない)
とふんだ。
「服部半蔵の手の者だな」
二度めも空を切った敵にむかっていった。
むろん、返事はなかった。
反応もうかがえなかった。
「無駄な闘いだ。得物をひけ!」
不動丸はいった。不動丸にとっては目的のない、益なき闘いになるからだ。
しかし、相手の戦意はくずれなかった。三度目の攻撃をしかけてきた。
今度は胸だ。左胸をねらって体ごとするどい突き攻撃をくりだしてきた。
「お前では無理だ。半蔵とならば闘おう」

相手の忍び刀をはらいざまいった。
が、敵は聞く耳を持たぬようだ。武器をひこうとはしない。遮二無二、攻撃をつづけてきた。
恐れを知らぬ敵だ。
忍者でも、恐れは知っている。知らぬは下等の忍者だ。恐れを知らぬ忍者はいずれかのうちに淘汰される。
相手はいやでも勝負を決するつもりのようだ。
不動丸は日本にかえってきて早々のうちから殺生をするのが、億劫(おっくう)だった。できれば避けたいとおもった。
けれどもそれは無理のようだ。帰国早々、殺生の剣をふるわなければならなくなった。
背後に田の草取りをする百姓がいるのをおもいだした。
不動丸はふと疑惑をいだいた。
一瞬、間をつくって、背後をふりむいた。
(あっ……)
あやうく声をはなちそうになった。
四半丁ほど後ろにいるとおもった百姓が、すぐ数間後ろにいた。今しがた田の中からでてきた泥水だらけの姿に、なんと得物をにぎっている。
一方の敵が恐れを知らなかったのはこのためだった。
不動丸は罠にはまった。
罠も戦術のひとつである。
不動丸は自分の勘がくるっているのだとおもった。八年も日本を留守にして、長期間の船旅をへて

かえってきたので、微妙な勘がもどらなかったのだ。
不動丸はあたらしい敵にねらいをつけた。
二人以上の敵とたたかうときは、二人とも相手にしては駄目だ。敵をしぼらなければならぬ。しかも相手は周到な敵だ。準備を十分したうえで、攻撃にでてきた。第二第三の用意があると見なければならぬ。
行商人へ忍び刀をむけ、こちらを攻めると見せ、
「やあっ！」
音声をほとばしらせて、猛然と地を蹴った。反対へ疾走を開始するとほとんど同時に、空中へ飛びあがった。
不動丸の体は空中で左右に一回転し、両足が高くしない、ひねりをきかせた右足の蹴りが百姓の顔面めがけて飛んだ。
不動丸はマカオで中国につたわる古武道の拳法を習得していた。
百姓もさる者である。手にした鍬を一と振りすると、先端の鉄器の部分が前にはずれ、かわって、槍の穂先があらわれた。周到に準備した隠し武器だ。
その武器が唸りを生じた。
唸りの間隙を縫うように、不動丸の右足は相手の顎(あご)もくだけよと蹴(け)あげた。
したたかな反応があった。
相手の体は四、五間とんで、田圃の中へおち、隠し武器は手をはなれ、道端にころがった。
顎の骨は折れ、歯はほとんど飛びちった。
不動丸は止(とど)めの攻撃にはでなかった。相手は一撃で戦意をうしなった模様だ。

不動丸はあらためて行商人へ忍び刀をむけた。
忍び刀をかざした行商人が突進してきた。
その勢いに負けぬために、不動丸も突進をはじめた。
たちまち距離はせばまった。
両者の忍び刀が激突し、打ち合った。
不動丸の忍び刀は刀身のほぼ中央で折れた。
相手の忍び刀は高々と空中へ舞いあがった。
両者の体が交錯する瞬前、
「ええいっ」
行商人は忍び刀が手をはなれると同時に、懐中から隠し武器の短刀を抜きはなった。
瞬間、不動丸も鎧通しを抜き合わせていた。
ふたたび兇器と兇器がはげしく打ち合い、その一方が地上に落ちた。
「おぬしら、甲賀者か？」
不動丸の胸中におどろきがはしった。
甲賀者は味方だという、不動丸の確信がそのときからくずれはじめた。
行商人はまだ闘志をうしなっていなかった。
素手のままなお執拗に、不動丸の隙をうかがった。
「同士討ちはやらぬ」
不動丸はそういって、鎧通しを懐中におさめた。
行商人はすばやく短刀をひろいあげ、なおも勝負をつづけようとした。

「勝負はすでについた。おれをたおしたければ、大黒天自身がでてくることだ。源心にそうつたえておけ」

不動丸はきびしく叱咤した。

その顔には確信を打ちくだかれた衝撃の跡が尾をひいていた。

不動丸は襲撃者一人をのこしたまま、その場を立ち去った。

四

夕闇があたりをおおいだした。

小石川伝通院の五重塔が夕闇の中に姿を没しかけている。阿弥陀堂の甍はもう見えなくなった。

伝通院の鐘はしばらく前に暮れ六ツを鳴らした。

広大な境内には人影もない。と見えたが、わずかに例外があった。開山堂の裏をとおって阿弥陀堂の裏手へ音もなくむかう二つの人影があった。

伝通院境内の裏には小高い山林がひろがっている。阿弥陀堂の裏に山林へぬけるほそい道がある。

二つの影は阿弥陀堂から山林へぬけた。

山林の中は先が見とおせないほど暗い。

二人は山林の中をまよわずにあるいた。

やがて山林をぬけると、ややひろい場所にでた。

寺院の境内のようなところだが、人間のにおいがまったくしない場所である。かつては人間が住んでいたのであろうが、今は無住の廃寺となっている。

くずれかけ、なかば朽ちかけた伽藍がのこっている。本堂、方丈、庫裡、鐘楼、山門などである。

山林つづきの境内には樹木がしげり、夏草がのび、地に苔やシダ類が這っている。

昼間でも人が寄りつかない。そのかわりに境内は野鳥や狐狸の棲家になっている。

二人は境内に入り、本堂の横手にある方丈へちかづいていった。

朽ちはてた木戸の跡があり、そこをとおって方丈の縁へあがった。

方丈の中は薄ら闇だが、一カ所に灯のゆらめきがあり、その周囲だけあかるくなっている。

灯のほぼ中心に、一人の男がうずくまるように背をまげ、無心に何事かに没頭している。しかも片腕一本でそれに従事しているのだ。

もう一方の片手は肘のところで切断されていて、袂がぶらんと垂れさがっている。

しかも、男の前にはまだつくりかけの木製の義手がある。男はみずからけずりあげた義手に鹿のなめし皮をはりつける作業に没頭しているのだ。

木製の義手は今切断したばかりの本物に見まごうばかり精巧につくられ、手首の筋から五本の指の爪まで彫りあげられている。

男の体から発する精気やにおいは若々しいが、容貌には老いの翳ににたものさえうかがわれる。

片腕をうしなった精神のゆがみと憎悪が容貌に翳をつくったのだろう。

そのとき、男の手のうごきがとまった。

ややあってから、

「寿と、七面」

外へむかって男は声をかけた。

「寿の三郎にございます」

「七面の鶴でございます」
二人の返事がかえってきた。
やがて、闇の中から二人の男が行灯の明りの中に姿をあらわした。
百姓の姿をしたのが寿の三郎で、行商人の風体をつくっているのが七面の鶴である。
しかも寿の首から顎にかけてぐるぐるに晒で巻かれている。
「しくじったな」
そうきいた片腕の男は甲賀大黒天源心である。
「相手は尋常の男ではありませんでした」
七面がこたえたとき、
「かりにも毘沙門天道順の弟だ。尋常であろうはずがない」
源心は吐き捨てるようにいった。
そしてふたたび作業をはじめた。木製の義手に鹿皮がかぶせられ、巻きつけられると、血のかよっている肉体の一部のように見えてきた。
「不動丸は渋谷村のおもん様の家に国松君をあずけて、一人もどりました」
七面はいった。
「国松君がおとどまりになれるところは、まずそこであろう」
源心は顔をあげずにいった。
「不動丸の帰途を待って仕掛けましたが、なにさま相手がつよすぎました」
「顎を蹴られたな。不動丸はマカオで拳法を身につけたのであろう。もし延髄に足が入っていたら、即死だ。不動丸はあえてはずしたのだろう」

源心は怪我の様子を見ただけでそういいあてた。
「不動丸は今後も十分警戒をいたさなければなりませぬ。しかもこちらの正体についても察した様子でした」
「左様か。今後は半蔵ばかりでなく、不動丸をも敵にいたさねばならぬ。不動丸にはこれからもよく目をくばっておけ」
七面がつげると、源心はうめくようにいった。
「国松君はいかがいたしましょう」
「しばらくそのままにしておいてよかろう。国松君はわれわれにとっても大切なお方だ。伊賀者にねらわれてはまずい」
「うけたまわりました」
「寿、傷養生に専念いたせ」
源心はそういうと、もうその場に二人の手下がいるのもわすれたようにふたたび作業に没頭していった。
寿の三郎と七面の鶴は一礼し、その場をさがっていった。
源心の傷のうずきはもうほとんどなかった。半蔵に切断された部分にはあたらしい肉が盛りあがり、きれいにふさがっていた。
片腕の生活にも慣れた。もう不自由はない。
けれども、源心の胸にきざまれた疵跡はまだいえず、うずきもやわらがなかった。半蔵への憎悪と敵愾心はつのるばかりであった。
今源心の胸のうちにある野心は、半蔵との勝負に勝ち、甲賀最高位の毘沙門天の称号を得ることで

ある。

そのために邪魔になるものは、ことごとく打ちたおしていかねばならぬ。そして自分の手で甲賀の復活を達成することをみずからに課していた。

不動丸の日本帰還をいちはやく察し、これをたおそうとしたのも、この目的のためであった。

源心はかねてから不動丸に恐れをいだいていた。不動丸の存在が源心の野望をはばむおそれがあった。

不動丸が日本にいなかったから、源心は大黒天の称号を得ることができたのかもしれぬ。これはほかの甲賀者も、源心自身もかんがえていることである。

不動丸が日本にかえってくることを、源心はずっとおそれていた。

かえってきた以上、不動丸をたおさねばならぬ。たおさねば、毘沙門天の地位はおろか、大黒天の地位さえうしないかねぬと想像した。

しかも、今日の襲撃とその失敗によって、つぎには不動丸が戦いをいどんでくる可能性もうまれた。

源心は作業をつづけながら、不動丸との戦いをかんがえた。

五

熱暑の夏はまだつづいている。

国松と不動丸が帰還してから、約一カ月がたった。

日本は、鎖国というあたらしい時代に入ってからまだ日があさい。

キリシタンや鎖国令の違反者たちの国外追放、もしくは処刑が相ついでいた。幕府は鎖国を完璧に

実現するために、きびしい態度でのぞんだ。

熱風の吹く昼下り——。

おのれのみじかい影法師をふんで、不動丸と国松は赤坂御門をくぐった。

今朝、不動丸は渋谷村へむかい、久方ぶりに国松の元気な姿に接した。国松はおもんの家の子としてくらし、近所の少年たちとあそぶようになっていた。桔梗（ききょう）の弟として、姉弟の仲もむつまじくなった。

国松はおもんが新調した筒袖の着物におなじく仕立ておろしの帯をしめて、不動丸につれられてきたのである。

熱暑が二人の頭上にふりそそいでいる。

本当に今年の夏は異常なあつさだ。猛暑のおとろえる兆しはまったく見られなかった。

赤坂御門の内側は武家地である。大名屋敷と旗本屋敷がつづいている。

御門の先を左へまがれば、諏訪坂である。

赤坂一帯といえば、その名のごとく坂のおおいところだ。諏訪坂、紀尾井坂、清水坂、貝坂などだ。

不動丸と国松は諏訪坂を下りすすんだ。

坂の左手は紀州家の中屋敷（なかやしき）である。坂の途中に中屋敷の門がある。

武家地だけに人けのない、しずかなところだ。坂には、ほかに人影も見えぬ。

不動丸は中屋敷の通用門をたたいた。

来訪をかねてつげてあったので、門番にむかえられ、すぐ中にとおされた。

不動丸一人ならば、このような段取りをふむこともない。塀をとびこえれば、ただちに中屋敷の庭

に入ることができる。
今日は国松と一緒であるから、盗賊のような真似はできぬ。
玄関の前には、麻裃に威儀をただした紀州家の江戸家老水野土佐守春央が藩主頼宣の近習とともに国松を待ちうけていた。
「これはこれは、大納言さまの若君国松さま、ようこそおいでなされました」
水野土佐守は国松を高崎に幽閉された幕府罪人の子としてではなく、駿河大納言の嫡男としてむかえた。
「余は徳川国松である。本日は紀伊大納言様に謁見をたまわるためにおうかがいいたした」
国松は不動丸におしえられたとおり挨拶をした。少年ながら、さすがに血筋はあらそえぬ。りりしい立派な態度である。
「こちらへおとおりくださいませ」
水野土佐守は玄関ではなく、庭へつうじる木戸口に国松を案内した。
国松は雰囲気に気圧される様子はすこしもなく、すたすたと木戸をとおった。
木戸のむこうには緑の色彩もあざやかな庭園がひろがっている。石組にかこまれた大きな池があり、岩をつたってながれる水がいかにもすずしそうだ。
池からすこしはなれたところに、築山があり、その中腹あたりに東屋がもうけてある。
東屋の椅子にすわって悠然といこう人影がある。
その背後には太刀をささげ持つ近習の姿が見えた。
「あちらの東屋へ」
と水野土佐守はいってみずから先導した。

まず国松が、つづいて不動丸がその後にしたがった。
苑路を築山の麓まできたとき、東屋の人物が立ちあがった。
「やあ、国松君、ようこそ。大きゅうなられましたな」
頼宣が白扇を片手にして声をかけてきた。いかにも〈南海の竜〉と呼ばれるにふさわしい豪放磊落な人柄をしのばせる。今年三十八歳の男ざかりが感じられる。
「初に謁見をたまわります。徳川国松にござります。大叔父さまにおかれましては、大層ご壮健にてうるわしゅう存じあげます」
国松は頼宣の前で一度直立し、深々と一礼した。
「国松君にお会いできてうれしい。亡き大納言どのの面影がしのばれる。幼くしてご災難に会われたが、よく艱難をしのばれてここまで立派におそだちになられた。大したものでござる」
頼宣は甥であり、かつての盟友であった忠長への哀惜もこめて国松の無事と成長をよろこんだ。
「大納言さまには亡き父が大層おせわになったとうかがいまする。かわってわたくしから御礼申しあげます。それからわたくしが今日まで無事にながらえることができましたのは、ここにおります甲賀不動丸が献身いたしてくれました賜にございます」
国松はそういって不動丸を頼宣に紹介した。
「そのほうが不動丸であるか。よくぞ国松君をお世話いたしてくれた。見あげたこころねである。そのほうの兄毘沙門天は古今稀なる忍者の頭領であった。大納言どのを最後までおまもりいたしたが、天運の味方なく、伊賀の服部半蔵のためにやぶれた。まこと残念なことであった」
頼宣は不動丸にたいして言葉をあたえた。頼宣は忠長を最後まで支援した唯一人の大名であり、忠長、国松父子にたいするかくべつのおもいがあるようだ。

「大納言様には謁見をたまわるだけで望外のしあわせにございます。さらに亡兄にたいするお言葉までいただきまして、これにまさるよろこびはございません」

不動丸は東屋の前に平伏して言上した。

今日の謁見は不動丸がひそかに紀州家へ書を奉じて実現したものである。

不動丸は国松がこの日本において成人していくためには、しかるべき人物の後楯が必要だとおもっていた。そのために紀州頼宣と、忠長の墓がある高崎大信寺住職に依頼したところ、頼宣の快諾が得られたのである。

「大納言どのにとって三人の叔父がいたわけだが、中でも余がいちばん気が合って昵懇にさせてもらった。大納言どのはまことにご不運な方であった。そのご最期をおもうと、余も無念だ。しかし大納言どのはご立派なお子を世にのこされた。国松君のご将来には余も期待をいたしておる。不動丸、そのほう今後とも国松君のために必死の奉公いたしてくれ、余もできる力添えはなんなりといたそう」

頼宣はそういってくれた。

「お言葉ありがたくうけたまわります。今後とも国松君に粉骨砕身のご奉公をいたす所存にございます」

不動丸は平伏に平伏をかさねた。

「国松君はまだおさない上、お血筋柄、なにかと世間の目もうるさかろう。よろしかったら、この屋敷にご逗留くださってはどうか。ここは中屋敷ゆえ、そう面倒なことはあるまい。今日からでも、ここにおうつりなされるがいい」

頼宣は国松の身柄いっさいをひきうけてくれた。紀州家の上屋敷は江戸城内にあるため、この中屋敷が国松をかくまうには最適というのだ。いかにも頼宣らしい大胆不敵さである。

不動丸はいささかこころにひっかかるものがあった。

それはこの屋敷の立地上の問題である。

この紀尾井坂には、紀州、尾張、井伊家の中屋敷が三方に立ちならんでいる。のこる一方には稲垣信濃守の上屋敷があるが、その隣家が問題なのである。

稲垣家の隣家といえば、かつて伊賀組頭領服部半蔵の屋敷であった。

すなわち、紀州家中屋敷とかつての服部半蔵屋敷は道一筋を境に背中合わせになっている。今は空屋敷とされているが、三代目半蔵が住んでいることは知る人ぞ知る。

「裏屋敷がいささか剣呑でござりまするが……」

今までだまってきいていた水野土佐守が言葉をはさんだ。

「灯台下くらし、とも申しまする。裏屋敷でも、よもやここに国松君がおいでになるとはかんがえますまい」

水野土佐守はそういった。

「伊賀者頭領の屋敷からちかいか遠いかは、さほど問題ではあるまい。居場所がわかれば、遠いところでも乗りこんでくる。ちかくてもおなじであろう」

頼宣はかんたんに結論をくだした。頼宣ははじめて見た甥の遺児を気に入った様子である。

「では国松君、本日からここへおうつりくださりませ」

水野土佐守もすすめた。

「ご好意のほどありがたくうけたまわります。よろしくおねがい申しあげます」

国松はそうこたえた。

紀州家をでたときの不動丸は一人であった。
国松には中屋敷のなかに部屋があたえられたのである。国松の世話をする近習と腰元もつけられた。
不動丸は中屋敷をでて、諏訪坂をくだった。
きたときと反対の道をとった。
紀州家中屋敷の裏を一見しておきたかったのだ。
諏訪坂をおりきって、紀州家の塀ぞいにまがった。
しばらくいくと、半蔵屋敷が見えてきた。
塀はくずれかけ、門柱も扉もなかばこわれているが、修繕の跡はさらにない。廃(すたれ)屋敷か空屋敷のごとくである。
門は坂道に面しており、紀州家の裏塀を前にしている。
半蔵屋敷はしずまりかえっている。
ただささえ、昼間でも紀尾井坂は人通りのすくないところだ。
ようやく薄暮がおとずれかけている。
不動丸は半蔵屋敷の前をとおりすぎた。
真っすぐいけば、清水谷だ。
不動丸はいやな感じがした。
なにか背後で出そうな気がした。
できれば出ないでほしいとおもった。半蔵のひきいる伊賀者とは今たたかいたくなかった。
やるならば、大黒天との決着をつけてからにしたかった。
清水谷がちかづいた。

熱風はこの時刻になっても、まだおさまらぬ。坂の上から吹きおろしてきた。
風とともに妖魔がちかづいた……、そんな気がした。
坂道の両側に、大名屋敷の長い塀が切り立っている。
その塀の上をつたって、とつぜん妖魔がせまった。
黒い影が塀の上をはしった。
大きな猫か狐が塀の上をつたって前方へはしり去った。
不動丸は目をこらした。猫や狐にしても、影は大きすぎた。
つづいてもう一匹、黒い影が背後からせまった。
そして塀の上から不動丸にむかって翔(と)んだ。
その瞬前、不動丸は坂道を疾走していた。
大きく翔んだ妖魔は空中で忍び刀をぬいていた。
不動丸も忍び刀をぬきながら、かいくぐるように妖魔がえがいた円弧の下をはしりぬけた。
はしりぬける瞬間、不動丸は忍び刀を頭上へ垂直にあげた。
予期したとおりの手ごたえがかえってきた。
切っ先が妖魔の股間を裂いたのだ。
不動丸は頭上から血汐をあびた。
が、不動丸は疾走をやめなかった。
先頭の黒い影はすでに清水谷へはしり去っていた。
清水谷にいたる前に、稲垣家の裏庭からのびた大きな栃(とち)の木の大枝が坂道にのびている。
不動丸は栃の木の大枝の下にさしかかった。

頭上の高い大枝から、黒い影がおちてきた。
それもつづけて三つ、舞いおちた。
「やっ」
押しころした気合を発して、不動丸は最初の影を両断した。影は二つに割れて地にくずれおちた。
のこり二つの影が同時におそいかかってきた。
たちまち不動丸は塀の下に追いつめられた。
忍び刀が左右から不動丸にせまった。
不動丸のうごきが、ここで一瞬とまった。
二人が同時に斬りこんだ。
その瞬間をとらえ、不動丸は忍び刀の柄の先端に仕込んでおいた目つぶしを投じた。
「ああっ……」
二人は手で目をおおった。
直後、不動丸の忍び刀が二度うなった。
そのたびに忍者は地に這っていった。
これで不動丸は四人たおした。
が、まだ一人のこっている。これが最後の敵である。いちばんはじめに、塀上を疾走していった猫か狐をおもわせる敵である。
音もなく、その敵がもどってきた。
塀上をつたってせまってきた。
敵が翔んだ。片手に忍び刀をかざしている。

不動丸は地上からそれをねらった。
不動丸は相手の忍び刀をかわした。と同時におのれの忍び刀を相手の頭上に振り下した。
（やった！）
脳天を割ったとおもったが、敵はなんと自分の片腕で忍び刀をうけた。想像もできぬ防禦法であった。
片腕が肘のところからとんで、空中に舞いあがった。
けれども敵は微塵も動揺を見せぬばかりか、体勢もくずさぬ。痛みもまったく見せぬ。
不動丸のほうが動揺した。人間わざとはおもえなかった。文字どおりの妖魔かとおもった。
「不動丸よ、初見参だ。戦いが長びくと伊賀者に気(け)どられる。ここは半蔵屋敷がちかい。勝負はあずかりだ」
その敵がいった。
不動丸は驚愕におそわれた。敵の正体が判明した。
「おぬしは、甲賀大黒天……」
うめくようにいった。
「おれの左腕はいくらでも生(は)えてくる。今度はお前の腕をもらうぞ」
いいのこすと同時に、大黒天は身をひるがえした。
塀の上に飛びのり、そのまま夕闇の中へ消えていった。

迅雷の如く

一

風がうなっている。

砂塵をまきあげて、江戸市中を吹きすさんでいる。

江戸は気候があらく、四季それぞれに風がつよい。江戸城の拡張工事や城下町の整備をつねにおこなっているので、市中はいつでも埃(ほこり)だらけだ。

そのうえ初秋の嵐とくれば、もう目をあけて大路、小路をあるくことができない。若い娘が着物、小袖の裾をおもいきりまくりあげられて立往生したり、悲鳴をあげて路上にうずくまる光景にもときにぶつかる。

まだ昼下りだというのに、江戸市中の上空は灰色にくもり、まるで夕方をおもわすような空気である。

今年（寛永十六年）は、幕府が何年もかかってようやく鎖国を完成させた年であり、昨年は猖獗(しょうけつ)

をきわめた島原の乱をようやく鎮圧した年であった。近年、老中、若年寄、さらに大老などの諸制がしかれ、三代将軍をむかえた幕閣職制もようやくととのいはじめたが、それでも幕府の前途はまだ多難であった。

世に浪人はあふれ、旗本奴、町奴などのかぶき者は横行し、治安は十分ととのってはいない。辻斬り、喧嘩殺傷、盗みなどは江戸市中で日常茶飯事となっていた。そのうえ火事も頻発し、江戸はそう安全で住みよい町とはいえなかった。

その江戸の治安をおさめる町奉行所は、北は大橋（常盤橋）門内、南は後藤橋（呉服橋）門内にあった。

月番の北町奉行所では、奉行朝倉石見守在重(いわみのかみありしげ)が執務中の用部屋から、小用のために座をたったところだ。

朝倉石見守は今月、奉行に新任されたばかりの身であり、まだ年もわかく、町奉行という要職についたことをよろこんでおり、職務遂行の熱意にもえていた。

石見守は廊下をとおりぬけて、厠(かわや)に入り、用たしをしてから、用部屋へむかった。

屋根の上空では、風が轟々と音をたてており、まだ未(ひつじ)の刻だというのにときたま薄暗い中庭にピカ、ピカッとひかるのが見えた。

（どうやら迅雷がきそうだ）

石見守はそうおもいながら、控えの間をとおり、さらに三之間、二之間をとおった。三之間と二之間には内与力がつめていて、執務している。

用部屋に入ったとき、

（……？）

石見守はふと不審をおぼえた。
用部屋のたたずまいになんとなく違和感をいだいたのだ。でていく前ともどってきたときでたたずまいが変化したようにおもった。
わずかな違和感だが、石見守は気になった。
石見守は用部屋の中を見まわした。
十畳ほどの部屋で、奉行の机の脇に小姓と祐筆の机が一つずつならんでいる。簡素ながらも一間半の床の間がついており、山萩をえがいた掛軸がつるされ、焼物の壺が一つおいてある。
「あっ……」
おもわず石見守は声をもらした。
「いかがいたしましたか」
小姓と祐筆が顔をあげ、小姓のほうがたずねた。
「あれを見よ」
石見守は理由(わけ)はいわずに、床の間を目でしめした。
「あれっ、いつの間に……」
「どうしたことだ」
小姓と祐筆はほとんど同時に声をあげた。
「わしがでていくときは、あのようになっていなかった」
床の間の壺が逆さにむいて立っているのだ。口が下をむき、底が天井をさしている。
「こんな馬鹿なことが……、かようないたずらをいたす者は一人もおりません」
「どうして、こんなことが？　いつ……」

二人は声を合わせていった。
「わしがもどるまでに、入ってきた者はおるか」
「誰もおりません。何者も入ってまいりませんでした」
小姓と祐筆は狐につままれたような顔をした。
石見守自身も不可解でならなかった。うそ寒さをおぼえた。
「何事もおこらなかったか」
かさねてきくと、
「何もおこりませんでした。御奉行がでていらしてもどられるまで、何事もありませんでした。二之間、三之間から入ってきた者もおりません」
二人は顔を見合わせ、不思議でたまらぬようにこたえた。
用部屋におこった異常はこればかりではなかった。
「おおっ、あれを見よ！　なんたることだ」
石見守は今度は掛軸を指さしていった。
掛軸は逆さにつるされてはいなかった。けれども只事でないいたずらがほどこされている。
「文字が……」
二人は唖然として、床の間へ寄っていった。
掛軸の萩の花のうえに文字がつらねてあるのだ。
〈ポルトガルの船にて入国いたした鼠、通(とおり)旅籠(はたご)町の丸大屋にひそんでいる〉
やや乱筆ではあるが墨痕ははっきりと右のようにしるしてあった。
石見守はすばやくその文字を読みくだした。

密告の文である。

鎖国令に違反した者が旅籠丸大屋にひそんでいるという密告だ。

「一体これは……」

町奉行所に密告がおこなわれることはしばしばある。大がかりな盗賊団が一網打尽にされたりするような場合は、大概一味の仲間割れなどによる密告が原因である。

けれどもこのような密告は前代未聞だ。

「こんなことがおこるはずはない。拙者も宮本どのも、一歩も御用部屋をでておりません」

小姓は悲鳴をあげるようにいった。宮本というのは祐筆の姓である。

「前野どのも拙者もずっとここにすわっておりました。何者かが御用部屋に入ってきて、床の間の壺を逆さにおきかえ、掛軸に密告文を書いていくなどということはありませんでした」

祐筆も気味わるそうにいった。前野は小姓のことである。

「おかしい。なにか事情があるにちがいない。二人ともそろってうたた寝をしていたわけではあるまい。しかも外部から曲者が入ってくるとすれば、控えの間、三之間、二之間をかならずとおらなければならぬ。無事にとおれるわけがない」

石見守がそういったが、前野も宮本も返事のしようがなかった。

「妖魔がしのび入りましたか？」

「もののけのせいでございましょうか」

二人は顔を見合わせていった。

妖魔だのもののけなどをおそれるのは朝廷のやんごとなき貴族たちのことである。武士たる者が口にすべきことではなかった。けれども二人は、もしかしたらそのせいではないかと思案した。

「ささいなことでもよい。わしのわずかな留守のあいだに、なにかおこったかどうかおもいだしてみよ」

石見守としても、尋常でない事柄だけにこのままにしておくことはできなかった。

二人はしばらくかんがえこんだ。

「あっ……」

先に声をだしたのは前野である。

「蟬が……」

と、宮本も声をもらした。

「蟬がどうした？」

石見守がけげんな顔色を見せた。

「石見守様がお席を立たれたすぐ後、窓から蟬がとびこんでまいりました。法師蟬でございました。追いだそうとしましたが、姿が見えなくなり、そのうち気がつきますと窓から風の中へでてゆきました。が、まさか……」

前野は自分でいって、すぐに自分の想像を否定した。

ところが、石見守はこれにやや反応した。

「蟬が……、法師蟬がとびこんできた……。もしや？」

石見守は思案顔をしていった。

「蟬がどうかいたしましたでしょうか」

「蟬や蝶は、よく忍者がもちいる」

「よもや忍者など……」

前野がいったが、石見守はじっとかんがえこんだ。
〈忍法空蟬〉〈秘伝揚羽蝶〉などの忍びの技を石見守はきいた記憶があった。

二

夜が更けてから、風の勢いはだいぶしずまった。
それでも屋内にいても、風の音がほとんどやすみなくきこえた。木の枝がしなう音、葉がこすれ合う音も耳についた。
不動丸はねむりながらも、江戸の空を吹きわたる風の音がきこえていた。ねむっているときでも不動丸の五感は活発なはたらきをつづけている。
日本は国松にとっても、不動丸にとっても安全なところではなかった。命をつけねらう者が何人もいたのである。
不動丸は今夜も、紀州大納言家にひそかにあずけた国松の身を案じながら寝に就いたのであった。自分がつれてあるくよりは安全だろうとふんで、国松を紀州藩主頼宣に託したのだった。
今はなれてくらしていても、不動丸はつねに国松のことをおもい、将来を案じていた。風の音をききながら不動丸はマカオに吹きすさぶ南風をおもいおこしていた。
風の音がひっきりなしにつづいてくる。
(……?)
ねむりながらふと風の音にまじってきこえるほかの物音に不動丸は耳をかたむけた。
それは大勢の足音とその者たちの気配であった。

足音はひたひたと丸大屋にむかってせまってきた。押しころしたその者たちの気配が息づまるようだ。
(十人……、二十人……)
人数をかぞえたころまでは、不動丸はまだ夢とうつつのあいだをまどろんでいた。
どうやら二十人以上の者が丸大屋の周囲にせまった。
丸大屋の大戸が押しやぶられた音で、不動丸ははねおきた。町奉行所の捕手たちにちがいなかった。
捕手たちのねらいは自分だと不動丸は直感していた。
乱暴にふみこんでくる物音と丸大屋の番頭のあわてふためく声がきこえた。
しかもふみこんでからの捕手たちの行動は迅速であった。あっという間に店頭から廊下をつっぱしってきた。階下から階段を駆けあがっていく音もきこえた。
各部屋部屋をあけはなって改めをしている声がした。
不動丸は忍び刀をひっつかんで、雨戸を蹴たおして庭へ飛びだした。
庭は建物にそって二方にひろがっている。その周囲は樹木で、背後は隣家の庭である。
庭は闇だが、不動丸はかなり夜目がきく。
敵もさるものだ。庭にもはやくも捕手が数人まわってきていた。
その者たちがわっと取りかこんできた。六尺棒を持つ者と十手を持つ者がいる。その背後で太刀をぬきはなっているのは与力であろう。
びゅんと棒がうなり、不動丸の顔すれすれをかすめた。
もう一方から六尺棒が不動丸の足をめがけておそってきた。
「やっ」

不動丸はおもいきり跳びあがるとともに、右足を空中から飛ばし正面の敵の顔を蹴りあげた。
敵はかつてこのような攻撃法を受けたためしはなかったとみえ、防禦もできずに顎の骨をくだかれた。
そのとき部屋へまわった捕手たちが、雨戸のあいだからぞくぞく庭へとびだしてきた。
「おぬし、国禁をやぶって国に侵入した者だな」
「鎖国をおかした者はみな死罪だ！」
捕手たちは罵声をあげて、おそってきた。
何本もの六尺棒が不動丸めがけておそいかかった。
「いやあ！」
不動丸は今度はひくい位置から足を回転させながら飛ばした。
ぐうっ
するどいまわし蹴りが相手の脇腹にきまり、無気味な唸り声をあげて同心がたおれた。
「相手は異国の武芸のこころえがある。気をつけろ！」
敵の中から声があがった。
不動丸は横手の敵の懐にとびこみ、おもいきり拳を相手の腹にたたきこんだ。
この敵も、げっと呻き声をのこして膝から地にどすんとくずれ落ちていった。
マカオでならいおぼえた唐土伝来の拳法はおもしろいようにきまった。
捕手たちは不動丸の飛び技を警戒するあまり腰がひけて、打ちかかる六尺棒の威力は半減した。
「おそれるなっ、取りかこんでぶちのめせ！　相手はたった一人だ」
捕手を指揮する与力は躍起になってさけんだ。

不動丸はおそってきた六尺棒をつかみ、これをうばいとった。
相手が恨みつらみのない捕方だけに、忍び刀をふるうのは気がひけた。今度は六尺棒をふるって捕手たちの相手をした。
捕手たちは今やことごとく庭にあつまっていた。不動丸をとりかこんだが、たおす機会も取りおさえる機会もつかめなかった。
「それっ」
与力の叱咤で打ちかかってきた捕手の喉元へ棒をぐいとおくりこんだ。
「やあ！」
気合とともに不動丸は地を蹴って空中へとんだ。
不動丸の体は軽々と闇の中を高く舞いあがって、階下の屋根の降り棟にとまった。あたかも飛鳥が舞いあがり、舞いおりたに似ていた。
もうここまで追ってくる者はいなかった。
「残念だったな。またの機会につかまえてもらおう。今お前たちにつかまるわけにはいかないのだ」
いい捨てるなり、不動丸は手にした六尺棒を下で右往左往している捕手たちめがけて投げつけた。
「追え、追えっ、つかまえろ！」
性懲りもなく号令している与力を尻目に、
「また会おう」
不動丸は屋根の上を駆けぬけ、反対側の路地へとびおりた。
路地から路地へはしり、さらに家と家とのあいだを駆けぬけて、不動丸は通油町へ逃げこんだ。
ここまでくれば、もう捕手をらくらくとかわす自信があった。なによりも、捕手たちとくらべて足

がちがう。彼等が半丁はしるあいだに不動丸は一丁はらくに駆けた。
不動丸は翔ぶように市中を駆けた。
市中にはまだ風が吹いている。
不動丸は風よりもはやく闇の中を駆けぬけた。
追跡してくる影がいくつかあったが、たちまちのうちに振り切られた。
不動丸が逃げ去ったあと、風だけが市中を吹きぬけた。

不動丸は追手を完全に断ち切っていたが、まだ江戸市中を駆けていた。
闇の大路から小路へぬけ、さらに大路にもどり、足をやすめる暇もなく、江戸を西へとむかった。
今の時刻、江戸市中の往来はほとんど無人である。
生き物といえるのは、野良犬くらいだ。江戸にはこの野良犬がおおい。
不動丸の行く手には見附の門や木戸がないので、好きなだけはしることができる。
日本橋、中橋、京橋、新橋とすぎて、なおも西へむかった。
(いそがねば……)
不動丸の足は風よりもはやいが、それでも自分の歩速にまだるこしさをおぼえていた。
いそがねば、手おくれになる。そのおもいで不動丸のこころは江戸の郊外、渋谷村へとんでいた。
不動丸が幕吏におそわれたことは、ただそのことのみにはとどまらぬ。密告者は不動丸以外の者をも密告した疑いが十分にあるのだ。
国松とおもん。この二人の身辺に危険がおよぶのではないかとかんがえた。
国松は大罪人大納言忠長の遺児として追及されるおそれがあるばかりではない。鎖国の禁令をおかして帰国した者として処断されるおそれがある。
おもんは、鎖国の禁令をおかした者を承知でかくまったという罪だ。いずれも幕府にとらえられれば死罪はまぬがれない。
幕府に密告をしたのは、甲賀大黒天一味か、伊賀の服部半蔵一味であろうと想像していた。不動丸と国松の帰国を知る者はこの二者しか今のところかんがえられなかった。帰国早々、不動丸は宿敵伊賀者と、味方であるはずの大黒天から命をつけねらわれる羽目におちいった。
二代将軍の二男家光につかえた伊賀者服部半蔵と、三男忠長にやとわれた甲賀毘沙門天がたがいにあらそったことから、伊賀者と甲賀者とのぬきさしならぬ闘争がはじまった。毘沙門天道順は服部半蔵とたたかってやぶれたが、これで伊賀と甲賀の闘争は終止符を打たなかった。よりふかい怨念がくわわって、両者ははてしのない闘争にふみこんでいったのだ。
しかも、甲賀者の内部では大黒天源心が甲賀最高位の毘沙門天の地位をねらって不動丸の密殺をたくらんだために、あらたな闘いが勃発したのである。

三

この夜、おもんは風の音を気づかいながら宵がふかまったころ就寝した。
なんとなく胸さわぎがして、深更になるまでに二、三度目をさました。これはめずらしいことだった。
(何かあるな……)
おもんは勘のするどい性質で、前兆のようなものをおぼえることはよくあった。亡き夫毘沙門天道

順とくらした時期に勘が涵養されたのかもしれなかった。

まどろみながら、おもんは不吉なものを感じていた。

渋谷村といえば、江戸の西南部で、川や谷、山林、荒野などのひろがる地帯であり、そのあいだに田畑などが点綴する農村地帯である。江戸よりはずっとしずかで暮しよいところだ。

毘沙門天道順の死後、おもんは一人娘の桔梗とともにここでおだやかな暮しをしていたが、今年の正月大黒天源心がたずねてきていらい、しずけさをやぶられた。厄介なさわぎがときとしてもちあがるようになった。

空位となった毘沙門天の栄位をめぐって、ちかいうちに源心と不動丸とのあいだで血で血をあらう死闘がくりひろげられるような予感をおもんはいだいていた。しかも毘沙門天の地位を獲るには、宿敵服部半蔵をたおさねばならないので、三つ巴の闘いに発展する可能性があった。

毘沙門天未亡人としては、このむと好まざるとにかかわらずこの闘いに捲きこまれていきそうであった。それは十余年前、おもんが道順にとついだときにさだまった運命としかいいようがなかった。

宵のころまで吹きすさんでいた風がだいぶおとろえてきた。戸外がしずかになったのを察し、おもんは安堵しながら寝入っていった。

かなり時刻がうつってから、黒い不吉な影がひたひたと屋敷にちかづいてくるのを夢うつつの中で感じていた。

影だけしか見えないので、おもんにもその正体が何者かわからなかった。

(伊賀者か、もしくは大黒天か……)

いずれにしろ、おもんにとっては歓迎できない客である。

大黒天源心には一度隙をつかれて、押さえこまれ、無理矢理もてあそばれた。源心には色と欲の二

股かけた野心があった。

その後、二度めに体をねらわれたが、このときはおもんは自分の命をかけて源心を撃退した。一度体をゆるした女は征服したも同然だとかんがえる男のあさましさをおもんはおもい知らせてやった。

今夜、源心がくれば、三度めである。前回の失敗をとりもどすべく、今度こそおもんを服従させるために源心がやってくる可能性はあった。

伊賀者がくるとすれば、もっと手荒なことになりかねぬ。伊賀者が渋谷村にくる理由は毘沙門天遺族の抹殺しかあり得ない。毘沙門天の未亡人と一人娘が生きておればこそ、服部半蔵に復讐をとげ、毘沙門天の栄誉ある地位につこうと野心をいだく甲賀者がでてくる道理なのだ。

黒い影は屋敷地にふみこんできた。

別棟に甲賀者の下男が住んでいるが、黒い影には気づいていないようだ。

黒い影は母屋の床にもぐりこんだ。

技のある忍者ならば、床にもぐって、床板をやぶり、屋内に侵入してくるくらいは容易である。

おもんは身に危険がせまってくるのをおぼえ、闇の中で目をさました。

黒い影は床下を這いまわっている。

やがてそれはおもんが寝ている仏間の床下にちかづいてくるだろうとおもった。源心だとすれば、おもんが寝ている部屋を知っている。

だが、黒い影はいったん仏間の床下にちかづいて、そのままとおりすぎた。

(……?)

おもんは疑問をいだいた。勘ははずれたようだ。

(どこへいくのか?)

まずそれをかんがえた。
感覚をとぎすましていると、黒い影は床下のとある一点でとまった。
（あっ……）
唖然として、おもわず声をだしかけた。
黒い影がうずくまったのは桔梗が寝ている部屋の下だ。
桔梗は今年で十六歳だ。母親の目から見るとまだ幼いが、世間一般にいえば娘ざかりといってもいい年齢である。
（源心め、あろうことか、桔梗に……）
おもんは頭に血がのぼりかけた。
母親を手ごめにしたばかりでなく、今度は娘を毒牙にかけようとしているのだ。おもんは怒りで気がくるいそうになった。
源心は毘沙門天の地位につこうがために、おもんと桔梗両方をわが手におさめようとしている。
（とんだ罰あたりめ）
おもんはこころのうちで源心をののしった。絶対にゆるしてはおけぬとおもった。
毘沙門天の地位は甲賀者にとって絶対的であり、おかすべからざるものだ。源心はその毘沙門天の女房をいともかるがるとおかした。その怒りが今更ながらふつふつと湧きおこってきた。
ところが、いざおきあがろうとしたときに、黒い影がもう一つ屋敷内へ侵入してきた。今度はおもんの寝ている床下にためらいもなくちかづいてきた。
「おもん様、おしずかに。うごいてはなりませぬ。うごけば、お命にさしつかえますぞ」
その侵入者は床下から押しころした声をはなってきた。源心ではなかった。

おもんはそのとたんに身体が微動もしなくなった。
床下の者が術をかけてきたのだ。
「卑怯者っ……」
おもんは相手をののしるだけが精いっぱいだった。
「忍者に卑怯者呼ばわりは片腹痛うございますぞ。〈不動呪縛（じゅばく）〉がかかっております。身うごきはかないませぬ」
床下の忍者はいった。
おもんは源心におかされたときも〈不動呪縛〉をかけられたのだ。この術にかかったら金縛りにあったように微動もできなくなることは経験ずみである。
それでもおもんは桔梗が心配で、必死におきあがろうとした。
だが、自分の気持とは裏腹に体はすこしもいうことをきかなかった。あせれば焦るほど、体を大岩でおさえつけられたように押しつぶされそうになった。
「源心の手下だね。こんなことをするやつは」
「正体はいわぬが花、でございましょう」
床下の男は術をゆるめずにいった。
「源心は毘沙門天の位がほしいばかりにこんなことをやってるんだろうが、骨折り損だよ」
「さ、どうでございましょうか」
床下の男はそれだけいって、以後は沈黙した。
術はずっときいている。
おもんは身うごきがとれなかった。悔しいけれども、どうにもすることができぬ。

黒い影が床板をやぶって、桔梗の寝ている部屋に侵入したのがわかった。
桔梗はそれとわからずに、まだ熟睡をつづけている。
やはり、黒い影は大黒天源心であった。

源心は桔梗がねむっている布団にちかづいていった。
部屋の中の闇をとおして見ると、桔梗はおもんにおとらぬ器量の持ち主である。まだ青く、かたい果実の感じがするのは年相応で仕方がないが、おもんのような熟れきった果実にはない新鮮さがある。
桔梗はやすらかで規則ただしい寝息をたてている。
歯ごたえもありそうだ。布団の中に伸びきっている若い姿を源心は想像し、欲望をおぼえた。
かつての頭領の娘であり、一度自分がおかした女の娘である。その桔梗が今自分の前に体をよこたえている。源心は三重の欲望をそそられた。
源心は〈不動呪縛〉をかけようとして、おもいとどまった。金縛りにして死んだようになった娘の体をいくらむさぼったとしても、面白くも、なにもない。
源心は術をかけずに、掛け具をひとおもいにはいだ。
夜着をまとった桔梗の姿態があらわれた。
若い娘の体のにおいを源心はいっぱいに吸いこんだ。
源心はおおいかぶさっていかずに、桔梗の体を下から攻めていった。いきなり夜着の裾をもって左右にまくった。
夜目にも白い下肢が内腿のあたりまであらわになった。内腿が想像した以上に発育しており、肉がみち、長く伸びて臑から下へつづいている。

そのとき、桔梗が目をあけた。ところが暗いので自分がどういう状況にあるかとっさには判断できないようだった。
源心はかまわず、腰をおおっている薄布をはぎとった。
「いやあッ」
桔梗が声を発するよりもはやく、源心は足をつかんだ。そして両足をぐいとひらいた。
「いやあ」
おなじ声を発したが、そのときはもう桔梗の下半身は二つに割れていた。
桔梗ははねおきようとしたが、源心は夜着の上から胸をひょいとついた。
つよい力はくわえていなかったが、はずみで桔梗の体はばたんと後ろにたおれた。
その瞬間をとらえて、源心は桔梗の両足のあいだに入った。
これで桔梗はうごきが不自由になった。うごけばうごくほど、男の体が股間ふかく入りこんでしまうのだ。
源心には余裕があった。まるで赤子の手をひねるようなものである。
おもんのほうは手下の七面の鶴がうごきを封じているはずだ。邪魔だてもないので、悠々と手ごめにできるとふんでいた。
源心は臆面もなく股間へ手を入れ、秘奥をさぐった。
えもいわれぬやわらかな感触をあじわいながら中央のなだらかな丘からあわい草叢をまさぐりつづけた。やわらかさの中にもこころよい弾力と張りがある。みずみずしい果実の手ざわりが感じられた。
「やめて、人を呼びます」
桔梗はまだ抵抗をやめていなかった。

「呼ぶがいい。誰もこぬぞ」
あざけるように源心はいった。そしてさらに周囲をさわりまわした。
桔梗は暗くて、相手が見えぬためにいっそう恐怖をおぼえているようだ。抵抗をすこしずつよわめていった。
源心は草叢から指を裂け目へのばした。裂け目へもぐらせると、あたりは草の露にぬれていた。
源心は桔梗の股間を持ちあげ、自分の顔にちかづけた。
微香が源心の鼻をくすぐった。そのにおいがいっそう欲望をそそった。
源心は微香の発する源に口をつけた。
ぴくっと桔梗が体をふるわしたのがわかった。
源心は舌を這わせ、唇で吸った。吸いつづけると、
「あっ」
といって桔梗が体をこわばらせた。まだかたくても、感じやすい体なのだろう。
どれほど感じるものか興味がわいた。源心は吸いつづけ、裂け目へ舌の先をさし入れていった。
すると桔梗はぴんと体をしなわせた。反応ぶりは一人前である。
(これは……)
源心は尽きぬ興味にかりたてられた。この興味をとことん追求していく気になった。
桔梗は男の両手で両腿を押さえつけられているので、抵抗もできない状態である。
源心は舌の先を固くして、裂け目へふかく入れこんだ。
草露がとめどなく湧きでてきて、股間をぬらした。
「やめてください。やめて!」

それでも桔梗はあくまでもこばみつづけた。
ころはよし、と源心は腰を女の股間へ割りこませていった。
(……?)
そのとき、源心は床下で物音がするのをきいた。
しかも息づまるような殺気がつたわってきた。床下ではげしい闘いがおこなわれているようだ。
忍者と忍者の闘いである。床下の闇の中で、両者無言のうちに攻防を展開している。
(うぬっ、不動丸め!)
不動丸がおもんと桔梗の警固にやってきたのだ。
(今不動丸とたたかうのはまずい)
源心は桔梗の体をはなし、身づくろいにかかった。
不動丸とはいずれ雌雄を決しなければならない。毘沙門天の栄位につくためには、半蔵ばかりでなく、不動丸をもたおさなくてはならぬ。
できれば、半蔵と不動丸をたたかわせ、生きのこって傷ついたほうをたおしたいと源心はかねて戦略をねっていたのである。
「桔梗、おしいところでお前を馳走にあずかりそこなった。後日、またくる」
そういいのこし、源心は台所へおり、そこから外へとびだした。
そして一気に闇の中をつっぱしった。

四

不動丸はここ約一カ月ばかり、おもんの屋敷の天井裏を栖にしていた。

大黒天源心の襲来を予想して、不動丸は丸大屋から渋谷村へ駆けつけたが、床下にひそんでいた七面の鶴とたたかっているあいだに源心の逃走をゆるしてしまった。

おもんは無事だったが、桔梗が源心にねらわれ災難をこうむったのを知って、不動丸はひそかにおもんと桔梗の守護をはじめたのだ。

約一カ月たったが、おもんも桔梗も不動丸が自分たちのために屋敷の天井裏に棲みついているとは知らないようである。

ときどきは留守にすることはあるが不動丸は大抵は昼も夜もここにひそんでいる。おもんと桔梗のくらしぶりは筒ぬけである。

仲秋に入って間もなく、武蔵野を吹きわたる秋風とともに、一人の男がおもんの家をたずねてきた。男は虚無僧姿で屋敷の門口にたった。

虚無僧は尺八を吹きはじめた。〈武蔵野残月〉という曲である。

不動丸は天井裏でその曲に聴き入った。武蔵野の秋の夜をうたったさびさびとした叙情をたたえた曲である。

門付けにしては長々と曲がおわるまで吹いた。

吹きおわったころ、おもんがでていって、ほどこしの米をさしだすと、虚無僧は礼をいって、それを首にかけている三衣袋に入れた。

「甲賀毘沙門天といわれた方の住居はここでござろうか」

虚無僧はおもんにそうたずねた。

おもんはやや警戒し、

「主人はかつてそう呼ばれておりましたが、もう何年も前に亡くなりました」

とこたえると、虚無僧は天蓋をとった。

「左様でございましたな。道順殿がお亡くなりになったのは駿河大納言様がお亡くなりになった同じ年であった。拙者、五十嵐兵部と申して、かつて加藤肥後守忠広様の側役をつとめておりました者にござる」

虚無僧はおもんに自分の以前の身分をあかした。

加藤忠広はかつての英雄清正の子である。さらに忠広は紀州頼宣の義弟であり、大納言忠長の義弟でもあった。寛永九年、忠長が改易されて上野高崎城に幽閉されるとほぼおなじ時期に忠広も庄内へ配流され、加藤家は事実上ほろんだのである。

不動丸は天井裏で耳をそばだてて、加藤家の名をきいたとき、胸さわぎするものをおぼえた。忠広は毘沙門天がかつてつかえた忠長の義弟であるばかりでなく、紀州頼宣とともにこころをゆるし合った盟友でもあった。

「主人が亡くなりましてからは、わたしもこの地にひっこみ、隠居同然のくらしをしており、世のことにもとんとうとくなりました」

おもんは亡き夫のことを知る者の来訪をうけて、かすかなよろこびとともにまだ警戒心もいだいているようだ。

「道順殿は古今稀なる忍びの名人でござった。そして最後まで忠長様につきしたがい、忍者として希

有なる忠義をつくされた情義にもあつい人柄であった。以前から一度遺族の方にお会い申しあげ、お話をうけたまわりたかった。本日妻女殿にお会いできて本望にござる」

五十嵐兵部と名乗った男はふかい理由があってここをたずねてきた様子と見うけられた。

「むさくるしいところでございますが、おあがりくださいませ」

おもんがすすめると、

「まず道順殿のご位牌をおがましていただきたい」

兵部はそういってあがってきた。

おもんの案内で兵部は仏間へすすみ、道順の位牌に手を合わせた。

「本当に惜しい忍びの名人を亡くしたものだ。これでしばらくは伊賀者の天下がつづくであろう。道順どのが忠長様に肩入れし、半蔵が家光様につかえたのが、今にしておもえば運命の岐路でござった」

兵部は座敷へ招じられてからいった。

「それは申しても詮なきことでございます。人の世の運命とはそのようなものでございましょう」

おもんは兵部がただ道順の位牌をおがみにきたわけではないとおもっていた。

「しかも道順どのが亡くなって、甲賀者をたばねる毘沙門天をうけつぐ者がいなくなった。このままにしておけば甲賀者はいずればらばらになって滅びの道をたどっていくかもしれぬ。そうなっては伊賀者のおもう壺、道順どのの遺志にもとるものとなろう。道順どのの遺志はあくまでも忠長様のご恩にむくいることでございましょう」

天井裏で不動丸は兵部の言葉をきいた。含蓄のふかい言葉と不動丸はとった。

「それは左様でございましょう」

おもんも兵部の言葉の意味をおしはかっているようだ。

「道順どのの後継についてことははこんでおるのでしょうか。いつまでも毘沙門天の地位をあけておくわけにもいかぬでございましょう」

「とはいえ、いたずらに後継をきめるわけにもまいりません。時機がいたれば、おのずから称号にふさわしい者がでてまいりましょう」

おもんはあたりさわりなく応対している。この問題は甲賀独自のものであり、部外者の立ち入るべきことではないからだ。

「道順どのの意志は半蔵とのたたかいに勝ち、さらに将軍家光公を亡きものにいたすことであったろうと推測いたします。このことをいつまでもほうっておけますまい」

「ほうっているわけではございません」

「それでは、甲賀者の中で誰か道順どのの遺志をついでいる者がいらっしゃるのか」

そこまできいて、不動丸は兵部のこころの底が読めた。

「ないわけではございません」

おもんがこたえたとき、兵部はさりげなくあたりを見まわした。

「道順どのの遺志をついでいらっしゃる甲賀者がおるなら、その者に拙者をおひきあわせねがいたい」

兵部は来訪の意図をほぼ半分あかしたのだ。

「五十嵐さまのおこころのうちをすべてあかしていただけなければ、おひき合わせすることはできません」

おもんもさすがに、かつての毘沙門天の女房である。応対の筋道はよくこころえていた。

しばし、兵部は沈黙した。
不動丸は、天井板の隙間をとおして下の様子を見まもった。
「拙者のこころのうちをお明かしいたそう。これをご覧になっていただきたい」
兵部はそういって、懐中にはさんだかなりの大きさの紙包をとりだした。
不動丸はほぼ真上からそれを見た。
兵部は紙包をといていった。
中からでてきたのはいくつにも折りたたんだ絵図面であった。
兵部はそれをひらいた。
「これが何かおわかりか?」
兵部は畳二枚をつなげたくらいの大きさの絵図面をひろげた。
おもんがそれに見入ると一緒に、不動丸もじっとそれを凝視した。大きい絵図面だけに、はなれた天井裏から見たほうがずっとわかりやすい。
(……!)
不動丸はおもわず胸をつかれた。暗闇で不意打ちをうけたような気持におそわれた。
「これは、江戸城でございますか?」
おもんの声がこころなしかふるえていた。
「左様、江戸城総曲輪の図面です。このほかに、本丸、二の丸、西の丸、三の丸、吹上御庭などすべての細部にわたる図面をも所持いたしております。江戸城構築の大工棟梁甲良家の屋敷から手に入れましたものにございます。こう申しあげれば、拙者のこころのうちはお見通しでございましょう」
兵部はじつに大胆不敵なことを明かした。

五

秋は月の季節であり、風の季節である。
新月から日がたつにつれ、月の出がおそくなり、ほそい月がしだいにみちてくる。空気は澄み、月の光はきよらかである。
野分はこの時節しばしばおそってくる。中稲、晩稲の花ざかりにあたるので、颱風一過の被害は甚大である。二百十日、二百二十日のあたりはとくに野分が吹きやすい。
この年の二百十日は無事にすぎた。
ところが二百二十日の前日、案の定、申の刻(午後四時)ごろから強風が吹きはじめた。
江戸市中にもうもうと砂塵が舞いあがり、空は一時に夕闇がおとずれたように暗くなった。
強風が吹くと、江戸は火事の心配がある。江戸は火事によわい都市である。
火事がおこらなければいいとみながおもっている中で、江戸城清水御門の附近からとつぜん火の手があがった。
夕闇をおもわすような大気の中に炎が勢いよく立ちのぼり、それを縁どるように薄紅色に周囲が染まりだした。
半鐘がはげしく鳴りだした。
半鐘の音のけたたましさは逆に聞く者を浮き足だたせ、あわてふためかせる場合もある。場所が江戸城にちかいことから、半鐘が半鐘を呼んで、たちまち周囲に波及していった。
しかもよくないことに、出火とほぼ時を合わせたように、暗い空で稲妻がひかりだした。

ピカッ、ピカッと明滅する光と炎とがあいまって、不気味な様相となった。

風が北から南へむかって吹いている。江戸城が風下にあたる。よくよく場所のわるいところに火の手があがったものだ。

風にあおられ、稲妻に勢いを得て、火の手はたちまち大きくなっていった。

清水御門のむこうは江戸城であり、濠ひとつへだてた先は本丸である。

火消組がぞくぞく清水御門へむかったが、火の勢いはおとろえなかった。逆に勢いを増すばかりだ。

「大火になるぞ！」

「江戸城があぶない。このぶんだと本丸が焼けるかもしれない」

「大変なことになりそうだ」

このあたり町家はないが、武家屋敷の住人たちは防火と避難とで大わらわの騒ぎとなった。

そのころ、清水御門から田安御門にいたる濠（牛ケ淵）の石垣や並木の陰などにうごめく人間の群れがあった。

彼等は火の手の様子をうかがっているが、それは消火や避難のためではなさそうである。総勢およそ二十人ばかりはおもいおもいのいでたちをしているが、目のきびしさ、身のこなしの敏捷さはただ者たちではなかった。

彼等は火の手が濠をこえて江戸城内にのびるかどうかをうかがっているのだ。疾風と迅雷の日をえらんで、清水御門ちかくに火をはなったのは五十嵐兵部の指揮するこの加藤家の浪人たちである。

炎は北風にあおられ、十丈、二十丈もの高さまで燃えあがり、城内をうかがいつつあった。城内の櫓（やぐら）に飛び火しそうなことは誰の目にもあきらかであった。

城内の櫓が黒煙とともに火を噴きだしたのは間もなくだった。

ひとたび櫓が燃えだすと、吹きあげる巨大な火炎がたちまち周囲の建物にうつった。

江戸城は騒然となり、番士たちがいっせいに番所からとびだして、駆けつけた。諸門の番士たち、さらに木戸の番士たちも大勢駆けつけたが、火の勢いがつよくて、手のほどこしようがなかった。

本丸に火の手がうつるのは時間の問題となった。

江戸城西口ともいうべき半蔵門をまもる伊賀者たちも、危急に応じて、吹上御庭をつっ切って、駆けつけてきた。

そのため江戸城は半蔵門のほうまでさわがしくなった。

半蔵門の前あたりには伊賀者の組屋敷がたちならび、その先には半蔵自身の屋敷がある。江戸城西口はいわば伊賀者たちによってまもられている。

組屋敷から急をきいて半蔵門へ駆けつける伊賀者の一人が、騒ぎのどさくさにまぎれて、背後からきた曲者にいきなり物陰へひっぱりこまれた。そして一撃のもとに拳で首の骨を折られてころされた。

この曲者は自分の着ていた衣服をすばやくぬぎ捨て、伊賀者の衣服をはいで自分で着こみ、半蔵門を駆けぬけた。不動丸である。

不動丸は、加藤家の浪人たちが火をはなって騒動をおこした隙に乗じて江戸城へ侵入する機会をうかがっていた。

不動丸は広大な吹上御庭を疾走した。

ほかの伊賀者たちは清水御門のほうへむかったが、不動丸は西の丸の方向へ翔ぶように駆けた。

本丸に火が燃えうつれば、将軍とその家族たちが西の丸へ居をうつすことになっているからだ。不動丸は西の丸にうつってきた家光をねらうのが目的であった。火事さわぎの最中であるから、将軍警

固は十分ではないはずと読んでいた。
火の手ははやくも本丸にうつったようだ。城内全体が不穏な空気につつまれている。右往左往している人影が見えた。
不動丸は吹上御庭の高い築地塀を越えた。
そして道灌濠を迂回して、紅葉山にでた。
そのむこうに西の丸がある。しかも境に濠はない。塀だけである。江戸城内の地理は五十嵐兵部から見せられた絵図面どおりだ。
不動丸は高い塀の下に立った。
すばやく鉄鋲のついた皮足袋をはいた。忍者が高い木や塀をのぼるときにつかう道具である。
不動丸はするすると塀をのぼり、西の丸側に飛びおりた。
西の丸は、西の丸書院番士、持弓与力同心、持筒与力同心、先手鉄砲組らに警固されている。けれども江戸城に火がついて、今はてんやわんやの状況である。不動丸の侵入に誰も気がつかなかった。
それに将軍のお成りをひかえ、その準備に大わらわである。
不動丸はその隙に乗じた。
しかもあたりには本当に夕闇がおりてきていた。ほとんどおもうがままの行動ができた。
前方に、西の丸の森にそびえる優美な二重櫓の伏見櫓が見えてきた。別名〈月見櫓〉と呼ばれ、これにつつづくのは白壁の多聞櫓である。
伏見櫓は西の丸にある唯一の櫓であり、その前が西の丸御殿である。
不動丸は一気に跳躍して御殿の屋根へあがろうとした。
が、おもわずおもいとどまった。御殿の大屋根の棟上に、すっくと立つ人影が見えたからである。

「どうした、あがってこい、甲賀の若獅子。それとも、臆したか」
棟上の人影は炎上しはじめた本丸のために夕焼けのように赤くなった空を背景にしている。その影の主はなにもかも見とおしているようだ。
不動丸の行動も見ぬかれていた。
「服部半蔵だな。とんだところに邪魔だてにあらわれた」
不動丸の今日の計画は、半蔵の出現と同事に挫折したというべきだった。
「不動丸よ、むざむざとおまえの思いどおりにはさせぬ。おれをたおしてからゆけ」
半蔵ははるか上から見おろしていった。不動丸がマカオから国松をつれてもどってきたことも知っているようである。
「将軍のお命をいただいてから、毘沙門天の仇を討とうとおもっていたが、順序が逆になった」
言葉をはなったと同時に、不動丸は猛然と疾走を開始した。
数間疾走し、体を一転させ、両手で地を蹴って空中へ飛翔した。高々ととんで、御殿の屋根の軒上に鳥のようにとまった。
「道順の仇討ちとは片腹痛い。青二才、相手をしてやる」
そういうなり、半蔵は八方手裏剣をつづけざまに投じた。
不動丸は目まぐるしく身をかわして、それを避けた。
一瞬の間隙をついて、不動丸は屋上の傾斜を一気に駆けあがっていった。
見るまに、半蔵の姿が目前にせまった。
「やあっ！」
さけびながら不動丸は足をとばした。

足は空中で大きく円弧をえがき、半蔵の胸板を直撃したかに見えたが、半蔵はみずから屋上を毬のようにころがり落ちながらかわした。

半蔵は地上にすっくとおり立った。

今度は不動丸が屋上の傾斜を駆けおり、半蔵の頭上めがけてとびおりた。空中でふたたび足をとばして半蔵の頭部をねらった。

不動丸の足をねらって、半蔵の忍び刀が下から一閃した。

鋼鉄のごとき足と忍び刀が交錯しようとした瞬前、不動丸と半蔵とのあいだに巨大輪の菊の花がぽっかりと咲いた。

忍び刀は足ではなくその巨大輪の首を薙ぎはらった。無数の花びらがぱあっと空中に散り、あたりに華麗な花吹雪が舞った。甲賀秘伝〈落花の舞い〉だ。

花吹雪をついて、今度は二人がほとんど同時に跳躍した。

紅色に染まる夕闇をついて、二人は高々と空中をとび、伏見櫓の屋上と多聞櫓の屋上で対峙した。

櫓上から見る本丸の炎上はすさまじいものだった。本丸が巨大な火の海となり、幾本もの火柱を黒煙とともに空へ噴きあげている。強風に炎があおられ、逆巻くように荒れくるっている。

風と火が空に怒号し、迅雷を呼んだ。

ピカッ、ピカッと稲妻がはしった。

半蔵が伏見櫓の屋上から身を投げ、多聞櫓めがけてとびおりてきた。

不動丸はおくれじと、忍び刀を抜きはなって空中の半蔵めがけてとんだ。

空中で忍び刀がはげしく二度斬りむすんだ。

おたがいに手ごたえを感じ合った。

不動丸は半蔵の喉をつらぬいたとおもった。

二人の体は空中で一転、二転し、眼下の伏見濠の底ふかく落下していった。

流星墜つ

一

一条……、夜空に星が流れた。

ながい尾をひいておちていく星をながめて、七面の鶴は秋を感じた。秋は星のながれる季節である。

しかし感傷はない。忍者に感傷は無縁である。

（もしや、不動丸は……）

死んだのではないか、と七面の鶴はおもった。

もう何日も鶴は穴蔵の中でくらしている。穴はしゃがんだ鶴の体が頭まですっぽり入るくらいの大きさである。

穴は江戸郊外渋谷村の農家の裏庭の隅にあり、周囲は木立である。昼間は穴の上に竹で編んだフタをかぶせ、フタに土や草をのせているので周囲からは目につかない。夜のあいだはフタをはずして星空をながめたり、月見をしている。

秋の夜は星がきれいだ。春夏秋冬のうちでいちばんうつくしいとおもった。何刻こうしていても、見あきることがない。ひかりが澄んでいて、冴えがある。

こうして一晩中空を見ていると、大自然の悠久が感じられる。

しかし、鶴は月や星をながめるために何日も穴蔵にもぐっているわけではない。鶴の神経はぴりぴりするほど研ぎすまされており、垣根のむこうを注意している。

垣根のむこうも農家である。かつて甲賀毘沙門天を名乗っていた甲賀忍者の頭領の後家が住んでいる。鶴は穴の中から隣家を見張っているのだ。

今日で七日も見張っているが、めざす甲賀不動丸がここに立ちまわる気配がない。不動丸は、先日江戸城本丸が炎上したとき、江戸城内で伊賀組の頭領服部半蔵と生死を賭けた勝負をしたといわれている。伏見櫓を舞台にして両者がはげしい闘争をくりひろげ、おたがいに伏見濠の底ふかく転落したところまでは見ていた忍者がいるが、そこから先の二人の消息についてはわからなかった。

不動丸についても、半蔵についても、その後の動静はまったくわからぬ。双方とも伏見濠に墜落して死んだと解釈すべきが妥当であろうと鶴はおもった。

が……、不動丸も半蔵も尋常一様の忍者ではない。常人ではかんがえられぬ秘技をもちいて死の淵から生還したとしても不思議ではないのである。

「半蔵と不動丸が双方とも死んだとはかんがえにくい」

そういったのは鶴の上忍甲賀大黒天だった。大黒天の命令をうけて、鶴は不動丸の生死をさぐっているのだ。

この夜も隣家に何事もおこる気配はなかった。

鶴はこの後三昼夜、穴蔵の中にひそみつづけた。が、不動丸がここに立ちまわる形跡はなかった。

不動丸は生きていれば、かならずここに姿を見せるはずだ。半蔵との勝負を報告にくるはずである。
（この上は家の中をさぐってみるしかない）
鶴は最後にそう決心をした。家の中をさぐれば、不動丸の消息についてなにかわかるのではないかと思った。
夜が更け、三更に入ったところ、鶴はのそりと穴蔵を這いだした。ぱたぱたと衣服についた泥をはらい、ゆっくり腰をのばした。地中から地上にでたのは、十一日めのことである。しゃがんだままの姿勢でいたので、さすがに腰がいたかった。
二度、三度、鶴は腰の屈伸をくりかえした。
隣家へうつるのは容易である。境のからたちの垣根をくぐればよい。
鶴はなんなく垣根をこえた。かつての甲賀毘沙門天の棲家だ。今は後家のおもんと娘の桔梗が住んでいる。
だが、油断はできぬ。忍者ゆかりの家であるから、どこから何が飛びだしてくるかわからぬ。鶴は以前この家の床下にもぐりこみ、おもんに〈不動呪縛〉をかけたことがある。勝手は一応知っている家である。
（床下へ入りこむか、それとも天井裏にもぐりこむか）
鶴は一瞬思案した。
そして天井裏ときめた。
家は典型的な農家づくりである。農家ならばつくりは大体きまっている。間取りの見当もつく。天井裏ならば下がのぞける。床下だと、上をのぞき見るのがむつかしい。それで天井裏をえらんだ。
かくべつ厳重な戸締りがしてあるわけではない。農家に侵入するくらい、鶴にとってなにほどのこともない。

裏庭へまわり、母屋の雨戸へちかづいていった。
鶴は懐中から苦無をとりだし、雨戸の溝へさしこむと、雨戸の一枚が音もなく浮きあがった。
雨戸をはずし、屋内の縁側にしのびこみ、雨戸を元どおりの位置にもどした。
屋内は暗闇だが、片目を閉じていると、しだいにあたりが見えるようになった。腕のいい忍者はたいてい夜目がきく。夜目は闇に慣れることからはじまる。
つぎは天井裏へつうじる道をさがすことだ。どんな家にも大体二、三個所は天井板のどれかがはずれるようにできている。その場所をさがすのは忍者の勘である。
鶴は侵入する前から大体のねらいはつけていた。いったん縁側へあがるや、すぐに勘がひらめいた。
（厠の天井）
である。
鶴は縁側を音もなくとおりぬけた。板と板とのあいだを踏んであるくと、足音がたたぬ。
厠は十中八九は北向きの端にある。案の定、予想した位置に厠があった。
杉戸をあけて、中へ入っていった。
厠特有のにおいはなく、秋の草花の芳香がかすかにした。これはこの家の女主人のたしなみである。
鶴は天井を見あげ、忍び刀を鞘のままぬきとり、鐺で隅の天井を押してみた。
勘はぴたりとあたった。その天井板はふわりと浮きあがり、厠の天井の一角に四角い穴が口をあけた。
幸先がいい。これですべてことがうまくはこぶような気がした。うまくいくときはこんなものである。

忍び刀を立てかけ、大きめの四角い鍔に片足をのせ、鶴は天井穴から軽々と天井裏へあがっていった。

鶴はこの家の天井裏に何日か棲みついて様子をうかがうつもりである。忍者はしのびこんだ屋敷に一カ月でも二カ月でも棲みつくことがある。それくらいの期間ひそめば、まず家内の様子や出入りの者の消息はつかめるのだ。

鶴は座敷の天井裏を当分の棲家にしようとおもった。

そして背をかがめながら、天井裏を音もなく、気配もたてずすすんでいった。

厠の上から縁側の上を横切り、納屋らしきところの上へでた。

そこから一、二間ほどすすんだとき、とつぜん鶴の体がうごかなくなった。前にすすもうとしても、体が一歩もすすまないのだ。

(どうしたことか……?)

とおもうと同時に、全身の凍るような恐怖感がわいてきた。体が居すくんでうごかなくなった。

鶴はじっと前方の闇をにらんだ。その闇の中に恐怖の正体があるようだ。

(何かひそんでいる)

鶴は直感し、注意をあつめた。前方の闇の中に生き物が身をひそめていることはたしかである。しかもそれはただものではない。鶴を居すくめて身うごきを封じるだけの力をもつ禍々しい生き物だ。

おおくの場数をふみ、腕にも自信のある鶴だが、今は命の危険を感じた。

相手はすでに鶴の存在をはっきりと意識している。もしかしたら、鶴が垣根をこえて屋敷にしのびこんだときから意識していたのかもしれぬ。

(何者か……?)

想像してみたが、わからなかった。

鶴はそこから一歩もすすめず、進退きわまった。強敵を前にすると、すすむとおなじくらい退くことはむつかしいのだ。

しかし、相手はうごく気配もないし、すぐには攻撃もしかけてこない。じっと鶴の出方を見まもっているのだ。相手は少しも鶴をおそれていないのがわかる。

鶴は恐怖で体ががんじがらめになっていた。

暫時がたった。両者とも身うごきもしなかった。

「何者だ」

恐怖にたえきれなくなって、鶴のほうが声をかけた。

「痴れ者よ、命がおしくば、去ね」

低く、かすかだが、底力のある声がかえってきた。

その声と同時に、鶴は手裏剣を力いっぱい闇にむかって投じた。

シュッ

むなしい音がしただけである。手裏剣になんの手ごたえもなかった。

シュッ

恐怖にかられて、また鶴は手裏剣を投じた。

今度も手ごたえはない。これでいっそう恐怖がつのった。

「七面の鶴よ、お前をころすのは簡単だが、亡骸の始末をいたすのが面倒だ。このまま立ち去れ。不動丸は生きておると源心につたえておけ」

身のこおるような言葉が暗闇からはなたれた。
鶴は恐ろしさのまま、懸命に今きた道を命からがら後もどりした。恐怖のあまり、どのように逃げかえったか、記憶もさだかではなかった。

二

「不動丸は生きていたか……」
甲賀大黒天源心（げんしん）は小石川伝通院の裏手にある廃寺の僧坊で、七面の鶴の報告をきいた。
「おもん様の屋敷の天井裏にじっとひそんでいる様子でした」
鶴はそのときの恐怖をまだわすれかねていった。
「きっと、不動丸は天井裏で傷養生をしているのではないか。半蔵と勝負をして無傷でおれるはずがない。傷をいやしながら、不動丸め、おもんと桔梗をまもっているのだろう」
源心はややくらい声でいった。
源心にとっては、半蔵も不動丸も敵である。彼が甲賀の最高位毘沙門天の位を手に入れるには、半蔵も不動丸も両方たおさなければならぬ。
源心はどちらにも敵愾心を燃やしている。だが、どちらにより大きな闘志を燃やしているかといえば、今のところは不動丸のほうだ。おなじ甲賀一族であるために、先に不動丸をたおさなければならないとおもっていた。
不動丸と半蔵をたおした後は、毘沙門天として将軍家光の命を獲（と）らなければならない。これが源心がみずからに課した目的であり、責任であった。

「不動丸が傷養生をしていたのなら、勝負をしてもよかった」
鶴は恐怖に居すくめられたのが悔しかったとみえて、そういった。
「勝負をしないでよかったのだ。していたら、お前は今この世にいないだろう。傷を負っている身では不動丸も手加減はできぬであろうから」
源心は囲炉裏に片手で薪をくべながらいった。もう一方の片腕は一間ほどはなれた棚の上においてある。肘のあたりから片方の腕はない。棚の上においてあるのは、精巧につくられた義手である。
「そうでございましょうか。鶴はまだ手負いの者にも勝てませぬか」
源心の遠慮のない言葉に鶴の自尊心はいささか傷がついたようである。
「当然のことだ。不動丸は半蔵と五分の闘いをする男だ。おれが今たたかったとしても勝てるかどうかおぼつかぬ」
源心は薪の燃える炎を見ながらつぶやいた。
「今かんがえますと、不動丸は闇の中でひそとも身うごきいたしませんでした。よほどの深傷（ふかで）を負っているのかもしれません」
「そうかもしれぬ」
と源心はいった。源心は一度手合わせして、不動丸のつよさをよく知っている。だが深傷を負っているならば、話はべつだ。今たたかえば、たおせるかもしれぬとおもった。
鶴の目は不動丸とのたたかいをそそのかしているようにも見える。不動丸とたたかう好機ではあった。
「不動丸は深傷の身ながら、おもん様と桔梗さまをまもっていく覚悟なのでしょう」
「おもんと桔梗を手なずけて、毘沙門天の位をつごうという魂胆だろう」

源心は懐疑的にそうみていた。
「だとすると、不動丸にだしぬかれるおそれがございます」
「おもんが是非にと推せば、不動丸は毘沙門天の位をつぐことができるだろう」
これが今源心をもっともなやませている難問である。
「しかし半蔵をたおしませぬと、甲賀のみなが納得いたしかねます」
「半蔵をたおせばよりよいにきまっておる。しかし、たおさねば位をつげぬというものでもあるまい。要はおもんの胸先三寸にある」
だから源心はおもんを手ごめにまでしたのだが、そのききめは今のところあらわれていない。かえって逆効果になっている。
「源心様が不動丸をやぶり、さらに半蔵をたおせば、おもん様も異論はございますまい。甲賀者はすべて源心様にしたがうことになるでしょう」
鶴がそういったとき、源心は目顔で鶴を制した。
何者か無住の僧坊にちか寄ってくる気配を察したのだ。
鶴も聞き耳をたてた。
足音はきこえないが、あきらかに何者か僧坊にちかづいてくる様子がうかがえた。
やがて、僧坊の前庭の草をわける音がきこえた。
ケケケー
ついで鶫（うずら）の鳴き声がきこえた。
「寿（ことぶき）だ」
鶴がその声をきいていった。

しばらくすると、僧坊の前に人のたたずむ気配がした。
「寿の三郎です」
僧坊の扉のむこうから声がきこえた。
「入れ」
源心は応じた。
扉がしずかにひらき、源心の手下の甲賀者が姿をあらわした。ひょろっとした鶴とは対照的な丸みをもった顔と体つきの男が入ってきた。
「半蔵の消息がわかりましてございます」
寿はひくい声でいった。
「左様か」
源心はそれがはやくききたくて、ここ何日も待っていたのだ。
「半蔵は生きておりました。不動丸とたたかって死んだというのはまちがいでございました」
「確証があったか」
「半蔵の声をききました。麹町の半蔵屋敷の庭にもぐりこみ、半蔵の読経する声をきいてまいりました。半蔵本人にちがいありませんでした」
寿は確信のある顔でいった。
「そうか、半蔵本人の声をきいたか。それならばまちがいあるまい」
そういって源心は沈黙に入った。
強敵二人はともに生きていた。半蔵、不動丸ともに死んだという情報はまちがいであった。相討ちで伏見濠に墜落しながら、両人とも死の淵から生還してきたのだ。二人の生命力はやはり並ではなか

った。

源心は落胆はしなかったが、やはり少々期待していたものがはずれた。どちらかでもたおれてくれれば手間がはぶけるところだった。やれやれという気持が正直なところ源心のうちにはある。

「はじめからやりなおしでございます」

鶴が口をはさんでいった。

「そういうことになる」

源心はそう口にしたとき、すでに気持のこだわりを捨てていた。半蔵も不動丸もともに敵にして両方たおす覚悟をさだめていた。

翌朝、まだ暁のうちに、僧坊から鶴と寿の姿が消えた。

鶴は背に荷をかついだ行商人、寿は僧侶のいでたちでここをでた。忍者の変装は〈七方出〉といって、虚無僧、僧侶、山伏、商人、放歌師、猿楽師、常の形の七種がよくおこなわれる。

二人がでていってから四半刻ほどたったころ、廃寺の境内にもようやく払暁の気配がみちてきた。

そのとき、

ケ、ケケー

鶉の鳴き声が僧坊の前庭あたりからきこえた。鶉は秋の鳥だが、尾羽があまり発達していないので空高く飛ばず、草むらを駆けるようにとぶ。

けれども前庭に鶉の姿はなく、かわって饅頭笠に墨衣の僧がたたずんでいた。さいぜんでていった寿がもどってきたようだ。

僧侶はしばしたたずんで僧坊をうかがってから、正面の階段をのぼっていった。

なかば朽ちかけた廻廊を四半分ほどまわって、僧坊の扉をひらいた。その一室の奥が源心のいる坊

である。

源心は背をむけて、囲炉裏に薪をくべていた。

「寿、何用だ」

源心がそういったとき、僧侶がとつぜん坊の床を蹴って身をひるがえした。真一文字に源心にむかって突進し、いつの間にぬいたか、忍び刀をきらめかして真っ向から斬りつけた。

囲炉裏を前にした背が真っ二つに斬りさげられたと見えたとき、源心がひょいとふりむき、薪で忍び刀をうけた。

「ええいっ」

いったんいきすぎ、僧侶はふみとどまって、ふたたび忍び刀で源心をおそった。

「笹屋め、とんだところにまよいこんだな」

源心は手にした薪をすっと正面に打ちおろした。

饅頭笠が二つに割れて、半蔵輩下の伊賀組与力鵜飼三十郎の精悍な顔が半面あらわれた。

三十郎と源心は昨年の冬、吉原遊廓のちかくで一度手合わせしたことがある。そのとき三十郎は煤竹売りに化け、源心は焼芋屋に変装をしていた。

三十郎は必殺の初太刀と二の太刀をかわされ、不利におちいった。三十郎は三の太刀に最後の勝負をかけた。

頭上の饅頭笠をむしりとるなり、源心の顔へむかってはっしと投げつけた。それと同時に正面から斬りこんだ。

「やっ」

声を発したのは源心である。

その瞬間、火の粉と灰が空中に舞い、三十郎は目の前が真っ暗になった。
源心が囲炉裏に手を入れ、燃えている薪と灰を投じたのだ。
視力がなくなり、三十郎は方向をうしなった。三の太刀も仕損じた。
「無念……」
声をもらし、三十郎は僧坊の羽目板にぶちあたった。
「命をとるとはいわぬ。半蔵に言づけがある。甲賀大黒天が勝負を所望だとつたえておけ。片腕の借りをかえしたいとな」
源心は不敵に薪を捨て、
「去ね！」
と叱咤した。

三

江戸城に毎日槌音や鋸をひく音がひびいている。
先月八月に炎上した江戸城の建設工事が今たけなわでおこなわれている。大勢の大工や左官、土石をはこぶ人足、材木をはこぶ車力たちが終日いそがしくたちはたらいており、建設作業は順調である。
工事は普請奉行の指導のもとにおこなわれ、大工、人足たちをたばねるのは幕府大工頭甲良宗定である。甲良家の祖先は宗広で、家康が江戸城建築のために京都からまねいた大工棟梁である。本丸にちかい鎌倉河岸に屋敷を拝領しており、江戸城設計図面を極秘裡に死守している。江戸城が炎上した場合、ただちに図面をもってはせ参じ、再建の手配をすることになっている。

甲良宗定の指図によって、毎日のべ千人以上の大工や人足たちが江戸城に出入りして工事にしたがっている。今江戸にいかに多くの人口があつまっているとはいえ、千人の大工や下職をもとめるのは至難のワザだ。それでたりない人数は市中の人入れ稼業をおこなう割元からあつめていた。
江戸はまだ建築途上の覇府であり、城下町の整備や拡大工事はひきつづいておこなわれているので、このところ建設景気は一段と勢いを増した。江戸城の火災によって、江戸がいっそう活気づいたのは皮肉である。
三代家光が将軍に就任していらい十七年めをむかえ、一時幕府をゆるがした島原の乱も一昨年終熄をみ、さらに昨年鎖国が完成し、徳川家の治世は安定期に入っていた。土井利勝、酒井忠勝がはじめて大老に任じられ、松平信綱、阿部忠秋、堀田正盛、阿部重次らを老中とする幕閣も一応順風満帆ですすんでいる。
それにともない、江戸は政治、経済、文化の中心地として繁昌、隆盛をみていた。江戸に諸国から人があつまり、人口は年々ふくれあがっている。武士、百姓、町人、身分階級のべつなく、人口は江戸に集住してきた。武士でいえば、関ケ原の合戦、大坂の役などにやぶれて断絶した大名の家臣たちが浪人して江戸にながれこんできた。百姓、町人たちは江戸の近郊、近国の者たちが地元を食いつめ、江戸になだれこんできたのである。
江戸は新興にともなうおおくの労働力を必要としている。そのために市中には人入れ稼業ができ、割元が生まれた。
江戸城建設現場に働く大工、人足、車力たちの中には割元をとおしてやとわれた関ケ原浪人、大坂浪人やその子、あるいは孫たちもまぎれこんでいた。普請奉行はこういう浪人やその子、孫たちをきらったが、どうしても雇傭の網の目をもぐって現場に入ってきてしまう。あまりに雇傭の規則をきび

しくすると、必要な人数があつまらなくなるのである。

やとわれてきた人足たちは若い者がおおいが、中には五十代、六十代の年寄もまじっている。人足たちは種々雑多な者たちの寄せあつめである。

今も、畚で土砂をはこぶ作業がさかんにおこなわれているが、その中に乞食のようなボロをまとった頭髪のちぢれ毛の男がいる。その男はいつも仏頂面をしており、ほかの人足たちとほとんど口もきかないが、じつによくはたらく。その男が仕事の手をやすめたり、ぼんやりしているところを見たことがない。二十代半ばの、もっともつかいべりしない年ごろである。

黙々と不平をいわずにはたらく男だが、今日はちらりとほかへ視線をむけている。

男の視線の先には、一人の年老いた人足の姿がある。老いたる人足はその視線に気づいているのかどうか、二人が視線を合わせることは滅多にない。

土砂をつみこむとき、畚で土砂をはこぶとき、男は何度も年寄のほうを注意した。声をかけるべきかどうか躊躇しているときもあった。

老いた人足が土砂を畚につんでいるとき、その男がすっとそばへ寄っていった。

「じいさん、精がでるな」

ちぢれ毛の男も一緒になって土砂をつみながら声をかけた。

「まだ老けこむわけにはいかないから、若い者とおなじようにはたらいている」

老いた人足がそうこたえた。

「ところで、おれはどこかでじいさんを見たことがある。おぼえはないか」

男は老いた人足に見入っていた。

「さあ、どうかな。江戸は人がおおいから、どこかで会ったことがあるかもしれない」

老いたほうは一瞥もしないでこたえた。

「じいさん、とぼけたって駄目だ。おれの目は節穴じゃない」

男はややむきになっていった。

が、年寄は見むきもしなければ、何も応じようとしなかった。今までとかわることなく、作業をつづけている。

「おれの勘ちがいだったかな」

男はかんがえなおしたかのようにつぶやいた。

そのとき、年寄がはじめて男を正面から見かえした。

「勘ちがいではない。お前は金剛だな。しずかにしていろ」

年寄はひくい声で男の名をいった。

金剛と呼ばれたちぢれ毛の男の目がわずかにひかった。そして年寄の顔を凝視した。

「やはり、そうだったか。不動丸」

金剛はうめくようにいった。変装した年寄の顔と姿の中から精悍な若い男の姿を想像していった。

「おれははじめからお前がわかっていた。だが、ここには警戒の目がひかっている。ここは伊賀者たちの庭先もおなじだ。どこかで、誰かが見ている」

不動丸はおしころした声で金剛をたしなめた。

「不動丸がマカオからもどってきたのは聞いていた。はやく会いたいとおもっていた。今、甲賀者では大黒天源心がはばをきかしていて面白くない」

金剛は憮然といった。金剛も甲賀者であるが、源心一派とは以前から袂をわかっていたのである。

「源心は毘沙門天の位につくつもりだ。日本にもどる早々、源心に命をねらわれた。いつか決着をつ

けねばならないだろう」
「ここで不動丸に会えてよかった。おれは一人でやるつもりでいた。まず道順の仇をうつつもりでここにもぐりこんだ。これからは不動丸のいうことをきこう」
金剛は笑みを見せていった。金剛は剛腕にかけては甲賀随一の者である。気性も剛毅で、それだけに源心とはそりが合わなかったのだ。
「半蔵も源心も、簡単に討てる相手ではない。おれのいうことをきくつもりならば、当分おとなしくすることだ」
不動丸はたしなめるようにいった。
金剛は不動丸の顔をみてにやりとした。
「それにしてもよく化けたものだ。おれですら、なかなか不動丸とはわからなかった。三十くらいは老けて見える」
「お前にすぐ見やぶられるようでは、あぶなくて、こんなところをうろうろしてはおれぬ」
「不動丸は半蔵とたたかって、おたがいに大怪我をしたときいたが」
「およそ半月、養生についやした。もう大丈夫だ。半蔵もおそらく今は回復しているだろう」
「さすがは不動丸だ。日本にもどる早々、きわだったはたらきをしている」
金剛は感心したようにいった。
「ここは半蔵の手の者がうろついている。用心しろよ」
「おれは半蔵がでてくるのを待っているのだ。いつかでてくるとおもう」
「待っているのは半蔵だけではあるまい」
不動丸が小声でいうと、金剛はゆっくりうなずいた。

「もし、機会（おり）があるならば……」
「家光はもうかつての家光ではない。城の外をほっつきあるくようなこともなければ、こんなところにぶらぶらと出歩いてくることもあるまい。つねに二重三重の警固にまもられているはずだ」
「とはいっても、隙はどこかにかならずあるはず」
「将軍を討つには、準備も、手立（てだて）も人数も必要だ。あせらずに時を待て、時はかならずくる」
不動丸がそういったとき、普請奉行輩下の与力と同心がやってきたので、不動丸は目くばせをした。
金剛はさり気なく、不動丸からはなれていった。
与力、同心のうしろには伊賀者が三人ばかりついており、建設現場に不逞の者がまぎれこんでいないかどうか視線をはしらせていた。
与力、同心も大工や人足たちの顔を一人一人たしかめるように見まわしている。
その視線が不動丸のところにもやってきた。
不動丸は何気ないふうをよそおって見かえした。
伊賀者のいやな視線がつきささってきた。
（……）
おだやかでない気持の数瞬がすぎ去った。
いやな視線がほかへうつっていた。
現場へまぎれこんでから、何度もこの瞬間を経験したが、いやな気持は毎回かわらぬ。伊賀者の視線がほかへうつると、ほっとした気持になる。
伊賀者たちは与力、同心たちとともにひとわたり見廻ってから、つぎの現場へむかっていった。
今江戸城内には現場が二十にあまるほどある。その各現場を毎日一度は見廻りにくるのだ。

四

数日後の夕方。不動丸はその日の仕事をおえて、江戸城の現場をでてきた。
不動丸の足は渋谷村へむかっている。今でも不動丸はおもんの屋敷の天井裏を棲家にしており、毎朝そこから現場にかよっているのだ。
もう体はすっかり回復していた。七面の鶴をおもんの屋敷の天井裏にむかえたときは、いまだ瀕死にちかい容態のときで、ほとんど歩行もできぬくらい体は衰弱していた。もし鶴が死ぬ気でたちむかってきたならば、不動丸といえども相手をたおせる状態ではなかった。
おもんと桔梗をまもっていかねばならぬという執念が体をささえ、それが念力となって、鶴を寄せつけなかった。不動丸は全身全霊で鶴にたいして殺意をはなちつづけた。それが功を奏したのであった。
渋谷村にむかってあるきながら、不動丸は後頭部にはりつくような人の視線を感じていた。
(尾行者だ)
とわかったが、何者であるかすぐにはわからなかった。道を小路へまがったり、速歩をとってみて相手の様子をうかがった。
相手は巻かれることなく、ついてきた。
(忍者ではないな)
と不動丸はかんがえた。
このときは相手が何者か推量することができた。

赤坂溜池のさきの一ツ木町の入口で、不動丸は路上から姿を消した。人家の庭を借り、しばし時をすごしてから、おなじ道へでていった。
そのとき不動丸を見うしなって、路傍でやや困惑している様子の男を見つけた。その男は人足風体をしているが、年ごろ四十代の精悍な感じの男だ。
「五十嵐兵部さま、何をなさっておいでですか」
不動丸はちか寄っていって、声をかけた。
その男はおどろいてふりむいた。
不動丸はこのとき、老いたる人足から、本来の姿にもどっていた。今人家の庭で顔や頭髪、衣服などを元の姿にととのえたのだ。
「不動丸どの、失礼いたした」
五十嵐兵部はやや屈託を見せて挨拶をした。
「五十嵐さまが江戸城に雇われ人足としてもぐりこんでいたのは、かねて察しておりました。人目についてはまずいので、声をおかけするのは遠慮いたしていました」
不動丸はおちついてこたえた。
「先だっては、不動丸どのにお力ぞえをいただいたが、本望をとげるまでにはいたらなかった。今後ともご協力ねがいたい」
「加藤家と駿河大納言家とは切っても切れぬ縁でござった。今後も、できれば五十嵐さまと手をくんでいきたい」
不動丸は正直なところを口にした。
「江戸城の現場に不動丸どのらしき人を見かけたが、変装をしておるので確信が持てず、それで尾行

をこころみたしだいだ」

五十嵐は前回は最終の目的を達することができなかった。それで今回ふたたび企図をたくましくし、江戸城内にもぐりこんでいるのだ。

「同志一党もご一緒でございますか」

「左様、今のところ十一人の同志が人足、車力にばけて、現場にもぐりこんでおる。そして機会(おり)のいたるのを待っているしだいだ」

五十嵐は着々と準備をととのえているようだ。

不動丸は五十嵐らの復讐の念のつよさに感嘆した。

「江戸城を炎上させたことは無駄ではなかった。わが甲賀者も少数ながら、こうして江戸城にもぐりこんでいます」

「そちらも油断なくことをすすめているではないか」

五十嵐は甲賀者のくわだてについて興味をおぼえているようだ。

「今度は気長に、じっくりと、着実にやるつもりでいます」

不動丸は自分のかんがえについていった。

前回、五十嵐ら加藤家の遺臣たちと手をくんだことは間違いではなかったと不動丸はおもっている。けれどもことをいそぎすぎたことに悔いの念をいだいていた。

「じっくり気長にやるのは結構だ。しかし物事には勢いというものがある。勢いを逸してしまうと、どんなことも成就させるのはむつかしい」

五十嵐のほうは少々いそいでいるようだ。その点を不動丸は懸念した。

加藤家の祖清正は太閤秀吉の恩顧の家臣でありながら、太閤没後は家康に誼(よしみ)を通じ、徳川家の天

下取りに協力を惜しまなかった。ところが三代将軍の代になって間もなく、清正の子忠広が御家断絶を命じられ、大勢の家臣たちは路頭にまよう羽目となった。加藤家の遺臣たちが家光に恨みをいだくのは当然とかんがえられた。

「五十嵐さまのおっしゃることも一理ある。しかし、急(せ)いてはことを仕損じる、という昔からつたわる言葉もわすれるわけにはまいりません。今後はいろいろ話し合い、力を合わせるべきところは合わせてやっていけば、うまくはこぶかもしれません」

不動丸がそういうと、

「おたがい単独でぶつかるより、手をむすび合えば、それだけ力は大きくなる。そうなれば大望をはたすことも、あながち夢におわるまい。われらにはぜひとも甲賀の力が必要だ。甲賀にとってもわれわれの力は入り用なはずだ」

五十嵐はふたたび提携をのぞんできた。

「それについてはかんがえさせてもらいましょう」

「十分かんがえておいてもらいたい」

「わかりました。今日はこれにて」

二人は挨拶をしてわかれた。

幕府と伊賀者を敵にするとしても、加藤家と甲賀者とでは立場がことなる。戦略、戦法もちがう。全面的に協力してことをはこぶのは無理だと不動丸はおもった。甲賀者は甲賀者としての行動が必要であり、所詮そうするしかないのである。

不動丸は五十嵐兵部とどのような提携をしていくべきか思案しながら渋谷村へむかった。

江戸も赤坂をすぎて青山にくると、あたりは田畑や野原がおおくなる。武家屋敷もあるが、田園風

景がひろがってくる。
夕闇がしだいに濃くなり、人影はめだってすくなくなった。
青山家の塀が長々とつづく道をあるいた。
塀は薄茶色をしているが、それが夕闇にしずみかけている。このあたりは人気のない、さびしい道である。日が暮れてからは女子供ではとても気味がわるくてとおれない。
塀の半分ほどまできたとき、不動丸はかすかに殺気をおぼえた。
何かいやなものがでそうだと感じ、すばやく四方に気をくばった。
敵は姿を見せていない。
左手は青山家の塀、右は寺院の塀だ。
不動丸は後頭部にひやりとするものをおぼえた。
(後方だ!)
と敵のひそむ方向を察した。
「でてこい、曲者っ」
不動丸は前をむいてあるきながら声を発した。
が、反応はなかった。
「どうした、曲者」
いいつつ後方に身をそなえたとき、不動丸は全身に冷水をあびたような衝撃をうけた。
(しまった……)
前方のすぐちかくの塀の中からとつぜん人影があらわれたのだ。その人影は塀とまったくおなじ薄茶色の筒袖(つつそで)と軽衫(かるさん)に身をつつんで塀に張りついていたので、まったく気がつかなかった。

曲者は毎日この時刻に不動丸がこの道をとおることを知っていて待ち伏せたのだ。
不動丸はとっさに、体を反転させてかまえをつくった。
そのときすでに、前方の相手は疾走を開始していた。
ビュン
と音を発して、相手は風のように不動丸の上空をはしりぬけた。相手が発した音は忍び刀が空を斬る音だ。
不動丸はとっさに地に身を這わせ、からくも忍び刀からのがれた。
相手は今度は後方から体をひくくかまえ、地を摺(す)るように疾走してきた。
「やあっ」
不動丸は今度は高く空へとんだ。敵と交錯する一瞬、不動丸もかくし持っていた忍び刀をぬきはなち、地から天へむかってすくいあげた。
かすかに手ごたえをおぼえた。今度は前方に位置した敵はわずかにひるんだように見えた。
「七面の鶴、だな。性懲りのないやつ」
不動丸が鶴を相手にするのは、これが三度めである。最初はおもんの屋敷の床下、二度めは天井裏だった。不動丸はこれで怒りをおぼえはじめた。
「不動丸、今度は死んでもらう」
鶴がほざいた。
「馬鹿め、身のほど知らず」
かつてはおなじ釜の飯をくった甲賀一味であるが、不動丸は必殺のかまえに入った。
鶴もひょろりとした背丈を前にかがめるようにして必殺の体勢でせまってきた。

このまま両者がぶつかり合えば、かならずどちらかがたおれる。そういう体勢で両者の距離がちぢまった。

「やっ」

先に突進したのは鶴のほうだ。

おくれじと、不動丸も突進しはじめたとき、

「やあっ」

不動丸の後方からも、するどい気合を発する声があった。

(うぬ!)

不動丸は臍(ほぞ)をかみながら、突進を中断した。

後方にも敵がいた。はじめに不動丸が後方に敵がいると判断したのはまちがいではなかったのだ。

「とおっ」

不動丸は左足を軸にして、体を半回転させながら右足をとばした。

そこへ後方の曲者が突進してきた。

右足が相手の脾腹に深々とつきささった。

「うっ……」

呻き声を発して、相手はその場にくずれおちた。

不動丸は二間ほど跳んで、忍び刀を前方の敵へあびせた。

鶴も忍び刀を不動丸の眉間(みけん)めがけて打ちこんできた。

両者とも紙一重の差で必殺の一刀をかわした。

が、間髪をおかず、鶴の一刀がふたたび不動丸の顔面をおそった。

不動丸の攻撃が一瞬おくれたのは、背後の敵が、いったんくずれおちながら、ふたたび立ちあがってきたからだ。

不動丸は鶴の攻撃をかろうじてのがれ、今度は低空を跳びながら、片足をとばし、相手の顎めがけて蹴あげた。

ぐわっ

と音がするとともに、足が命中し、鶴の顎がくだけた。

だが、そのとき背後の敵、寿の三郎が不動丸にせまっていた。寿は不動丸の足技をおそれて、手裏剣を投じようとした。

不動丸には寿の意図がよめたが、飛び道具へのそなえがすぐにはできなかった。

(あわや!)

とおもったとき、後方に足音がひびいた。

「不動丸、助勢するぞ!」

つづいて、たのもしい言葉が夕闇から宵闇にうつりかけた後方にひびいた。

(金剛だ!)

とおもったときには、もう金剛のたくましい体が宵闇の中にはげしくおどっていた。金剛は寿をとらえるなり、腰にのせて三間もかなたに投げとばしていた。

鶴が羽でもはえたように上空へふわりと跳んだ。そして青山家の塀へとびうつって、その上をまっしぐらに前方へはしりだした。

不動丸は塀の下を疾走した。

塀の上と下で二人が疾走をつづけた。

約四半丁ほどはしりつづけて、塀がつきたとき、鶴の体が空中へ舞った。
それを追って、不動丸の体も空中へ高々と飛翔した。
空中で一回転しながら、不動丸は鶴の股間めがけておもいきり足をとばした。
「ぎゃあっ」
獣の断末魔のようなさけびが空中であがった。
鶴の体は飛翔力をうしなった鳥のように頭から垂直に地におちた。そしてそのままうごかなくなった。
鶴は股間への一撃で絶命していた。

五

秋が暮れて、雁渡し（青北風）の吹くころとなった。
江戸城本丸の工事はたけなわである。今ごろになると、大工や人足たちの手が朝夕はかじかむようになる。
本丸の形がしだいにできてくると、西の丸にうつり住んでいた家光がときたま家来たちをつれて、建設現場をおとずれるようになった。そしてくるたびに姿のととのってくる本丸をながめては、満足してかえっていくのだ。
雨の日をのぞけば、家光が現場に顔をだすのは、大体、朔日と十五日にかぎられていることに、不動丸は気づいた。
朔日と十五日といえば、諸大名の月次登城がおこなわれる日だ。諸大名が総登城する日は、五節句と毎月の両日とさだまっている。
十月に入って間もない昼、不動丸のいる現場に人足姿の五十嵐兵部がふらりとやってきた。
「今度の十五日、家光がやってくる」
五十嵐が周囲を気づかいながらひくい声でささやいていた。彼も諸大名総登城の日に家光が現場にやってくることに気づいていたのだ。
「そうでしょうな」
不動丸がこたえると、五十嵐の目が一瞬するどくひかった。
「十月十五日を将軍襲撃の日とわれら一同でさだめた。場所は本丸の建設現場だ。甲賀者の協力があれば大変たすかる。どうであろう」
いっそうひくい声で五十嵐はいった。
きいた瞬間、
（無理だ）
と不動丸はおもった。諸大名総登城の日は朝から夕まで、江戸城諸門の警戒が厳重である。さだめられた諸大名の家来たちが持場の諸門を警備するばかりでなく、旗本、御家人らも持場の諸門や木戸を警備する。伊賀者たちも出動する。
「その日は警戒がきびしく、将軍襲撃はむつかしいとおもいますが」
不動丸はこたえた。
「こちらの準備と攻撃いかんによっては、うまくいくかもしれぬ。不動丸どのらの協力を得たい」
五十嵐はかさねていった。
「じっくりと待てば、もっと確実にことをはこべるときがあるでしょう」

不動丸は真意を口にした。
「よくかんがえてみてほしい」
「かんがえてみますが、むつかしいとおもう」
「そのときは、われわれだけで決行する」
そういって、五十嵐ははなれていった。

十月十五日。

この日は浄土宗でいうところのお十夜の最終日である。浄土宗の寺院では十月六日から十五日まで十日十夜の法要修行をいとなむ。徳川家の菩提寺である芝増上寺のお十夜法行はかくべつおごそかで、大僧上より御霊屋づきの別当および役僧をはじめ、寮主僧数百人が出仕して大規模におこなわれる。

この暁、不動丸が天井裏で目ざめ、東の空をおがむと、暁闇の中に、一条、二条、さらに三条、あざやかな光跡をえがいてつづけざまに星がながれた。
（星が墜つ）

不動丸はそれを見て、心中ふかくつぶやいた。星がいくつもつづけておちるのは、凶事の前兆だといわれている。

今日は、五十嵐兵部らが家光をおそう日である。

不動丸は今日になるまで何度も五十嵐に十月十五日の決行をおもいとどまるようにすすめたが、彼の返事は否であった。

不動丸は卯の刻（午前六時）をまわるころには渋谷村をでて江戸城へむかった。この時刻にでなければ、不動丸の足でも辰の刻（午前八時）までに江戸城の建設現場にいたるのに間に合わないのだ。

不動丸はこの日いつもと同じく辰の刻から作業についた。

月次登城は巳の刻（午前十時）からである。

家光の見廻りは辰の刻から巳の刻のあいだにおこなわれる。

不動丸はいやが上にも緊張して、そのときがいたるのを待った。

辰の刻をだいぶまわったころ、家光が大勢の供廻をしたがえて、本丸御長屋御門の現場にあらわれた。

不動丸は御書院御門前の現場におり、現場の位置としては二つはなれている。

四半刻ちかくたったころ、北の方角からとつぜん鬨の声に似たさけびがあがるのがきこえた。北は御長屋御門の方角である。

それにつづいて大勢が乱闘するような騒然とした気配がつたわってきた。

が、それは間もなくおさまったとみえて、御長屋御門の方角がしずかになった。

巳の刻を前にして、急にこの日の作業が中止になるという触れが現場にでた。

「総登城も中止になったようだ」

現場でそんな噂がひろがった。城内で事件がおこったことはもはやあきらかだった。

家光が御長屋御門の前で人足たち約十人におそわれたが、家光に別条なく、おそった人足たちが全員とらわれたとつたわったのは、その日の午後であった。

月光瞬く

一

寒風に月が冴えている。ひえびえとした月光が路上にさしている。

もう師走も半ばである。江戸はこおりつくような寒さがつづいている。なかでもさむいところが、小伝馬町の牢獄である。

獄吏の詰所にはまだしも手あぶりの火桶がおいてあるが、獄舎内となると、火のかけらもない。あるのはつめたい牢格子と栗の尺板をしきつめた床だ。そのうえ、身にはおるものは下着に粗末な獄衣だけである。獄吏のきびしい詮議にはなにひとつ口を割らぬ剛の者たちも、このさむさは骨身にこたえるようだ。

牢屋敷はかつては常盤橋の外にあったが、慶長のころ小伝馬町にうつされた。長方形の三千坪にちかい敷地の周囲は深い濠と忍び返しをつけたたかい塀でかこまれている。その中に大牢、二間牢、揚り屋、揚り座敷、百姓牢などがあり、穿さく所、拷問蔵、切腹場、首切り場、賄所などが附属してお

り、獄吏の住居、牢奉行石出帯刀の屋敷もある。

この牢屋敷の警備が初冬十月の中ごろからきびしくなった。十月十五日、諸大名登城の日、将軍家光の暗殺をねらって、改易された加藤家の元家来五十嵐兵部ら十一人が江戸城御長屋御門をおそってとらえられ、牢屋敷につながれているためである。その十一人は東口揚り屋に詰めこまれている。揚り屋は百姓、町人以外の、多少身分のある罪人をとじこめておく牢である。

五十嵐らの罪条は明白で、白洲取りしらべによって獄門の刑が確定していた。なにぶんにも将軍をねらった由々しき犯罪であるため、刑が確定してから処刑までのあいだは長くない。年内に処刑がおこなわれることが予想されていた。幕府政治にたいする反抗を意味する犯罪だけに、もっともきびしい刑が五十嵐兵部らにとられて当然なのだ。

「このまま獄門台の露と消えるのは無念だ」

「死はおそろしくはないが、初志を得ずにこの世をおさらばするのはこころのこりじゃ。一太刀でも家光にむくいてやりたかった」

加藤家の家来たちは凍てついた揚り屋の床にすわって、歯ぎしりするような言葉をもらした。

東口揚り屋に入れられているのは、この連中十一人だけである。

「まだかならずしも死ぬとはきまっておらぬ」

それまで連中の歯ぎしりをよそに黙然と腕をくんでいた五十嵐兵部が、不敵な言葉をもらした。

面々はいずれも兵部のほうを見やった。

兵部は濃い無精髭を両頬から顎にかけてのばし放題にのばし、一挙の際に幕府の警備の者たちとたたかってこうむった疵を額に生まなましくのこしている。兵部の態度から見ると、きびしい詮議とりしらべをうけた後も闘志はくじけていないようだ。

「死ぬつもりはなさそうだな、五十嵐どの」
一人があきれた顔を見せていった。
「これからまだ何がおこるかわからぬ」
兵部は相かわらず意気軒昂だ。
「何がおこるというのだ、五十嵐どの」
片腕をへし折られて、三角巾でつっている男がいいかえした。
「それはわからぬ。けれども何かおこるような気がする。わしはまだ生きのびるつもりだ」
兵部は気がくるったのでも、なんでもない。本気でそういっていることはほかの連中によくわかった。
「そうなれば、まことによろしいが……。なかなかそうはまいらぬのではあるまいか。ここは小伝馬町牢屋敷だ」
片足に大怪我を負っている男がきびしい表情でいった。
「牢をやぶるのは大変に困難だ。しかし絶対にできぬというわけではあるまい。外には同志もいる。われわれをこのままにはしないだろう」
兵部がそういったので、連中はやや落胆の色をみせた。加藤家の旧臣たちで幕府にたいして恨みをいだいている者は大勢いるが、彼等が力をふりしぼったとしても、牢からの救出は不可能にちかい。
「われわれ同志のほかに、甲賀者の味方もおる」
兵部は、甲賀不動丸の風貌を瞼の裏に浮かべていった。
「たしかに甲賀者の幾人かが、われわれと手をむすんだ。けれども彼等は忍者だ。どこまで信をおけるかわからぬ」

三角巾の浪人がこたえた。
「たしかに忍者にはわかりがたいところもある。しかし、満更でないかもしれぬ。忍者だからこそ、常人以上の期待ももてる」
そういって兵部は目をとじた。瞑想に入ったのか、その後はまわりの者がなにをいってもこたえぬばかりか、目もあけなかった。
「さあ、何かおこるであろうか……」
末席にいた一人がそうつぶやいた。
そのつぶやきもむなしく、寒月の夜はいたずらに更けるばかりであった。
二更がすぎて、三更もすぎた。
暁はもうちかい。小伝馬町牢屋敷に何事もおこる気配はなかった。
厳冬の一夜はあけた。翌朝はうってかわった小春日の陽気だ。赤松材の牢格子のあいだから見る牢庭には、ほかほかとした日だまりがある。昨夜のこごえ死にそうな寒さがまるで嘘のようである。
チチチ……
寒雀の鳴き声がきこえる。
背をのばして、牢格子の外をうかがうと、寒雀が数羽、牢庭の日だまりにおりてきて餌をあさっている。冬の雀や鴉は餌をもとめて人家のちかくまでやってくる。この時期だと、おどろくほど馴れ馴れしくなるものである。牢屋敷内ともおもえぬおだやかな風景がひろがっている。
寒雀は獄舎の入口にある当番所と張番所につめている下男たちの足もとちかくまで寄っていった。
「チチチ……」
下男の一人が鳴き声の口真似をして、雀を手づかみにしようとした。

馴れ馴れしいようでいて、雀のほうも警戒をおこたっていなかった。くるりと身をひるがえして、雀は下男の手をくぐり、足のあいだをぬけた。その先は獄舎の入口である。雀は入口のほうへすすんでいった。

下男が追っていったが、雀はそれをあざわらうかのように巧妙に逃げた。

のんびりとした朝の時間がすぎていった。

外は師走の喧騒だが、塀の中は別世界である。歳末のあわただしさも、年の市のいそがしさもここでは無縁である。牢屋敷のある小伝馬町は江戸市街の中心日本橋の内である。本町、石町の目ぬきにもちかい。大伝馬町、鉄砲町の盛り場、問屋街はすぐとなりだ。意外にもそんな繁昌地の中に牢屋敷はあるのである。

牢屋敷内の静穏がやぶられたのは、昼下りのころであった。昼餉（ひるげ）のあとの、ほっとした休みの一時（いっとき）、牢庭の一角でにわかにさわぎ声があがった。人と人とが怒鳴り合い、罵倒する声が四方にひびいた。囚人と囚人が牢庭であらそうのはままあることだ。大体、牢獄に入ってくるのは血の気のおおい連中である。しかも彼等はとじこめられて、血が鬱屈している。ひょんなきっかけで、流血の大喧嘩をすることがある。

牢同心たちがさわぎのおこっている埋門（うずみもん）のほうへはしった。当番所、張番所の下男たちも六尺棒をにぎって、そちらへむかおうとした。

そのとき、朝のうちから日だまりで餌をあさっていた雀がさわぎにおどろいたか数羽、にわかに羽音をたてて飛びたち、いっせいに獄舎内へとびこんだ。

「おや？」

それに気づいて目をはしらせた下男がいた。

「何かあったか」

ほかの下男にたずねられて、

「いや、雀だ……」

その下男はうたがいを自分で打ち消した。

「雀などほうっておけ。牢庭の喧嘩が大きくなりそうだ」

下男たちは声をかけ合って、埋門へむかって駆けだした。

獄舎の番人たちのほとんどが獄舎からいなくなった。

獄舎の中の通路は内側の牢格子と外の壁がわりの格子にはさまれており、鞘土間（さやどま）と呼ぶ。その鞘土間を数羽の雀がほとんど一列にならんで、チチチ……とちいさな声をたてながら奥へ、奥へとすすんでいった。まことに珍妙な光景が展開した。

「なんだ、あれは？」

大牢や二間牢の格子のあいだからこの光景をながめて、声をだした囚人たちもいた。

雀はならんで東口揚り屋の前まできた。

揚り屋の加藤家の旧臣たちもとつぜんあらわれた雀の行列に目をみはった。

やがてのうちに、彼等の口から期せずしておどろきの声があがった。

「おおっ？」

「これはどうしたことだ！」

「この世の不思議だ。こんなことがあろうか」

なんと、雀たちが格子をくぐって牢内に入ってきた。

まるで白昼の幻覚を見ているようだ。一陣の風が中に吹きこんだ。そして三尺たらずの潜戸（くぐり）の錠が

音もなくおりた。
「天の助けだっ」
「南無八幡っ、奇跡がおこったぞ！」
加藤家の家来たちは驚異の声をあげた。その声がおおきな喚声にかわっていくのに時間はかからなかった。
「牢をやぶれっ、みんな逃げるんだ！」
「鍵役同心をおそって、大牢や二間牢の者たちもはなってやれ」
一同はつぎつぎに潜戸から外へでていった。
そして鍵役同心の詰所へはしった。
東西二カ所の大牢や二間牢などがそう時間のたたぬうちにあけはなたれた。
十人、二十人の囚人たちがたちまち数十人の群れになり、さらに百人以上の集団になった。
喚声があがり、どよめきがおこった。囚人の群れは狂喜し、怒濤のように牢屋敷の北にある裏門へむかった。
制止する牢役人の声はたちまち囚人たちの喚声の中に消えた。
囚人の群れの行く手をさえぎるものはなかった。裏門の見張番士たちは、何者かの手によって、すでに約十人ことごとく打ちすえられてたおれていた。
囚人たちは裏門をうちやぶって逃走した。まるで白日夢のような出来事であった。

二

寛永十七年の正月がきた。
七草があけたが、今年はなんとなく不穏な空気をはらんだ正月であった。旧冬、年の瀬に小伝馬町牢屋敷で脱獄がおこなわれ、百数十人の囚人たちが江戸市中に逃走した一件が解決していなかった。江戸市中や近郊に大がかりな探索網がしかれ、大多数の囚人たちがつかまったり、みずから牢屋敷にもどってきた。けれどもまだかなりの数の囚人たちが行方不明になっていた。
獄門の執行をまぢかにひかえていた加藤家の家来たちは一人もつかまっていなかった。いずれも市中か近郊に潜伏している可能性がつよく、町奉行の与力、同心、目明したちが必死になって探索をつづけていた。
昨年の大火による江戸城建設工事は、今年もひきつづきおこなわれていた。
老人足に化けた不動丸は一日もやすまずに工事現場ではたらいていた。昨年、不動丸がやすんだのはたった一日である。その日、不動丸は金剛とともに小伝馬町牢屋敷にちかづき、寒雀数羽をもちいて、牢同心、下男たちを幻惑させて翻弄し、見事に五十嵐兵部らの脱獄を成功させた。その下準備として、数日前、金剛の仲間の甲賀者二人を入牢させて、牢庭でさわぎをおこさせていたのである。
しかもその翌日から、不動丸はいつもとかわらず建設工事にしたがっていた。金剛もおなじく、なにくわぬ顔をして工事人足をつづけた。工事はまだ当分つづきそうだ。工事がつづいているあいだは、人足たちの中にまぎれていれば探索の目をくらますことができる。
「今夜はどこへもどる？　不動丸」

昼の中やすみのときに金剛がちか寄ってきてきいた。
「そうさな、まだきめていないが」
不動丸はこれまで渋谷村にあるおもんの家から現場までかよっていたが、脱獄事件後は渋谷にちかづかぬことにしていた。もし探索の手がそちらにのびていたら、おもん、桔梗の母娘に迷惑がかかることになるからだ。それ以後不動丸は各所の寺院のお堂やお宮などにもぐりこんで仮寝をつづけていた。別段それが苦になることはないのである。
「おもんさま、桔梗さまも安心とはいえまい。牢屋敷では脱獄の一件を甲賀者一味が手を貸したものと見ているかもしれぬ」
と金剛はいったが、不動丸もおなじかんがえをいだいていた。
「渋谷のことは心配している。おもんさまがずっと無事だといいが」
「今のところ無事のようだが、今後も無事であるとはいえまい」
「おもんさまと桔梗を、今までどおり渋谷村においておくのがいいか、それともっと安全なところへうつしたほうがいいのか……」
不動丸はこの思案をずっとつづけていたが、きめかねていた。
「安全なところがあるのか」
「一概にはいえぬが……、こころあたりがないことはない」
不動丸と金剛はあたりをうかがいながらひくい声で言葉をかわした。
「紀州大納言さま……？」
「まあそんなところをかんがえている」
紀州大納言頼宣と駿河大納言忠長とは、叔父、甥の関係にあり、両者はこころをかよい合わせてい

たのである。さらにもう一ついえば、改易された加藤忠広は大納言頼宣の義弟であり、さらに忠長の義弟でもあった。ここに忠長、頼宣、忠広の関係があり、幕府はこの三者の関係におそれをいだいていた。忠長は亡く、忠広は配流され、〈南海の竜〉と称せられる頼宣一人が健在なのであった。
「渋谷にいるよりは、紀州家にかくまわれていたほうが安全だ」
「大納言さまにはすでに国松君をあずけている。このうえご迷惑をおかけいたすのはこころぐるしい」
国松は忠長のわすれ形見であり、頼宣とも血のつながりがあるが、甲賀者の母娘まで頼宣にあずけるのは気がすすまなかった。できるならば、不動丸は自分のちからで母娘をまもっていきたかった。
「不動丸のかんがえはわからぬではないが」
「ともかく、渋谷の様子をさぐってくる」
「そうするといい」
金剛も母娘の安否が気になるとみえてそうすすめた。
翌日は朝から雨が降っていた。
暦のうえではもう早春で、寒気はだいぶぬるんでいた。ながい冬は去りつつあり、天も地も、目に見えるものはこころなしかあかるくなった。風の音や雨の音にもやわらかさが感じられてきた。
（無事だといいが……）
そうおもいながら不動丸はかよいなれた渋谷へむかった。
雨は渋谷にも降っていた。
渋谷は田園の地であり、田畑と荒野が入りまじっている。山もあれば、川もある。ちかごろではよ

うやく大名の抱屋敷などがぽつんぽつんとたってきた。
音もなく、雨が田園を濡らしている。丸坊主になった雑木林が雨中にけむっている。
畦焼をしたあとの風景も見え、田園だけにいっそう早春の気配を目にすることができる。
おもんと桔梗は雨の中、屋敷の裏手にある麦畑にでていた。
早春とはいえ、余寒はまだきびしい。まして雨の中となればなおさらである。母娘はともに蓑笠をつけ、裁っ着け（もんぺ）をはいて麦踏みをしていた。麦はおさないうちに踏みかためておかないと、株張りがわるくなるのだ。農家では今の時期、くりかえしくりかえし麦を踏む。
あちこちの麦畑でおなじ光景が見える。
畦道のかなたに、宮益坂につうじる一本のほそい村道がある。その村道にはじめはぽつんと人影が見えた。
遠い人影にさきに気づいたのは桔梗のほうである。しかし、二人はさいぜんから言葉をかわすことなく黙々と麦踏みをつづけていた。言葉数がすくないのは、二人とも胸にわだかまりをいだいているからだ。
おもんは昨年十月十五日、江戸城御長屋御門に家光をおそってとらえられた旧加藤家の浪人たちのことを噂で耳にしていた。それが以前自分をたずねてきた五十嵐兵部であるような気がしていたところに、年末の小伝馬町脱獄の一件をきいた。おもんはそれも五十嵐兵部とその一味だと信じていた。虚無僧姿でここをたずねてきた兵部の風貌はおもんの脳裡にきざみつけられていた。彼の言葉、声音も鼓膜にきざんである。旧主のために一挙をはかろうとする兵部の心情にうたれたことをわすれていなかった。
脱獄した兵部がもしかしたらここをふたたびたずねてくるかもしれないという予感をおもんはいだ

いていた。なにかしら、この一件に自分が巻きこまれていくような気がしてならなかったのだ。
「誰かくるようですよ」
そのとき桔梗が畦道のかなたを見やっていった。
おもんもそちらをみた。
数人の人影が村道をこちらにむかってやってくる。
おもんはなんとなくいやな予感がした。
気持をおさえて麦踏みをつづけていると、人数がさらにふえた。数人の人影のうしろにさらに約十人くらいの男の影が見えた。うしろの男たちは長い棒のようなものをそれぞれかついでいる。彼等はだんだんこちらにちかづいてきた。
「うちに用がありそうですね」
おもんはややきびしい表情を見せた。
「うちのようです。何の用でしょう」
桔梗は不審の色を浮かべた。
「何がおこっても、あわててはいけませんよ。なにもおそれることはないのですから」
ひくい声だが、おもんは毅然としていった。
人影は村道から畦道に入ってきた。うしろからくる男たちがかついでいるのは青竹の束のようだ。
おもんの胸中で不穏なおもいがつのってきたが、あえて気丈に麦を踏みつづけた。
「かつて甲賀道順と名乗っていた者の家はここか」
麦畑の前まできて、数人の男たちの先頭の者が横柄にたずねてきた。彼等のいでたちや態度からすると、町奉行与力、同心たちのようだ。

おもんはこころがにわかにふるえてきたが、そんな様子はおくびにも見せなかった。
「もう、とうに亡くなりましたが、わたしが道順の妻でございます」
道順健在のころの日々の記憶がおもんのうちによみがえってきて、臆することなくこたえた。
「そうか、おまえが甲賀毘沙門天の女房か。こちらが娘の桔梗だな」
与力とおぼしき者がかさねて権柄ずくにいった。
桔梗は声がでぬようである。
「わたしの娘桔梗ですが、なにか？」
おもんがかわってこたえたが、このときはもうすっかり肚がすわって、ふるえもとまっていた。
「ちかごろこちらの家に、胡乱な者はたち寄らなかったか」
てっきり五十嵐兵部一味か不動丸のことをたずねているのだろうとおもった。
「そのような者はたち寄っておりません。今では誰も寄りつきません」
おもんははっきりとこたえた。
「これから立ち寄るかもしれぬ」
与力とおぼしき者はおもんの言葉にかかわりなくそういった。
「道順はもう七年も前に亡くなっております。わたしどもは、今はただの農家とまったくかわりません」
おもんは相手を見すえていったが、その男はふふん……と鼻先でわらっただけだった。
「甲賀不動丸という者があらわれたことがあるだろう。そやつは国禁をおかした者だ。昨年、脱獄を手びきした疑いもある。おまえたちにも不動丸をかくまった疑いがある。おまえたち母子、当分のあいだ屋敷の出入りをゆるさぬ」

その男ははっきりと申しわたした。
「われわれは町奉行所の者である。不動丸がつかまるまで、おまえたちもこの屋敷も、町奉行の命令のもとにおく。いいな」
というなり、その男は後ろにひかえる若党や小者たちに指図をくだした。
男たちは持ちこんできた青竹を屋敷の周囲にうちはじめた。
そしてたちまちのうちに竹矢来をくんで、おもんの屋敷をとりかこんだ。おもんと桔梗と下男の三人がその中にとじこめられる結果となった。

三

闇が地上をおおっている。不動丸は闇の中をあるきつづけてきた。
月はでているが、かすかな光しかさしかけていない。
不動丸は日がくれてから渋谷へむかった。渋谷についたのは、初更から二更へうつるころである。
畦道に立って夜目をきかすと、おもんの屋敷の輪郭が闇の中に浮かんできた。茅ぶきの大屋根はもとより、軒や庇までぼんやりと見えた。もう屋敷の中から明りはもれていない。
しばらく空けただけなのに、長らく屋根裏にひそみつづけていたので、おもんの屋敷になつかしさをいだいていた。
（おや……？）
不動丸は闇の中に妙なものを見た。
錯覚かとうたがって、もう一度夜目をきかした。

屋敷の周囲をとりまく妙なものが、今度はかなりはっきりと見えた。
（竹矢来だ……）
屋敷のまわりにきびしく竹矢来が結いまわされているではないか。
おもんと桔梗は竹矢来の中にとじこめられているのであろう。まるで罪人にたいするような処置がほどこされているのだ。
憤然としたおもいがふきあげてきた。
不動丸は立ちすくんだまま、しばらく竹矢来をにらみつけた。そうしているうちに猛然たる怒りの炎が燃えあがってきた。
（どうすべきか……？）
不動丸は怒りの中でまよった。このままひきかえすべきか、それともおもんと桔梗を奪取すべきか。
竹矢来のまわりには何人かの番士がついているはずである。それはおもんと桔梗が逃げだすのを見張るためであり、なおかつ二人をうばいとりにくる者への警戒である。番士たちは手ぐすねひいているはずだ。
今いたずらに激情にかられて竹矢来をやぶって中に侵入すべきではないとおもった。
けれども、不動丸はひきかえす決心もできなかった。おもんと桔梗をこのまま見すごしにしておく気持になれなかった。
不動丸としてはめずらしいことだが、ややながい逡巡をつづけた。
逡巡した末に、おもんと桔梗を奪取する決心をした。
不動丸は畦道をおおきく迂回して、屋敷の背後へまわった。背後は野原と麦畑である。
もう一度不動丸は屋敷の位置を闇の中にたしかめて、野と畑のあいだの畦道をすすんでいった。

竹矢来がしだいにちかづいた。
ちかくで見あげると、二間余の高さはある。竹もほそいやつではない。ふとくて頑丈な青竹がしっかり埋めこまれ、結いまわされている。仔細にあらためると、竹矢来には鳴子がほどこされていた。迂闊に触れれば、おおきな音をたてる仕懸になっているのだ。
不動丸は竹矢来のまぢかまでいった。そして懐中からシコロをとりだした。シコロは苦無、鉤縄などとともに忍者必携の道具で、先のとがった、ちいさな鋸である。
不動丸は地に寝そべり、音をたてぬようにそろそろとシコロで青竹を切りはじめた。深沈としずまりかえった夜更だけに、わずかな音をたててもすぐに気づかれるおそれがあった。
細心の注意をはらって、シコロをひいた。二カ所を切りはなすと、竹矢来に人がくぐりぬけられるだけの穴があいた。
不動丸は頭のほうから竹矢来をくぐりぬけた。そこは屋敷の裏庭にあたるところだ。植込や庭木などがたちならんでいる。
不動丸は植込と庭木の下にひそんで、屋敷内をうかがった。番士たちが幾人かはかならずいるはずである。それもかなり腕のたつ者が配置されている気がした。
幕府がおもんと桔梗をとじこめて屋敷に竹矢来を張りめぐらしたのは、不動丸をおびき寄せ、ここにさそいこむ罠かもしれぬ。だとしたら不動丸は、とんで火に入る夏の虫だ。不動丸は今大変な賭けをしようとしているといっていい。
不動丸は緊張感をおぼえていた。生と死を賭けたはざまの中で、はげしい闘志がかきたてられてきた。危険だから後へもどろうという観念は不動丸の中にはなかった。危険だからこそ、一層勇敢にたたかわねばならないというかんがえがあるのみだ。

おもんと桔梗がいる位置は察することができる。
不動丸は息をひそめて、あたりの様子をうかがった。どこに番士たちがひそんでいるか、地に耳をつけてさぐってみた。こうして聴覚をとぎすませると、一里四方の人の足音がきこえる。これを〈遠聴の法〉という。
しばらくは、屋敷内に人の足音はひびかなかった。
根気よく不動丸は遠聴の法をつづけた。静寂の中にかすかな音が風の音にまじってきこえてきた。
（犬の足音だ）
これは野良犬であろう。
不動丸はさらにさぐりつづけた。今度は地中で穴を掘っているモグラの音が耳に入ってきた。
不動丸は辛抱づよく番士たちの気配をさぐった。かすかな気配がつたわってきた。足音ではなく、人の息する音がようやくかすかに聴きとれた。しかも一カ所ではなく、屋敷内の数カ所からきこえてきた。
竹矢来の出入口、玄関の脇、台所口、厠（かわや）のあたり、縁側の下、そんなところに番士がひそんでいるのがわかった。
不動丸は屋内へしのびこむ入口をかんがえた。縁側の下から床下にもぐりこんで、台所の土間に入りこむ道筋がいちばん安全である。けれども、縁側の下に番士が一人ひそんでいる。これをなんとかしなければならない。
不動丸は植込と庭木の下から這いだし、縁側にちかづいていった。
チチ、チュウ……
不動丸は鼠の鳴き声をまねた。

チュ、チュウ……
もう一度真似て、小石を二つ三つひろい、縁側のむこうに投じた。
黒い人影が縁側の下からすっと立ち、石のおちた方へすばやくうごいた。
その隙に不動丸は神速のうごきで身をひるがえし、縁側の下へもぐりこんだ。そこから床下を這い、台所の土間へすすんだ。
床下から羽目板を二枚はずすと、土間に入りこむことができる。これは不動丸が外から屋根裏へひそむためにかねてつくっておいた侵入口である。
土間にでてから、不動丸は屋内の様子をうかがった。
おもんと桔梗以外はいない様子である。
不動丸は台所からおもんの部屋へすすんだ。
部屋の隙間からほのぐらい有明行灯の明りがほそくもれている。
耳をすますと、おもんと桔梗の呼吸がきこえてきた。桔梗は竹矢来で屋敷をかこまれてから、夜をおそれておもんと寝間（ねま）をともにしているのだろう。
音もなく、襖の戸をひいた。
部屋には夜具が二組のべてある。夜具をくっつけ合って抱き合うように身をよこたえている二人の姿が、薄明りの中に見えた。
「おもんさま」
不動丸はちいさな声で呼びかけた。
おもんはねむっていなかったと見えて、すぐに目をひらいた。
「おしずかに。不動丸がまいりました」

不動丸の言葉と同時に、おもんの肩がぴくっとふるえた。
おもんがこちらをむいた。
「家のまわりにはきびしい見張りがついています。よく……」
見張りをくぐりぬけてここまできた不動丸におもんは感嘆したようだ。
「ここはあぶない。おもんさまには国禁をおかしてマカオから日本にもどってきたわたしをかくまった疑いがかけられています。いつ死罪に処されてもおかしくありません。ひとまずここから逃げてください。わたしがご案内いたします」
「わかりました。わたしたちをつれて逃げてください。今、桔梗をおこします」
おもんの決断ははやかった。さすが甲賀毘沙門天の妻として生きてきただけのことはあった。
「何も持たず、体ひとつで逃げてください」
不動丸がいうと、おもんはうなずいて桔梗をおこした。
桔梗はすぐに状況を察して、夜着を着がえた。
おもんは仏間へゆき、道順の位牌だけ懐におさめてきた。
おもんも桔梗も緊張しきっている。
「安心してついてきてください。かならず無事におつれします」
不動丸はそういったが、心中はそれほどおちついたものではなかった。往きがうまくいったからとて、復りも成功するとはかぎらぬ。往き同様、復りも賭けである。成否はやってみなければわからない。
不動丸は先頭にたって台所へむかった。
台所の土間におり、羽目板の穴から床下へすすんだ。

床下をすすみながら、番士たちの様子をさぐった。番士の配置はかわっていないようだ。脱出口はやはり、侵入口とおなじ縁側である。そこには最前と同様、番士が一人張りついている。ふたたび番士を縁側からひきはなさなければならない。が、おなじ手はつかえぬ。
不動丸は密殺する決心をした。音もたてず、声もたてることなくころさねばならぬ。
おもんと桔梗を縁側のちかくに待たせ、匍匐しながら前進した。床下から前方を凝視すると、番士が一人、縁側の外で見張っているのが見えた。
番士の注意は前方にのみむいている。背後を注意していないのが見てとれた。
不動丸は音もなくちか寄っていった。いきなり背後からおそいかかり、片方の腕を番士の首に巻きつけ、手で口をふさいだ。と同時に、右手ににぎった鎧通しを左胸にぐいと突きたてた。
番士は抵抗をこころみようとしたが、二、三呼吸おくとともにずるずると地にくずれおちていった。

四

第一関門の敵はたおした。
不動丸はおもんと桔梗をつれて、縁側から床下を脱出した。
月が地上を照らしている。その下を、一行は這うように裏庭の植込と庭木の陰をめざしてすすんだ。
そのむこうに最前つくっておいた竹矢来の穴がある。
実際の距離は十余間にすぎないが、一里もかなたのような遠方におもえた。番士たちはまだ数カ所にいる。いっさい気づかれぬよう薄氷をふむおもいですすまねばならぬ。
ようやく、植込と庭木がちかづいてきた。

そのとき、桔梗がふるえる足をすべらし、体の重心をうしなった。前にたおれこみながら、
「ああっ……」
と声をもらしてしまった。
その声がしずけさをふるわした。
闇の中で番士たちのざわめきたつ気配がわかった。
「いそげ！」
不動丸は桔梗をかかえて闇の中をはしった。おもんもおくれじとついてきた。
間髪をおかず追跡してきた者たちがいる。各所から黒い影が疾走してきた。すごい早さで翔ぶようにせまってきた。
不動丸はこのままではとても二人をつれて逃げきれないとおもった。
一瞬の決断にせまられ、母子とわかれる決心をした。
「二人でさきに逃げてください。わたしはのこって敵の相手をする。かならず後からゆく。渋谷八幡の鳥居で待っていてくれ」
不動丸は二人にいった。
そのあいだにも敵の影がせまってきた。
「さあ、いそいで」
決断しかねる二人をうながし、竹矢来の穴からおもん、桔梗の順で逃がした。
シュッ　シュッ
はやくも手裏剣が闇を切って飛来した。敵の中に忍者がいるようだ。伊賀者であろう。
おもんは桔梗の手をひいてはしりだした。

それを見さだめて、不動丸は竹矢来の前でむきなおった。
数人の影がせまってきた。
不動丸はいったん植込と庭木の下に身をひそめた。
敵の影がまぢかまできたとき、不動丸はいきなり植込の陰からとびだした。
「やっ」
地を蹴って空中からの足蹴りを目にもとまらず正面の敵の側頭部に見舞った。
敵の影が数間もとんで、たおれた。
不動丸は地に舞いおりるなり、ふたたび身をひるがえし、今度は低空からのえぐるような蹴りをもう一人の敵の腹部に命中させた。
ぐうっ
呻き声をのこして、その敵は前にくずれおちた。
「甲賀不動丸だなっ、おとなしく縛につけ！」
背後の闇から声がはなたれた。
「見事不動丸を縛につけてみよ」
不動丸は闇へむかっていいはなった。
ビュン
六尺棒が唸りを生じてくりだされた。
不動丸は難なくかわした。
「おもんと娘もどうせ逃げきれぬ。お前一人あばれても無駄だ。手むかいするな」
その声と同時に、また六尺棒が風を切って不動丸の頭上をおそった。

不動丸はこれもかわした。
番士は町奉行所役人だが、これに伊賀者がまじっている。
「やあっ」
ふたたび気合を発して、不動丸は空へとんだ。足を半回転させ、まわし蹴りを六尺棒の男の肩へおくりこんだ。
男はあえなく六尺棒を手ばなして、つつつ……と後ろへとんで、尻から地におちた。
不動丸はその六尺棒をひろって振りまわした。ビュンビュン振りまわすと、たちまち正面の男の六尺棒がたたきおとされた。不動丸は軽々と六尺棒をあつかった。
足をすくうと、側面の敵が足をはらいおとされ、地べたにころがった。もう一人は腰をしたたかに打ちすえられ、戦闘力をうしなった。
満足なやつはあと一人しかいない。こいつが正面から闘志満々でいどんできた。死をおそれる気配がまったくない。
不動丸はおされて、二歩、三歩さがった。
が、四歩めはふみとどまった。そして敢然と反撃にでた。
ビュン　ビュン
双方の六尺棒がうなった。敵の六尺棒は生きもののように不動丸の顔面や胸、足などにおそいかかってきた。
不動丸もたじろがずに応戦した。おもんと桔梗を逃がすために、できるだけ時間をかせぐ必要もあった。不動丸はたたかいながら、おもんと桔梗の足をはかっていた。
渋谷八幡は渋谷村の産土神で、宮益坂とは反対の方角にある。昔、左馬頭源義朝に昵懇した金王丸

の旧跡である。女の足ではそこへいくのに少々時間がかかる。
不動丸は六尺棒をふるってわたり合った。
そのうちにたおれていた二人がおきあがってきて、ふたたび戦闘にくわわった。
不動丸はあらためてその二人を相手にし、またたくうちに、腰と足を打ちすえ、またしても地にたおした。
「やっ」
機をみて、六尺棒を最後の一人の顔をめがけて投げつけ、不動丸は竹矢来の穴をくぐった。
そして、まっしぐらに村道へむかってはしり、さらに宮益坂めがけて駆けた。
約束の場所と反対の方角へ駆けたのは、渋谷八幡に敵をちかづけさせぬためである。
不動丸は闇の中をまっしぐらに駆けた。一気に逃げきってしまう作戦であった。
だいぶ駆けてから、背後をうかがった。聴覚を集中して、追跡者の有無をたしかめた。
（……！）
遠くかすかに足音がきこえる。まぎれもなく、追跡者の足音だ。しかもかなりの早さで確実にせまってきた。
忍者だ。しかも最高級の技をもつ手だれだとわかる。
不動丸は逃走をつづけた。
しばらくして、ふたたび背後をうかがった。
（……？）
追跡者は一人ではなかった。追跡者の背後にもう一人いた。
（一人ならば……）

どちらか一方なら、たたかってたおす自信はあった。が、二人となるとことだ。たおすか、たおされるかの激闘になるだろう。

（金剛をつれてくればよかった）

今にして、わずかな後悔をおぼえていた。

二人の追跡者はぐんぐん距離をつめてきた。

なおしばらく逃走し、宮益坂にでる手前の角雲寺の山門の前で、不動丸は立ちどまった。

先頭の追跡者がみるみるうちにせまってきた。目をみはる脚力だ。たちまちのうちに、月光のなかにぼんやりと姿が浮かんできた。

姿が見えてくるにしたがい、不動丸のうちに慄然たるおもいがめばえてきた。

（服部半蔵！）

よもやとおもった半蔵である。伊賀組頭領がみずから竹矢来の中にいたのだ。

不動丸は決戦の体勢をとった。

服部半蔵の背後からくる敵もあなどれぬ相手だ。不動丸はここで一対二の勝負をしなければならない。

昨年秋、不動丸と半蔵は江戸城伏見櫓でたたかい、二人とも伏見濠に落下して、勝負をわけた。

「甲賀の若獅子よ、今夜が勝負だ」

半蔵は闇の中からゆっくりと姿をあらわした。

「のぞむところ、決着をつけてやる」

不動丸も闘志を見せてこたえた。そして山門を背にして、この夜はじめて忍び刀をぬいた。半蔵を相手にしてたたかうには全力をもってしなければならぬ。

半蔵も忍び刀をぬいたが、あきらかに不動丸の手足の攻撃を警戒している。不動丸がマカオで身につけた唐土の拳法のおそろしさを知っていた。

不動丸は先制攻撃をしかけたが、忍び刀は空を斬った。

再度攻撃をかけたが、これも空を切った。

不動丸は疾走してくる二人めの敵が気がかりだった。伊賀組与力鵜飼三十郎ではないかとおもった。これも容易ならぬ敵である。いずれにしろ、不動丸はかなり分のわるい勝負をしいられることになる。

半蔵も背後の人物がやや気になるようだ。背後にすくなからず注意をむけている。

とうとう二人めの敵が闇の中から姿をあらわした。

不動丸はこの敵をむかえ、構えをとりなおした。二人を同時にむかえ討つ構えをとった。

が、このとき、半蔵が不審の態度をとった。半蔵もどうしてか、二人の敵を相手にする構えをとったのである。

「半蔵、ひさ方ぶりだ。まだお前に礼をいうてなかった」

そう声を発したのは、甲賀大黒天であった。

大黒天源心は昨年、九段坂で半蔵とたたかい、片腕を切りおとされていた。その礼をいいに大黒天はここにあらわれたというべきだった。

「不動丸、お前との勝負は後まわしだ。この敵をおれにゆずれ。お前はここを去ね」

源心はおもわぬことをいいだした。

不動丸は唖然となったが、おもってもみなかった事態の急転回である。

「大黒天、恩に着る。この場をたのむ。お前との勝負はあとでかならずつける」

不動丸は九死に一生を得たおもいでいった。

「お前に恩に着られるおぼえはない。おれは半蔵とたたかうまでだ。それが大黒天のつとめであろう」

源心がいいかえした。

「たのんだ、源心」

いうなり不動丸は身をひるがえした。

と同時に、

「半蔵っ、勝負だ！」

源心の怒号が闇の中にほとばしった。源心は片腕の礼と、毘沙門天道順の復讐のために半蔵へ突進していった。

「うぬ、甲賀大黒天っ」

半蔵も源心をむかえて敢然と勝負にでた。

ここに、昨年の九段坂の決戦の再戦が開始された。

二人の勝負を尻目に、不動丸は闇の中を疾走していった。渋谷八幡へむかって駆けた。

五

前方の闇の中に、ぼんやりと鳥居が見えてきた。

参道は高い杉並木である。

不動丸は渋谷八幡の鳥居へちかづいていった。

参道の石灯籠のひとつに火が入り、それが常夜灯になっている。

表門からむこうには垣根がめぐらされ、拝殿、本社などの社殿が配置されている。

不動丸は、おもんと桔梗の姿をさがした。

なかなか二人の姿が見つからなかった。一瞬、不吉なおもいが脳裡をかすめた。

そのとき、鳥居の背後の御手洗のかげにふたつの影がうずくまっているのが、闇をとおして見えた。

凝視してみると、おもんと桔梗の姿だとわかった。

不動丸はほっと胸をなでおろして、ちかづいた。

（おもんさま）

声をかけようとして、おもわずおもいとどまった。

頭上の杉の梢で風が鳴った。その音に不動丸は耳をかたむけた。

ほかの枝や葉はうごいていない。

（妙だ……？）

とおもったとき、ふたたび梢の揺れる音がした。そして黒い大きな影が頭上から落下してきた。

「待っていた。甲賀不動丸っ」

頭上から声が湧いたと同時に、太刀風が鳴った。黒い影は忍び刀をおもいきり振りおろしてきた。

（鵜飼三十郎だ！）

と不動丸は察した。半蔵の腹心である三十郎は不動丸を追ってきたのではなく、おもんと桔梗の後をつけ、不動丸がここにくるのを杉の梢にひそんで待っていたのだ。

「伊賀の与力めっ、よけいな邪魔だてをするな！」

怒りを発して、不動丸は高くとんだ。空中にとんだまま不動丸はおりてこなかった。梢にぶらさがり、数瞬、三十郎を幻惑させた。

眼下に三十郎のうろたえた姿が見えた。
「やあっ」
気合を発して今度は不動丸が三十郎の頭上にとびおりた。
すさまじい太刀風とともに三十郎の忍び刀が一閃し、落下してきた不動丸の胴体を見事に斬りはらった。胴体は真っ二つにはなれた。とおもったのは、三十郎の瞬間の錯覚であった。
三十郎が斬りはらったのは不動丸が投げおとした杉の梢である。
一瞬おくれて、本物の不動丸が空中で一回転しながら落下してきた。不動丸の右足は一度ちぢんでから、空中で見事な半円をえがきつつ強烈な蹴りを三十郎の顔面へはなった。この一撃で三十郎の体がとんだ。毬(まり)のように跳ねて石灯籠の足もとに激突した。
三十郎の体はそのままうごかなくなった。
不動丸は三十郎にちかづいた。足蹴りの感触から三十郎の首の骨を折ったと確信していた。
すでに虫の息のはずである。もう生きながらえることは不可能だ。
不動丸はそばへ寄った。
「介錯は？」
ときいた。
三十郎はうすく目をひらいて不動丸を見た。
「おれの負けだ。忍者(しのび)に介錯は無用じゃ……。忍者にも死はある。おぬしもいつか、こうした最期(さいご)をむかえよう」
三十郎はそういった。そしてやがて、こと切れた。
不動丸は三十郎の遺骸にたいして合掌し、おもんと桔梗の前へあゆみ寄った。

おもんと桔梗は、目の前でおこなわれた忍者と忍者の激突を一部始終見まもっていた。
「伊賀の忍者が一人死んだ。替りはいくらでもいる。甲賀と伊賀のたたかいはまだまだつづく」
不動丸はそういって、おもんと桔梗をうながした。
無言で二人は不動丸にしたがった。
「安全なところへ、うつっていただこう」
不動丸はあるきだした。
月光がしずかにまたたいている。紀州家中屋敷のある紀尾井坂へむかって、三つの影は去っていった。

疾風紀尾井坂

一

おもんはこころよい眠りをむさぼっている。

渋谷村にある自分の家から紀州大納言家の中屋敷にうつった当座は、しばらくねむれぬ夜がつづいたが、春爛漫の今の時期はいたって寝つきもいい。

自分の家にいても、曲者の侵入や、幕吏の監視をうけていたころにくらべると、ここは仮寝とはいえ、一応身の安全は保障されている。桔梗とともに紀州家に身をあずけたので、娘の身の危険を心配する必要もなくなった。

おもんが騒動にまきこまれるのは、甲賀毘沙門天道順の女房であったせいであるから仕方がないとしても、娘がたえず危険にさらされているのは理不尽であった。大名屋敷のなかの生活は気づまりであるが、身の安全がたもたれているだけでも我慢のし甲斐があった。

しかも紀州家中屋敷には、かつて道順がつかえた駿河大納言忠長の遺児国松がかくまわれている。

おもんは国松の無事な姿を目にするだけでもこころがなごんだ。

この屋敷はおもんにとっての別天地であった。

おもんはここちよい夢路をたどった。

今はまさに、春眠暁をおぼえずの季節である。まして、暁も前の五更（戊夜）に入ってまもない時刻だ。

そのとき、おもんは夢のなかでかすかな物音をきいた。渋谷村の家で危険にさらされているころだったら、そんなちいさな音でも目をさましたであろうが、今では気にもならなかった。

しばらくして、また音がした。

今度はだいぶちかくできこえた。となりの部屋で寝ている桔梗が手洗いにたったのかもしれないとおもった。

おもんはすぐにわすれて、ふたたび熟睡にもどりかけた。そのとき、またしても気になる音がした。

今度は桔梗が手洗いからもどってきたのかもしれないが、ふと妙な予感がかすめ、夢とうつつとのあいだで立ちどまった。

（……？）

音のきこえてきた方角が気になった。天井のほうからきこえてきたような気がした。厠の方角とは全然ちがう。

おもんは夢とうつつの境をまださまよいながら、耳をこらした。

（なんだろう？）

紀州家の中であるから身の危険はおぼえなかったが、物音の正体が気になった。

だが、耳をこらしているうちに、おもんはいつしかまた眠りの世界へもどってしまった。その後物

音がたえたからだ。そしてやすらかな眠りをつづけた。
おもんが重くるしさをおぼえたのは、それからしばらくたってからである。自分になにかがのしかかってくるような息ぐるしさを感じた。
おもんは目ざめた。そのとき自分の顔に息がかかった。
（おや……）
とおもった瞬間、自分がとんでもない状態にあることを直感した。自分の足が左右にひらいていることがわかった。こんなひどい寝相をするはずのないことは、おもんがいちばんよく知っている。
はっとして、身をこわばらせた。そのとき、自分の腹の上に男がのしかかっているのがわかった。おもいもかけぬことがおこっていた。
おもんは全身ではねのけようとしたが、相手はびくともしなかった。おもんは完全に組み敷かれ、その上足を無残な形にひきさかれていた。
（いやっ）
と発した声は、男の手で口を封じられてでなかった。
おもんの油断といえばいえるかもしれないが、紀州家の屋敷内でこんなことがおこるとは夢にもかんがえていなかった。
おもんはもう一度全身の力ではねのけようともがいたが、相手の重さがさらにくわわって身うごきがとれなかった。
男の腰はすっぽりとおもんの両足のあいだにうずまっている。
その腰がわずかに浮いて、おもんの股間とのあいだにすこしの隙間をつくった。その隙間に男の手がすばやく入りこんできた。

おもんは腰にまいた薄物をはぎとられた。
男の手が股間をまさぐった。
おもんは懸命に身をよじらせようともがいたが、駄目だった。股間をまさぐられつづけた。
男はこういうことに慣れているようだ。手順にもうごきにも無駄がなかった。やすやすとおもんを意のままにしていった。
（たすけてえ！）
悲鳴をあげようとしたが、これも口をふさがれた。
「おとなしくすれば、隣室に寝ている娘は見のがそう」
男がはじめて声をだした。
この言葉でおもんの抵抗はやんだ。おもんは自分の体で娘をまもろうとおもった。
はかない親ごころにつけこんで男はぐいとおのれを突きたてた。
おもんはわずかに背をそらせ、男をうけ入れた。
おもんは自分の腹の上ににくい男をのせて、
（この男は何者だろう……）
とかんがえた。
天井から侵入してきたのだから、まともな男とはおもえなかった。忍者かもしれぬ。しかし、紀州家に巣食う忍者に体をねらわれるとは今まで想像もしなかった。
男は腹の上でしきりにうごいている。
おもんが男に体をうばわれたのは、大黒天源心につづいて二人めである。油断があったとはいえ、体を蹂躙されるのはくやしい。相手の男根を切りとってやりたいくらいの憎悪が駆けめぐった。

男は一度だけでは、おもんを解放しなかった。一度はててから、おもんの体内で回復を待った。待っているあいだ、男はおもんの夜着の衿をひろげ、乳房をひきだし、もてあそんだ。揉んだり、なめたり、吸いまわしたり、好き勝手のし放題だ。

おもんはすべてがおわるのをじっと待つしかなかった。

二度めをおわったとき、

「馳走にあずかった。約束どおり、娘は見のがしてやろう」

そういって悠々と身づくろいをし、侵入口とおぼしき天井裏へもどっていった。

おもんはその後しばらく身じろぎもしなかった。悪夢を見たというほかはない。妖魔はとつぜんきて、狼藉をつくして去っていった。

有明行灯をともしていなかったので、妖魔の正体は全然わからなかった。正体をとく手がかりもない。

おもんは呆然としていた。男が隣室をおそわなかったのだけが、不幸中の幸だった。

二

夕暮れのちかい七つ（申の刻）がすぎると、江戸市街は芝を中心にして拍子木をうちならす音と念仏をとなえる声が充満する。

墨染に袈裟をかけ、饅頭笠をふかくかぶった威勢のいい坊主たちが、十人から二十人くらいの一団をくんで、拍子木をうち、念仏をとなえながら早足で托鉢にまわるのである。

七つ（夕方四時）に芝増上寺をでて、江戸を托鉢し、六つ（暮れ六時）にはもどってくるので、七つ坊主の呼び名がある。増上寺は徳川家の菩提寺であり、将軍の祈願所であるから、たいへんな格式と権威をもっていた。千人もいるという増上寺の修行僧はしたがって血気さかんで、大名の供先や、武家屋敷の侍たちと悶着をおこすことも稀ではなかった。

弥生（三月）の空は行く春を惜しんで、いつまでも暮れなずんでいる。春日遅々として、いっこうに日は暮れぬ。

暮春の巷に拍子木の音がきこえる。

眺望のきく喰違御門にあらわれた七つ坊主の一団は駆けぬけるように紀尾井坂をくだり、ひとつまがって諏訪坂、紀州家の中屋敷にちかづいた。十数人の一団である。

紀尾井坂はいうまでもなく、紀州、尾張、井伊の中屋敷があつまるところである。七つ坊主の一団は紀州家の門前にいたって立ちどまり、朗々と経文をとなえだした。

ひととおり経文がおわると、屋敷の中から用人とおぼしき武士がでてきた。

「ささ、玄関までおとおりください」

用人風の武士は坊主たちを門内にまねき入れた。

七つ坊主は争論になったりするとなにかとうるさいので、諸大名の屋敷などでは托鉢にまわってこられると丁重に遇すのが例である。米や金の喜捨をおこたりなくほどこす。

七つ坊主たちは紀州家の玄関の前に立ち、ふたたび経文をとなえた。

「毎夕の托鉢、ご苦労に存じあげる。これを」

紀州家の用人田辺喜左衛門は用意してきた喜捨を坊主へわたした。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

念仏をとなえつつ、先頭の坊主は喜捨をおさめた。

その坊主は中肉中背ながらも、背筋をぴんとのばし、挙措物腰におちついた風格が感じられた。骨柄にもおもおもしいものがある。

「さてご用人。大納言様にお目にかかりたいので、案内をたのむ」

坊主がとつぜん田辺にむかっていった。

田辺の顔がおどろきにいろどられた。いかに七つ坊主の見識がたかいとはいえ、御三家の玄関先でいきなりいう言葉にしては常軌を逸している。

田辺が返事に困惑しているのを見て、その坊主は饅頭笠をはずしだした。

「あ……」

田辺が声を発した。

笠の下からでてきたのは坊主頭ではなかった。黒々とした総髪を笠の中に巻きこんでいたのである。眉目秀麗、色白ながらも、眦と鼻梁、口元におかしがたい品格と自負、気魄をひめた容貌が薄暮のなかに浮かびあがった。

田辺の知らぬ顔ではなかった。

「これはしたり、失礼申しあげました由井先生」

大納言頼宣の軍学の師、由井張孔堂正雪であった。

由井正雪は牛込榎町に楠流の軍学道場をもち、大勢の門人を擁して盛名をほこっている人物である。頼宣のほかにも板倉重宗などの大名が門人におり、旗本や大名家来などにも大勢の門人を擁している。

幕府ではこの人物にうたがいをいだき、しきりに動静をさぐっていた。正雪が七つ坊主に変装して紀州家をおとずれたのはそのためである。

一方、頼宣もかつての駿河大納言忠長とのあいだに交誼があったのをうたがわれ、幕府に謀叛の疑惑をもたれていた。

「主人頼宣、ただ今、当屋敷にまいっております。さっそくご案内申しあげます」

田辺は恐縮して、正雪を玄関の内にまねいた。

紀州家にかぎらず、御三家の上屋敷は江戸城の中にあり、頼宣は公務のときはそこにいるが、それ以外は中屋敷でくつろいでいることがおおい。

正雪とともに七つ坊主の扮装で托鉢にきた者は門人たちである。門人たちは中屋敷の供の詰所に案内された。

正雪一人、田辺の案内でみちびかれたのは、客室ではなく、講学の間であった。

かつて正雪はしばしばここにまねかれ、頼宣に軍学を講じていたが、正雪ばかりでなく頼宣まで幕府にうたがわれるようになっていらい、正雪の訪問はやんでいた。ひさしぶりのおとずれであった。

間もなく、頼宣が小姓一人だけつれて姿を見せた。

「久方ぶりに尊顔を拝し、なつかしき次第にございます」

まず師の正雪が丁重な挨拶をした。

「そちも元気な様子でなによりし」

弟子の頼宣が大様にうけた。学問の最中はこの立場が逆転する。

「日々、世の中が住みにくくなってまいりました。大納言様をおとずれるにも、かような七つ坊主の姿で世間の目をあざむかなければなりませぬ」

正雪が苦笑していうと、

「坊主姿もなかなか似合うではないか。いっそのこと総髪をきってしまえば、世間も公儀もそちへの

疑いをとくであろう」

頼宣も苦笑でこたえた。

「きっと、その程度のことでは公儀は疑いをといてはくれますまい。わが道場のちかくには、いつも正体の不たしかな目明しのような者がうろついておりますよ」

正雪はややきびしい表情を見せた。

頼宣三十九歳、正雪三十六歳。男ざかりにさしかかった両人はいずれも人生の危機に見舞われている。しかし両人がそれにめげていないのは、頼宣と正雪の顔と体に張りとかがやきが見えることにあらわれている。

「先生は将来のある大切なお体です。熟慮遠謀、くれぐれも慎重に身を処していただきたい」

頼宣が、そちから先生へ言葉をかえて正雪へいった。

「熟慮遠謀はそもそも軍学、兵法の根幹です。けれどもいたずらに熟慮遠謀していては、時機を逸するおそれがあります。時機いたるまではひたすら熟慮をつくし、いったん時機到来いたせば一気果敢に打ってでる決断が肝要かと存じます。過去、名将、英雄と呼ばれました武将が最後に名をとげられなかった例は、ほとんど熟慮遠謀のあまり時機を逸したことにつきるのであります。ちかくは、関ケ原合戦における上杉景勝、直江兼続、毛利輝元などがそれにあたるでございましょう」

正雪はにわかに舌鋒のするどさの片鱗を見せていった。

「本日、先生がわが屋敷を来訪された意中が読みとれた」

「左様でございますか。この数年をふりかえりましても幕府では大老、老中、若年寄の役職をさだめ、寺社奉行、評定所をおき、諸大名の参勤交替の制度をととのえ、さらに鎖国を完成させるなど、政治の礎を着々とつくりあげてまいりました。さらに大納言忠長さまをはじめ、加藤忠広どのなど将軍家と縁つづきの大名をつぶすなどして、幕府独自の力をつよめております。これ以上あまりに年月がたちますれば、世をくつがえし、制度をあらためる機会はなくなってまいりましょう」

正雪は頼宣がおどろく直截な言葉で現状の批判をのべた。このところ正雪は幕府にうたがわれぬようつとめて慎重な生活をおくっているために、かえって今その鬱積がはじけたのかもしれなかった。

「先生のおっしゃるとおりでござろう。将軍は若さゆえに自信が先ばしられておられる。大御所ご在世の折はさほどでもござらなかったが、今やおもいのままの増上慢ぶり。大炊頭、伊豆守など一部の者とむすんで、やりたい放題の行状じゃ。大御所さまもしご在世であったなら、駿河大納言どのが自裁いたすような悲劇はおこらなかったであろう」

頼宣は大老土井利勝、老中松平信綱などの当局者をふくめて、将軍家光を批判した。これはこの十年来、頼宣のなかにたまっていたものであろう。

正雪は頼宣がもっといいつづけるのを待った。頼宣は家康が愛してやまなかった暴れ馬である。家康に愛されすぎたために奔放さがいささか兄の将軍秀忠をこまらせたこともあった。しかしその秀忠が八年まえに歿してから、頼宣がこの世に息ぐるしさをおぼえているのは事実であった。兄と弟との間柄ではうまくいったことも、叔父と甥とのあいだとなるとままならなくなったことが多すぎた。頼宣は少々世の中に嫌気がさしていた。

だが、頼宣が言葉を切ったために正雪がいわなければならなくなった。

「今後、ご連枝もふくめて諸大名で改易される者はつづきましょう。御三家といえども、ゆめご油断はなりませぬ。強力な連枝は、創業のときはたのもしがられますが、泰平の世にあってはかえってわずらわしがられるものでございましょう」

人のいないところとはいえ、よくここまでいったものである。

豪胆をもって知られる頼宣の表情が一瞬こわばった。正雪の言葉は頼宣の心中をよくいいあてていたからだ。

忠長の例ばかりでなく、松平忠輝、同忠直など家康の息子や孫であっても、過去に峻烈な処分をうけた例はいくつもある。

「御三家はおそれおおくも東照公さまがおたてになった家筋である。将軍を輔佐し、将軍家に嗣子なき場合は御三家からつぎの将軍をだす家筋である。しかれといえども、将軍にとっては目の上のたん瘤というべきものであろう。まして将軍と御三家との年齢がちかい。これもよいことではあるまい」

「それにも増して、将軍は度量のひろいお方ではありますまい。幼少のころ自分をしのいだ弟を自裁に追いこんだお方です。叔父君とのあいだが円満なあいだはよろしいが、もしあつれきが生じた場合は……」

正雪がつづけた言葉はふだん頼宣の胸中にあるものばかりだ。正雪は頼宣とおなじことをかんがえていた。

「いわぬが花、沈黙は金。口は災いのもとじゃ。正雪、言葉がおおすぎるぞ」

頼宣は正雪を制した。このような言葉がもし幕府にきこえた場合、正雪の身ばかりでなく、紀州家の立場もあやうくなりかねない。

「本日はそこのところを少々申しあげにまいりましたが」

正雪は覚悟しておとずれたとみえ、少々のことではひかなかった。

「正雪の申すことはよくわかっておる。その方の心配はわしの心配じゃ。しかし急いてはことを仕損じる。まだ熟慮が必要だ。準備もたりぬ」

頼宣がそういったとき、正雪がきっと天井の一角を見あげた。

ほぼ同時に頼宣もおなじところをにらんだ。

二人が耳にしたのは、音とはいえないほどのものだった。しかし人間がそこにひそむ気配を感じた。

二人が聴かれた事柄は重大であった。

頼宣は音もなく鴨居の下へはしった。鴨居に頼宣愛用の槍〈流星号〉がおかれている。

頼宣は流星号を手にするよりもはやく、天井の一角めがけて突きあげた。

ほとんど同時に、脱兎のごとく人間が天井を駆ける音がした。

「曲者じゃ、出合え！」

頼宣は屋敷中にひびきわたる声でさけんだ。

さけぶと同時に頼宣は曲者を追い、廊下の天井をおもいきり流星号でつらぬいた。

わずかな手ごたえがあった。曲者の体のどこかを槍の穂先がかすめたようだ。

曲者はそのまま屋敷の天井裏をはしりぬけた。

「みなの者、出合え！」

頼宣がふたたびさけんだとき、庭の植込のあいだを疾風のように翔んでいく人影が見えた。

その人影は天井裏の曲者の逃げ道を読んで、先廻りするように中玄関のほうへむかって矢のようにはしった。

甲賀大黒天、源心である。

三

室生の鳶は、鳥のように天井裏をはしった。

頼宣の槍で左足の裏を突きとおされたが、痛みをおぼえる余裕もなかった。ともかく、この屋敷から脱出しなければならぬ。

鳶は服部半蔵輩下の伊賀組同心である。その名のごとく、跳躍や脚力にかけては伊賀組屈指の達人である。

鳶が紀州家中屋敷に潜入したのは、今年の正月早々からだ。およそ二カ月半も誰にもさとられることなく、屋敷にひそんでいた。そして、駿河大納言忠長のわすれ形見国松が屋敷の奥ふかくかくまわれているというおどろくべき発見をした。その上今日、はからずも由井正雪のおとずれによって、頼宣の胸中の秘密の一端を耳にした。頼宣と正雪の真実の言葉がきけたのは千載一遇の果報であった。あまりの果報を手に入れたがために、鳶ほどの達人が気配を下にさとられてしまったのだ。

鳶は天井裏を夢中で駆けた。二カ月半もすごしたところであるから、鳶は屋敷の天井裏を知りつくしていた。足に傷を負っても十分に脱出できる成算があった。

ところが、不運がもうひとつかさなった。この屋敷に腕のすぐれた甲賀者がやとわれていることは潜伏中に発見していたことだが、その甲賀者に大事なところで追跡される羽目になった。

鳶の胸中には功名心が渦まいている。この屋敷でつかんだ秘密は大変な功名にあたいする。それを持ってなんとか屋敷を脱出し、服部半蔵のもとへかえりつきたかった。

鳶は足の痛みをわすれて駆けた。天井の梁をくぐり、棟をこえ、桁の下をぬけて中玄関めざして駆けた。

中屋敷御殿の出入口は玄関と中玄関、勝手口の三カ所である。

中玄関の上まできた。その天井裏から中玄関の土間へとびおりた。まわりに人影はいない。

(たすかった!)

ここまでくれば、逃げおおせる自信があった。

鳶は土間から外へとびだした。あとは通用門ちかくの塀から脱出するだけである。甲賀者を完全にふり切ったとおもった。

が、外へでたとたんに、鳶の視界の一角をひとつの影がよぎった。

(しまった……)

甲賀者が先廻りをしていたのだ。よほどの達人でなければかなわぬはなれ業である。

鳶の足がわずかにちぢんだ。鳶のずばぬけた脚力は技や力ばかりでなく、気魄にささえられている。精神力が微妙な影響をもたらすのだ。

鳶は屋敷塀への最短距離を目測した。

屋敷の中では、ようやく家臣たちのさわぎたつ気配がしていた。

鳶は猛然と塀にむかって疾走した。脇目もふらずに駆けた。

なんとか塀のちかくまで到達した。塀をこえる自信はあった。

が、一瞬はやく黒い影が塀の下に到達していた。くだんの甲賀者だ。

甲賀大黒天、甲賀不動丸、寿の三郎、七面の鶴、金剛……などの甲賀の強者の名を知っている。そのうち七面の鶴は死んだ。のこりのうちの一人だろうと鳶は推測した。

かまわずに鳶ははずみをつけて空中で一回転し、両足で地を蹴り、高々と跳躍した。塀をこえて、屋敷の外へ着地した。

けれどもほとんど同時に、いや一瞬鳶よりもはやく、鞠のように体をはずませて空中を飛び、屋敷の内から外へでた影があった。

鳶のひとつひとつ先手をいく者である。鳶はこのときはじめて死の恐怖をおぼえた。なんとか紀州

家を脱出することはできた。しかしこの危機を脱することはできないのではないかと不安の翳がさした。

猛然と黒い影が突進してきた。

春の日もようやく暮れて、濃い夕闇があたりをおおっている。

鳶は後方へ身を転じて、からくも甲賀者の攻撃をさけた。

甲賀者は右方へそれたが、ただちに転回し、忍び刀をかざして猛進してきた。今度は鳶の位置をよく見さだめている。どちらへ避けても、甲賀者は追いすがって逃がさぬ用意をしていた。

一陣の風とともに甲賀者がせまった。闘志と殺意にたぎりたつ顔が見えた。鳶を逃がせば重大な秘密がもれるのであるから、ころすことだけをかんがえている顔だ。

忍び刀がすさまじい太刀風をおこした。

その瞬前、鳶は鳥が舞いたつようにふわっと空へとんだ。

忍び刀は鳶の足の下を一閃した。

一度はかわしたが、鳶が舞いおりるところを忍び刀はねらっている。

鳶は空中で背をくるっとそらし、一回転して三間ほど先にとびおりた。

甲賀者は鳶の技に一瞬おどろきの色を見せた。

鳶は着地するやいなや、一気に坂道を疾走した。脚力にものをいわせて、逃げきる自信があった。

坂はくだり坂。諏訪坂をまっしぐらに駆けた。坂をくだりきれば、半蔵屋敷がちかい。

しかし鳶は途中で、誤算に気づいた。甲賀者は執拗に追走してきた。逃げきるつもりが、距離はやちぢまってきた。足の怪我を計算に入れていなかった誤算である。

このままはしりつづけていたら、追いつかれてしまう。策戦を変更しなければならなかった。

坂の途中に佇立している銀杏の木の背後にとっさにかくれ、追ってくる甲賀者めがけて手裏剣を投じた。

甲賀者は身をよけるとおもったが、よけなかった。手裏剣は甲賀者の顔へ吸いこまれていった。と見えた瞬前、甲賀者は左腕で顔をふせいだ。手裏剣は甲賀者の腕につきささった。

つづいて鳶は第二の手裏剣をはなった。これは甲賀者の胸をねらった。

ねらいはあやまたなかったが、これも甲賀者は左腕でうけた。

第三、第四の手裏剣をつづけざまに鳶ははなった。

腹部と股間をねらったこの手裏剣をも、甲賀者はつぎつぎに自分の腕でうけとめた。

鳶のほうが唖然となった。投じた手裏剣はことごとく腕で吸いとられた。忍者といえども、腕は生身だ。四本も手裏剣をうければ、腕はつかいものにならなくなる。

だが、甲賀者は平然としている。この後何本手裏剣を投じても、ことごとく自分の腕でうけるつもりなのだ。鳶のほうが気味わるくなった。

その一瞬の逡巡をついて、甲賀者が反撃に転じてきた。おのれの左腕から手裏剣をぬいて、それを投じた。

手裏剣は鳶の胸にむかってとんできた。鳶の脳裡に一瞬、左腕で手裏剣をふせいだ甲賀者の姿が浮かんだ。

無意識のうちに鳶の左腕がうごいた。手裏剣を自分の左腕でうけたのだ。

衝撃で鳶の体はぐらっとかたむいた。激痛が全身をかけめぐった。どうして自分がこの挙にでたのかわからなかった。

つづいて第二の手裏剣が飛来した。

これも鳶は左腕をさしだしてうけた。より大きな衝撃をうけて、鳶はあやうく転倒しそうになった。前回をしのぐ激痛が全身を荒れくるった。

あまりの痛みにくらくらとし、意識が遠のきかけた。

予期したとおり、第三の手裏剣が鳶の顔にむかってとんできた。

こうなったら、おなじ方法で防禦するしかなかった。ほとんど無意識に鳶は左腕で顔をふせいだ。

が、ふせいだとおもったのは、鳶の意識のなかだけである。左腕は重さと激痛のために顔まであがらなかった。

手裏剣はまともに鳶の眉間に命中した。鳶の体は数間うしろへとび、仰むけにたおれた。

鳶は懸命におきあがろうとした。彼は不思議でならなかった。甲賀者にできたことが自分にできぬわけはないとおもった。

鳶はよろよろと体をもたげた。

甲賀者がちかづいてくるのが見えた。

そのとき、甲賀者が異様な行動をとった。甲賀者が自分の左腕を肘(ひじ)の根元からはずしたのだ。

朦朧(もうろう)とした意識で鳶は目をみはった。甲賀者の左腕は義手であったのだ。

甲賀者は義手につきたっている最後の手裏剣をぬきとった。

手裏剣は鳶の胸にむかってとんできた。

鳶はそれを避けて、高く空中へとんだつもりだった。体はまったくうごかず、手裏剣はふかぶかと鳶の胸をつらぬいた。

鳶の体がふたたび横転した。

甲賀大黒天源心は鳶の絶命を確認してから、ゆっくりと義手を左の肘にとりつけた。

四

源心の脳裡に白い裸身がちらついている。

源心は欲望をおさえかねていた。欲望の対象にまたおもんをえらんだのである。

桔梗のまだ青い果実にも欲求はあるが、どちらかとなると、女ざかりの熟れきったおもんがしたたかな手ごたえがあっていい。おもんがかつての毘沙門天、道順の女房であったことも源心の欲望をつのらせる原因のひとつである。

源心の腹の下で、おもんはかつて二度ももだえた。こばみとおした末にわれをわすれてもだえたのだから、二度とも源心は感動をおぼえた。それをわすれかねていた。後に尾をひく感動であった。

紀州家中屋敷にしのびこんでいた伊賀者を諏訪坂でしとめた数日後。源心はまたよからぬ欲望をかきたて、天井裏を這いだした。

おもんは今回もこばむだろうが、結局源心のおもいのままになるだろうという予感があった。

天井裏と床下は源心の支配する世界である。源心はおもんの居間へむかって天井裏をすすんだ。

前回、おもんをわがものとしたとき、源心は声色(こわいろ)をつかっていたので、源心であることをさとらなかったかもしれぬ。しかしおもんはしまいにはわれをわすれて声をもらし、秘密の快楽におぼれた。

今回は欲望のためばかりでなく、源心にほかの目的があった。甲賀毘沙門天の位につかせてほしいともとめるつもりだった。まだ道順の敵(かたき)の半蔵を討ってはいないが、おもんの承諾があれば、毘沙門天の位につけぬではなかった。それにはいちばんの近道がおもんを女房にしてしまうことである。

おもんの体を征服し、おもんを自分にひざまずかせることを源心はこの夜意図していた。

これで三度めであるから、おもんの体をひらかせる自信はあった。いやいやをするだろうが、結局源心に征服されるだろう。そして自分の女房になることを承諾させようとおもった。

源心に反対する甲賀者はいるだろうが、おもんさえ手に入れてしまえば、不動丸や金剛がなにをいおうと、こちらの勝ちだ。源心の胸にはすでに成算があった。この前の手柄で、紀州頼宣を完全に味方につけたと信じていた。

耳を天井板につけて気配をうかがうと、おもんの部屋から寝息がきこえてきた。規則ただしいやすらかな寝息である。

源心は天井裏の一角へすすんだ。その一角はかねて、天井板をはずせるように切ってあるのだ。天井板をはずし、音もなく下へおりた。そこはおもんの部屋の押入である。

源心は押入の中でしばらく様子をうかがった。

相かわらずやすらかな寝息がきこえてきた。寝息をききながら、前回のおもんの体の反応ぶりをおもいかえした。脳裡というよりも、くらい目前におもんの肉体がちらついた。

欲情がおこり、はやくも源心の体の一部が変徴をきたした。

しずかに襖をひらいた。

部屋の中はくらい。前回同様、有明行灯もともっていない。しかし源心は部屋のなかを知りぬいている。くらくても不自由はなかった。

そろり、そろりと寝床にちかづいた。

闇のなかに豊潤な女の体がにおう。えもいわれぬ香りだ。みずみずしいおもんの体から発してふんわりと闇のなかにただよっている。

源心はにおいをいっぱいに吸いこんだ。そのにおいは前回、前々回のおもんの体の肌ざわりをおもいださせずにはおかない。脳裡のなかにおもんのさまざまな姿態が浮かびあがってきた。

闇の中でふたたび源心は欲情した。おもんを三たびわがものにすることができると確信していた。今度はおもんがどんなみだれようを見せるか、それがたのしみだった。

夜具の足もとのほうからおもんにせまった。

夜目がきくので、夜具のなかに寝ているおもんの姿もおぼろに見てとれる。

(おもん、また馳走になりにまいった)

源心はこころのなかでつぶやいた。

おもんは顔を横にかたむけて、よく寝入っている。

源心は夜這いのたのしみを満喫していた。

夜具の裾をつかんでめくっていった。

寝相よく足をのばしたおもんの腰から下があらわれた。

生唾をのみこみ、おもんの寝相に見入った。

一気に股間をひらいてやるか、それともおおいかぶさっていくか、どちらにしようかと一瞬逡巡した。源心は手をのばし、おもんの足をひらいていった。

異常がおこったのは、その直後であった。

おもんの足がひらくと同時に、両足がすっと伸びてきた。そして両足が源心の首に巻きついた。というよりも、足で首をはさんだのである。

「これ、おもん、なにをする」

おもんは目ざめていたのである。源心はおもわず声をもらした。

が、つぎの瞬間、源心は首をしめつけられて、息ぐるしくなった。それはおもいも寄らぬ、つよい

力であった。源心がおぼえているしなやかで、ふくよかなおもんの足ではなかった。
源心は闇のなかで肝をつぶし、蒼ざめた。源心をしめつけている足は力づよい男の足だった。
「はかったな！」
声をあげ、源心ははねおきようとした。
だが、身うごきがとれなかった。男の足はぐいぐいと今まで以上の力で首をしめてきた。源心は息ができないくらいくるしくなった。
両手を相手の足にかけて、必死にはずそうとこころみたが、無理だった。
息ぐるしさは増すばかりだ。闇のなかで光がはじけ、星がいくつも明滅した。
（何者……、何やつ……？）
源心は懸命にこらえながら、相手の正体をかんがえた。
「源心、お前の邪心、邪念をこらしめてやるぞ」
そのとき枕元から声がした。源心の知る声だった。
げっとなって、源心は満身の力をこめ、一気にはねおきた。なんと、不動丸がおもんに化けて寝ていたのだ。
源心は一気呵成（かせい）に反撃にでた。不動丸がおきあがってくるところへ、おもいきり拳（こぶし）をはなった。
不動丸の体が一間ほどとんだ。不動丸はすぐに体勢をたてなおした。
しかし不動丸の出ばなをくじくようにもう一度、源心は体重をのせた拳をとばした。あいにく、武器らしいものを身につけていなかったのだ。
不動丸の体はもう一度とんだ。部屋の隅までとんで、柱のところで不動丸はおきなおった。
間髪を入れず、源心の体がとんできた。源心はここで勝負にでた。唸りを生じた拳がまたもおそっ

てきた。
一度それが空を切った。
再度、源心の拳が不動丸の顔面めがけてきた。
不動丸はすっと手をのばして源心の手首をつかんだ。そして手首をかえすと、
「うっ、ううう……」
源心が苦痛の呻きをもらしはじめた。中国からマカオに渡来した拳法の関節技である。
不動丸はぐいぐいと力を入れた。
源心の苦痛は倍加していった。
これ以上力をくわえると、腕は完全に折れてしまう。が、源心はなおも耐えた。
不動丸はさらに力をこめた。
源心は降参をしない。必死で耐えつづけた。
ぐしゃっ
と骨がくずれるいやな音がした。骨折とはちがう感触だ。
手の内が急にかるくなると同時に、源心の左腕がもぎとれて不動丸の手のなかにのこった。
「やったなっ、不動丸……」
恨みをこめた源心の声がきこえた。源心にとって自分の義手をうばわれたことは、武士の刀をうばわれた以上の屈辱であった。
「大黒天よ、お前は甲賀者の面よごしだ」
不動丸は叱咤した。
「たわけっ、おもんはすでにおれの女も同然だ。お前なぞはすっこんでおれ」

源心は愚弄の言葉をなげてよこした。
「卑怯卑劣な男だ。お前、毘沙門天の位がのぞみのようだが、それはおれがゆるさぬ」
「お前がさだめることではなかろう。いらざる差し出口だ」
源心の言葉がおわると同時に、今度は不動丸の足がとんだ。
かわす暇はまったくなかった。不動丸の足は源心の顳顬にするどくつきささった。
源心の体は障子戸をやぶって、廊下にとびだした。
「去ね、大黒天！　この屋敷に二人の甲賀者は無用だ。負けた者がでていく運命だ」
不動丸は源心にむかって吐き捨てた。
「おぼえておけよ、不動丸」
源心の無念の言葉がかえってきた。
「わすれ物だ、大黒天。きたない腕を持ちかえれ」
不動丸はそういって、義手を廊下に投げだした。
源心はそれをひろって、あっという間に姿を消した。

五

降りつづいていた五月雨があがって、一時のあいだ晴れ間がでた。
不動丸は、おもんと桔梗を頼宣にあずけていらいずっと紀州家の中屋敷に棲みついていた。そして、先月大黒天を中屋敷から追いだすことに成功した。
夕方になって、また五月雨が降りはじめた。

このところ、ずっと鬱然とした空がつづいている。
不動丸はくらい空を見あげて、屋外へでた。
中屋敷の勝手口にちかいところだ。米蔵や薪炭蔵がならび、そのむこうに灰色の屋敷塀が見える。
そのとき、とつぜん、屋敷塀の上に人間の頭があらわれた。
と見る間にほぼ全身があらわれ、巨大な鳥のように塀にとまって、弓に矢をつがえた。
不動丸はとっさに身を転じ、木の幹の背後にかくれた。
ヒョー
弓弦の音とともに矢が飛来し、木の根元につき刺さった。
不動丸はつづく第二矢にそなえたが、曲者はそれだけで塀をとびおり、逃げだした。
不動丸は曲者を追わなかった。曲者の目的は不動丸の射殺にあるのではなかったからだ。
根元につき刺さった矢には手紙がむすびつけてあった。
不動丸は手紙をとき、ひらいていった。

端午　酉上刻　牛頭天王境内に待つ
不動丸殿　　はん蔵

文字を一読し、不動丸はかすかな緊張感をおぼえていった。手紙は服部半蔵からのものであり、決闘状である。
不動丸はもう一度読んだ。
端午五月五日の酉の上刻、牛頭天王境内でたたかおうという手紙である。

半蔵とは昨年秋、江戸城伏見櫓ではじめて相見えてたたかったが、勝負はつかなかった。ついで今年正月、渋谷村で勝負になりかけたが、このときは大黒天があいだに入った。今度が三度めの勝負となる。

もとより勝負はのぞむところだ。今度こそきっちり勝負をつけてやろうとおもった。

端午といえば明日、男子の節句当日である。

不動丸は自分の塒にもどって、明日を待った。策戦、戦法をいささか胸にいだいて思案をこらした。ともかく相手が伊賀者の総帥服部半蔵であるから、小細工はつうじまい。小細工はかえって自分の墓穴を掘る。堂々とたたかうしかなかった。

五月雨は夜どおし降りつづいた。地上いたるところ蒸しむしとした湿気だ。体もこころもカビくさくなっている。そのカビをとりはらうには半蔵とのたたかいはもってこいのものである。

夜があけると、めずらしく雨があがっていた。端午の節句をいわって、梅雨の一日、からりと空は晴れあがった。

この朝、諸大名は総登城である。

巳の刻、江戸城でうつ太鼓のひびきが中屋敷にもきこえた。諸大名は帷子の礼服で登城し、それぞれ粽を献上する。

中屋敷でも、この日節句をいわって、武者人形や鎧、兜、槍、弓、太刀をかざり、鯉のぼりや吹流しをたてる。にぎやかなことこの上ない。屋敷の勝手では昨夜から準備された材料で女中たちが粽づくりをおこなう。

不動丸は午後になって、うとうとと午睡を一刻ばかりとった。半蔵は夢のなかにでてこなかった。不動丸はそのあいだ、完全に勝負のことをわすれていた。

井戸端へでてゆき、水をくみ、下帯ひとつの裸になって、体をきよめた。

ころを見はからって、不動丸は屋敷をでていった。

紀尾井坂をのぼり、喰違御門をでて四谷へむかった。牛頭天王は四谷の産土神である。伊賀組組屋敷がちかく、半蔵はおのれに有利な地をえらんだのである。

不動丸は敵地に乗りこむような気持で牛頭天王社へむかった。半蔵ばかりでなく、伊賀者の群れが待ちかまえているかもしれぬ。

そうだとしても、それはいたしかたない。決闘状に一人対一人とはしるしていなかったからである。

牛頭天王の参道をあるき、一の鳥居をくぐった。左手に別当、宝蔵院がある。

境内の一方は石垣がきずかれ、三方は塀と木立でかこまれている。

不動丸は二の鳥居をくぐった。正面が拝殿、後ろが本社。境内はひろく、疱瘡神や不動、春日八幡の祠などがたっている。

日は新宿方面におおきくかたむいているが、まだ参詣人の姿もちらほら見える。茶店もひらいている。

不動丸は境内を一巡し、拝殿の前にもどった。

まだ半蔵はきていない。

しかし、どこにひそんでいるか、どこからあらわれるか見当がつかぬ。

不動丸は拝殿右手のおおきな松の下にたって、半蔵を待った。

しかしなかなか半蔵はこぬ。

半蔵に策略があるのかとおもった。約束の刻限はすぎている。

日はさらに西へかたむいた。

（どうしたのか……？）

不動丸もやや不審をいだきはじめた。伊賀者の群れが待ちかまえているとおもいきや、たった一人の敵の姿もない。

半蔵とて忍者であるから、策謀、策略はあって当然である。しかしかまえて卑劣な手段を弄する人物ではないとみていた。今までの対戦で、半蔵の人格、骨柄、気質のおよそは知れる。

（おかしい……）

ようやく不動丸は疑念をいだいた。

（罠か……？）

自分にたいし罠をもうけようとする相手をまずかんがえた。

ひとつは、一方の当事者、半蔵と伊賀者である。もうひとつは、

（大黒天……）

とおもいついて、不動丸は一瞬、愕然となった。

目下、いちばん不動丸に憎悪をいだいているのは大黒天源心であろう。源心の眼目（がんもく）の前にたちふさがる当面の敵は不動丸である。しかも源心はせんだって、不動丸におおきな屈辱をうけたばかりでなく、紀州家を追いだされた。

（なんのために……？）

そうかんがえていって、不動丸は慄然たるおもいにおそわれた。

不動丸は国松の姿を脳裡に浮かべた。

（しまった！　国松さまだ……）

それ以外にかんがえられなかった。源心はいかにも不逞な邪心をいだいたものだ。国松を紀州家から拉致（らち）するために、不動丸を屋敷の外へおびきだしたのだ。半蔵の名をつかえば不動丸をおびきだすことはまず可能である。いかにも源心らしい邪悪な手段ではないか。

不動丸のうちで、かあっと怒りが燃えあがった。

瞬後、不動丸は拝殿の前から身をひるがえした。

あっという間に、二の鳥居、一の鳥居をくぐり、参道をまっしぐらに駆けぬけていた。

翔ぶように不動丸は駆けた。そのあまりなすごさにまだ参道にいた参詣人がおどろいてふりかえった。が、そのときはもう不動丸の姿は見えなくなっていた。

（待て、大黒天！）

こころのうちでさけびながら不動丸は疾走をつづけた。町の風物がとぶように背後へ消え去っていった。

目ざすは、まず、喰違御門だ。見附（みつけ）の城門は日没酉の刻とともに閉ざされる。忍法をもちいれば城門をこえることはできるが、いくらかの時間を要す。そんなところで時間を要していては、国松を拉致されてしまう。

旗本屋敷のあいだを駆けぬけ、間ノ原（あいのはら）をあっという間に縦走した。

喰違御門はその前だ。喰違御門はほかの見附とことなり、枡形（ますがた）をなさず、石畳が左右から喰違い状にでている。その門が今まさにしまりかけていた。

（待て、待て、待てっ！）

心中で大声を発しながら、不動丸は一陣の風のように御門をぬけた。

その先に紀尾井坂が見えている。左右は尾張家と井伊家の長い塀だ。そのあいだを不動丸は韋駄天（いだてん）のごとく駆けくだった。

坂道の途中をのぼっていた尾張家の侍が、あっとさけんで道をあけた。
飛ぶ鳥のように不動丸は紀尾井坂を駆けおり、紀州家の中屋敷をめがけて疾走をつづけた。
中屋敷の塀がぐんぐんちかづいた。門も通用門も裏門も、不動丸の眼中になかった。
坂下のもっともちかい塀にむかって、不動丸は空中で一廻転しつつ飛翔した。
二間余の高さの塀をこえて、屋敷内に着地した。
不動丸はなおもはしった。屋敷内を駆けとおし、国松があずけられている〈南の間〉に飛びこんだ。
その入口に、おもんと桔梗がいた。
「国松さまは？」
不動丸は怒鳴るようにきいた。
「国松さまは、さいぜん上屋敷のお侍とおっしゃる方々がいらっしゃって、おつれになりました」
おもんが不審をいだきつつこたえた。
不動丸は呆然となった。上屋敷の侍というのは大黒天の手下であろう。
「しまったっ、おそかった！　国松さまはつれだされた」
いうなり不動丸はその場にへたりこんだ。
おもんと桔梗が悲鳴をあげて、くずれた。

妖雲起る

一

宵の空に赤い月がかかった。
血の色をした月は六月に入ってから、ずっとつづいている。
地上には風もたえて、昼間のあつさが一気にもどってきた。
うおおん
無量山伝通院の境内から月をながめた野良犬が血の色におびえたかのように遠吠えをつづけた。
すると、それに応じるがごとく、四方の闇のなかから犬の遠吠えがつづいた。
小石川にある伝通院は浄土宗の巨刹で、家康の生母伝通院殿を埋葬している。その墓所の脇には阿弥陀堂へつうじる一筋の道がのびている。
その道をさらにいくと、境内の外の小高い山林にでる。
山林のむこうには、夏草が生いしげり、地に苔やシダ類が這っている廃寺三宝院がある。

三宝院は室町時代の応永年間に建てられた寺で、かつてはにぎわいを見せたが、廃寺となった今では、昼間でも人が寄りつかない。境内は野鳥や狐狸の棲家になっている。

ところが、ちかごろ、三宝院境内にときどき姿を見せる子供がいた。大百姓の倅のような身なりをした少年であるが、気品のある顔だち、利発そうに澄んだ眸をもち、どこかに凜乎とした雰囲気をただよわせている。

少年は人気のない廃寺の境内にたたずんだり、なかば朽ちかけた本堂や、庫裡、鐘楼、山門などを見てまわったり、野鳥を相手に一人であそんでいる。少年ながら孤独の翳が表情にうかがえるのは、少年の出生と今までそだった環境によるものであろうか。しかも少年は一人で時をすごしながらも、何者かを意識していた。姿こそ見えぬが、何者かが境内にひそんでいて少年を監視しているかのようであった。

日が暮れてきたころ、少年は方丈のなかへ姿を消した。このときも、何者かの指図によってそうしたかのように見えた。

方丈のなかは薄ら闇に支配されている。

少年は奥の一室へ入っていった。その床張りの部屋には行灯の明りがゆらめいており、一人の男が背をまるめて仕事に没頭していた。

男は仏師か彫物師のように丸木材にノミをふるっているのだが、それが仏像やほかのものではなく、人間の片腕であることはあきらかである。木製の片腕は本物に見まごうばかりに精巧に彫られ、手首の筋や筋肉のもりあがり、指の爪まで一本一本ていねいにつくられている。

ノミをふるっている人物はまだ若いにもかかわらず、容貌のなかに狷介孤独な翳りを浮かべており、ときに憎悪の表情さえ見せるときがあった。しかもおどろくべきことに、彼のかたわらにはすでに完

成された人間の片腕が二本おかれている。それは彫りあげた腕に鹿のなめし皮をはりつけ、見た目には人間の腕とまったくかわらぬようにできていた。

「今日も不動丸はむかえにこなかった」

少年は男にむかってそういった。

男はやおら顔をあげて少年を見て、

「国松さま、せいてはなりませぬ。不動丸はかならずやってまいります」

鬱然とこたえた。

男は先月（五月）、紀州家中屋敷にかくまわれていた国松を、罠をしかけて拉致してきた甲賀大黒天源心である。源心はそれいらい国松を三宝院の自分の棲家につれてきていた。

「源心の言葉には嘘があろう。おなじ甲賀者ながら、源心は不動丸の味方ではなさそうだ」

国松は澄んだ眸をひたと源心へむけていった。源心は不動丸が待っているからと嘘をいって国松をここへつれだしたのだ。

「嘘ではございませんぞ。わたしも不動丸も甲賀よりぬきの忍者でございます。甲賀者は、かつて毘沙門天道順と申す棟梁が国松さまの父君、駿河大納言さまにおつかえいたしておりました。毘沙門天は最後まで大納言さまにおつかえいたして死に、不動丸は国松さまをおつれしてマカオへ難をのがれ、わたしは甲賀の伝統をまもるために日本にのこって、伊賀の棟梁服部半蔵の命をねらってまいったのです」

源心は眸にくらい光をたたえて、自分と国松、さらに不動丸の立場を口にした。

「そのことについておよそのことは知っておる。甲賀者がわが父につかえ、伊賀者が今の将軍につかえてあらそい、父と甲賀者がやぶれたことはまぎれもない。だが、その後源心と不動丸がこころを合

わせて伊賀者との決着と将軍暗殺をねらっておるといった言葉は、どうも信じがたい」

少年の澄んだ眸と直截な言葉はすくなからず源心の心を動揺させた。少年に真実を見とおされた弱みは否定することができなかった。

「嘘など申しましょうか。わたしの持つ大黒天の称号は毘沙門天につぐ甲賀第二のものです。そして、不動丸は毘沙門天道順の実の弟でございます。伊賀者たちは大納言さまの血をひく国松さまが日本にかえられたことにうすうす気づいているようですし、さらにやつらは甲賀者をほろぼさんものとたくらんでおります。それでわたしは紀州家の屋敷はあぶないと察して、国松さまをおつれしたしだいです。不動丸がいまだにここにあらわれぬのは、伊賀者たちを警戒いたしてのことでしょう」

嘘をまじえて源心は国松をいいくるめようとした。

源心の野心は甲賀第一の称号毘沙門天をうけつぎ、半蔵をもたおすことにある。そのために甲賀内の競争相手不動丸をやぶらねばならぬ。不動丸をおびき寄せるために国松を拉致し、三宝院境内にあそばせているのだ。

「不動丸は伊賀者をおそれて、わしをたすけにこぬような男ではない。不動丸のことはわしがいちばんよく知っている」

国松は源心をおそれることなく、自信にあふれた言葉でいった。

「国松さまは異国で八年も不動丸とともにすごされたので、よくご存知でしょう。不動丸は遠からず、伊賀者の目をかいくぐってここに姿をあらわすはずです。今しばらくお待ちください」

「待つのはいたしかたない。辛抱いたそう。だが、源心は不動丸がくるのを待ち伏せして、闇討ちをしかけようといたしているのではないか」

少年のするどい眼差は源心の邪心を見とおしていた。

「待ち伏せ、闇討ちなどいたそうはずもございません。不動丸が国松さまを安全なところへおつれいたすのであれば、すぐにおわたしいたします。ともに甲賀のために伊賀とたたかわねばならぬ間柄です」

「それならばよいが、毘沙門天の位につくために、源心は不動丸をたおそうといたしておるのではないか」

本心をつかれて、源心は内心でうろたえた。十一やそこらの少年がそこまで人のこころを読むとはかんがえていなかった。

「甲賀の称号はたたかってうばいとるものではございません。甲賀の者たち一同からもりたてられ、推されてその地位につくべきものでございます」

「本当にそうならば結構なことだ。甲賀者すべてにとってそれがしあわせというべきであろう」

そういって国松は源心のいる部屋を立ち去り、自分にあてがわれた一室へとひきとった。

源心は自分の心中をほとんど少年に見ぬかれたことへの狼狽がなかなか消えなかった。

（もうそろそろ本当に決着をつけねばならぬときがちかづいた）

源心が不動丸をねらいだして、はや二年になる。が、まだ決着はついていない。そればかりか、不動丸は日本にもどってきてからも着実に力をつけており、服部半蔵と五分五分の勝負をするくらいに成長していた。甲賀者たちのなかにも不動丸の人望はひろがり、その力をみとめる者の数がふえつつある。源心はちかごろあせりをおぼえていたのだ。

（不動丸よ、はやくこい。そしておれと勝負をしろ！）

源心はふたたびノミをとりつつ、こころのなかで不動丸に呼びかけた。

源心は宵もふかまったころ、一度方丈の外へでた。

（今日も赤い月がでている）

空を見あげて、源心は心中でつぶやいた。赤い月は戦いのおこる前兆、暗示ではないかと源心はおもった。

二

（きた！）

源心が心中にさけんだのは、夜更けの子の刻をまわったころだ。源心はそのころまだノミをふるいつづけていた。

義手は半蔵とのたたかいで左腕をうしなったためにやむなくつくったものだが、今ではそれが源心の有用な隠し武器になっていた。諏訪坂において伊賀者、室生の鳶をたおしたのも、この隠し武器による。左の義手は今では源心にとってなくてはならぬ武器になっていた。時間のあるとき、こうして義手をつくっておくのである。

三宝院境内の梢で、

ケーン　ケーン

雉子の鳴く声がきこえた。

源心は雉子の声にじっと耳をかたむけていた。雉子は今が繁殖期である。この期間中、雄は雌を呼んでしきりに鳴きさわぐ。夜更けに鳴いたとしても不思議ではない。

ケーン　ケーン

もう一度きくと、雉子は方丈にちかづいていた。

（ようやくきた。不動丸とその一味であろう）

源心はそのように推量した。雉子の鳴き声は仲間との合図だ。二人以上と推量したのはそのためである。

約一カ月たって、ようやく待ち人がやってきた。

源心は体がひきしまるのをおぼえた。今日こそ不動丸をたおしてやろう、と暗い闘志をかきたてた。

今、三宝院には寿の三郎やさみだれの長次、白浜の権三らの手下がいる。いずれも腕きぞろいである。

源心はじっと耳をこらした。

もう雉子の声はきこえなかった。風の音もない。

しばらくの時間がたった。寿の三郎、さみだれの長次、白浜の権三も方丈の各場所できき耳をたてて、来襲者たちにそなえているはずだ。

来襲者の気配はなかなかつたわらなかった。

ようやく源心は焦れてきた。

「長次、でてみよ」

源心はひくい声を襖のむこうへ投げた。

やがて、音もなく、ひとつのちいさな影が闇のなかから方丈の廊下へしのびでた。

さみだれの長次は小柄な男である。闇をにらんで境内を凝視した。

ケーン　ケーン

そのとき今度ははっきりと雉子の鳴き声が方丈のすぐちかくでおこった。ばかりではない。ばたばたっと羽音がしたとおもうと、方丈の屋根へむかって本物の雉子が飛びたった。

源心も長次も、さいぜんから雉子の鳴き声は忍者の擬声だとかんがえていた。
長次は錯覚に気づいて、廊下からもどっていった。
「本物の雉子が境内にきておりましたよ」
長次がそう報告した。
「そうか……」
源心はこたえて、緊張をといた。安堵したのではなかった。失望したのである。明日からまた待たねばならぬのだ。
寿、権三にも長次の答はきこえた。
その直後である。方丈のすぐちかくから、いくつかの黒い人影がいっせいに鳥が飛びたつように、方丈の入口へ殺到していった。
方丈の廊下から、あるいは窓から、あるいは杉戸から、黒い影はほとんど同時に突入した。
方丈のしずけさがやぶられた。
「はかったなっ、不動丸！」
源心はおめきをあげ、瞬時のうちに応戦にたちあがった。
寿、長次、権三もすぐさま応戦にでたが、すでに敵はこちらの内懐にとびこんでいた。
行灯のゆらめく灯影（ほかげ）のなかを黒い影がいくつも掠（かす）めた。
方丈内でたちまち激闘がくりひろげられた。
影がいくつも交錯し、鋼（はがね）と鋼の打ち合う音、荒々しく床を踏む音、声のない気合と気合のぶつかり合う気配、襖や板戸を蹴やぶる音が騒然とひびきわたった。
激闘はあくまでも屋内でつづいた。忍者と忍者の闘いだけに、太刀と太刀で打ち合うたたかいばかりではないのだ。飛ぶ音、突く音、蹴る音、転倒する音、さまざまな音と気配と殺気が入りみだれ、交錯し、激突し合う凄絶な修羅場となった。

襖がやぶれ、板戸がたおれ、床が踏みぬかれた。
衣を切り裂く音、肉を断つ音もひびいた。
来襲者たちは合印をつけ、合言葉をときにかわし、源心らは知りつくした足場をいかしてたたかった。
この修羅場からいちはやく一つの影がぬけだし、国松が寝ている部屋へはしった。
それを追って、源心もはしった。
源心をはばまんものと、もう一つの影が追いせまった。
「いざ、国松君っ、おむかえにまいりましたぞ！」
寝所にとびこんで、黒い影が国松へ声をかけた。
国松はすでに方丈でおこなわれている激闘に気づいて、夜具の上に立ちあがったところだった。
「安全な場所におうつりになっていただきますぞ」
その声とともに、国松の体は抱きあげられた。
「そうはさせぬぞ！」
さけんで源心がとびこんできた。
間髪をおかず、もう一つの影が乱入してきて、源心と揉み合った。
源心は国松が奪還されるのを必死ではばもうと、邪魔だてする者を打ちすえた。が、打ちすえた者は源心の足にすがりついてはなさなかった。
「ええいっ」

源心はついに忍び刀の柄の先端で邪魔者の脳天を打ちすえた。
その者は気絶してたおれた。
それよりも一瞬はやく、国松を横抱きにして、黒い影が脱兎のごとく部屋をとびだしていった。
源心がそれを追った。餌を囮にして罠をもうけたのに、餌だけさらわれては面目もまるつぶれだ。
源心は方丈をとびだした。
そのとき、方丈の前庭にひそんでいた黒い影がいきなり源心へ体当りをあびせてきた。
「あっ」
源心は必死でかわそうとした。が、何分にも至近距離であったため、双方は正面から激突した。
黒い影はたまらず、方丈の前庭まではじきとばされた。源心も方丈の入口まで撥ねかえされた。
「おのれっ、邪魔者！」
源心は憤怒にまかせて、前庭からおきあがって突進してきた黒い影と、一合、二合、忍び刀を打ち合った。
源心はふり切って追おうとしたが、黒い影はあくまでもそうはさせじとはばんだ。相手も百戦の強者と見えて、執拗に源心にくいさがった。源心が打ちこめば、すばやく退き、ほかを追おうとすると、相手がすかさず打ちかえしてきた。
源心はこころならずも、この敵と一進一退をつづける羽目となった。
「寿っ、長次、権三、はやくしろ！」
方丈の中にむかって源心はさけんだ。
けれども寿、長次、権三もそれぞれ敵とわたり合っている最中である。すぐには源心の声には応じられなかった。

長次がようやく方丈の外にでてきたときには、すでに勝負の駆け引きはおわっていた。国松を横抱きにした忍者は山林をぬけ、伝通院方面へ逃げ去り、もう一人の敵はついに源心の追走をはばむことに成功した。
長次の姿を見ると、その忍者はもはや任務はおわったとばかり、源心にはふりむきもせず、前庭から境内の外へあざやかに逃走した。
「失敗った。不動丸めに国松さまをさらわれた」
源心は地団太をふむようにうめいた。
雉子をつかった作戦にはめられ、後手にまわったのが敗因であった。方丈内の敵も長居は無用とばかり、いちはやく潮がひくように逃走した。
「してやられました」
「不動丸や金剛をこのままにしてはおけぬ。再度、国松さまをうばいとり、不動丸と金剛をやっつけてやらねば」
寿と権三も敵を追ってでてきて、口惜しそうにいった。
「策をもうけてようやく国松さまを拉致いたしたのだ。二度めがうまくいくとはかぎらぬ。しかも、不動丸も金剛も簡単にたおせる相手ではないわ」
源心は寿や権三をたしなめるようにいい、方丈の奥へ姿を消した。
空には、まだ赤い月が雲間にかかっている。
月が雲を呼んだのかもしれぬ。横雲のようにあやしくたなびいている。
半刻あまりがたった。

丑の刻がちかくなったころ、三宝院の境内にふたたび黒い影が浮かんだ。忍び装束に身をかためた黒い影は二つ……。

妖雲のたなびく下、黒い影は境内から方丈へちかづいていった。赤い月の光に照らしだされた忍び装束の主は、今度こそ不動丸と金剛であった。

不動丸と金剛はおよそ一刻（二時間）ほど前、べつの一団が三宝院をおそったことはつゆ知らなかった。不動丸と金剛も国松がこの三宝院にとらわれているとようやくさぐりだして、この夜更けに奪還をめざしてやってきたのだ。

不動丸と金剛は方丈の入口までちかづいて、内部の様子をうかがった。

方丈のなかはすでに寝しずまっていた。

不動丸が合図をすると、金剛が方丈の前庭へすすんだ。

うおおん

金剛は月を見あげて犬の遠吠えをはなった。

うおおん

もう一度吠えると、あたりから、

うおおん　うおおん

〈一犬形に吠ゆれば、百犬声に吠ゆ〉

近所の犬がことごとく遠吠えをきそいはじめた。

その騒々しさに、やがて、寿、長次、権三などがそっと入口までてきてあたりをうかがった。

源心も犬の声が気になって、入口にでてきた。

不動丸が方丈の裏の勝手口から、内部へ突入したのはそのときだった。

一陣の風が駆けぬけるように、不動丸は方丈の中を駆けめぐった。

「国松さま、いずこにおわします。不動丸がたすけにまいりましたぞ！」

不動丸は声をはなって国松をさがした。

その声に応ずるかのように、源心らがいっせいに方丈内に駆けもどってきた。

「不動丸よ、一夜に二度もまいったか！」

源心は怒りにもえて不動丸に突進してきた。その右手にはやくも忍び刀がひかっている。

「国松君をたすけにまいった」

不動丸はそういったものの、源心の言葉ではやくもことの行き違いを察していた。

「たわけっ、国松さまはすでにほかの一団がさらっていったわ！」

源心は激昂しながらおそってきた。源心もこのときはじめて前回の襲来が不動丸ではなかったことをさとった。忍び刀が不動丸の頭上に舞いおちた。

（すわ、半蔵のしわざだ……）

不動丸は声なきうめきをあげ、忍び刀をかわした。源心と不動丸をだしぬいて裏をかくほどの人物は服部半蔵以外にかんがえられなかった。

「不動丸、待っていた。勝負しろ！」

源心はかわされながらも、つづけざまに忍び刀をふるってきた。

「源心よ。お前とあらそっておる場合ではない。国松さまのお命があぶない」

不動丸はつづけて忍び刀をかわした。

源心もさいぜんの一団が半蔵一味だと気づいたようだ。

「勝負は後だ」

いいのこすなり、不動丸は方丈をとびだした。
あとは一目散に三宝院の境内を駆けぬけた。

三

今夕も、拍子木の音が江戸市中をかけめぐり、紀尾井坂を七つ坊主の一団がとおりすぎた。
張孔堂由井正雪は高弟たちをしたがえて紀尾井坂にある紀州家中屋敷をおとずれていた。
正雪は紀州藩主徳川頼宣の軍学の師である。講学の間へみちびかれ、正雪はさっそく頼宣に楠流軍学を講じはじめた。
正雪がこのんで軍学の教材とするのは、〈六韜三略〉と〈太平記〉である。正雪はこの宵も、太平記を講じていた。太平記は四十巻にわたる軍記書物で、南北朝時代を背景にして後醍醐天皇の討幕計画から幕府滅亡、建武新政、さらに南北両朝の対立をえがいた作品である。軍学の教書とするにはもってこいのものながら、討幕、幕府滅亡といった事柄を詳述するのは、現幕府の立場からいえばはなはだ公儀をおそれぬ不敵さといえる。しかもその講義をうける頼宣も大胆きわまりない。
頼宣はかつて駿河大納言忠長と親交があったために、幕府に謀叛の疑いをもたれたことがある。それでなくてさえ、剛毅闊達な性分からしばしば甥にあたる将軍家光と衝突をおこしていた。
正雪は講座にすわり、明快な言葉、明晰な史実解釈によって、太平記の各戦について論述をかさねていた。
頼宣は正座し、膝をただして熱心に講義にきき入った。
金井半兵衛、吉田勘右衛門、熊谷三郎兵衛などは控えに座して、正雪の講義を拝聴している。

時あたかも後醍醐天皇の討幕、蜂起のくだりにいたったとき、正雪の眸が一段と生気をおび、爛々とかがやきだした。
「後醍醐天皇がかしこくも討幕の旗あげをおこなった時世といえば、奇しくも政情は現今と酷似いたしております。今、幕府は三代の将軍をむかえ、側近に二人の大老をすえ、老中、若年寄の幕閣をかたちづくり、磐石の基盤をきずいたかに見えます。しかも先年来より鎖国の制を敷き、諸外国の脅威はまずなくなったものと申せましょう。島原における乱もしずまり、幕府は安泰、四民は繁栄の御世をむかえております。しかしながら一方で目を他方に転ずれば、幕府の大名取りつぶしにより関ケ原合戦、両度の大坂陣などで外様大名ばかりでなく、譜代大名、はては徳川家一門の大名まで改易あるいは減封に処せられ、世に浪人がみちみちております。一口に二百家にちかい大名がつぶされ、数十万人の浪人がでたといわれております。このなかから他の大名に召しかかえられた浪人をのぞけば、のこりの大多数は仕官の手蔓もなく、またのぞみもなく路頭をさまよっておるしだいです。しかしながら幕府には浪人を救済する手立をまったく持ちあわせておりませぬ。今の幕府幕閣にはそれをかんがえる者すらなく、逆に浪人狩りなどと称して、浪人たちを追いたてておるしだいです。このまま放置しておけば、やがて浪人たちは餓狼の群れとなり、四民に牙をむける存在になるやもしれませぬ。幕府にその意志なければ、そのような幕府は世に有益なものとは申せぬでございましょう。立ちあがって幕府をただすか、あるいはたおすかの道しかありませぬ」
正雪は太平記の立場から現在の幕府のあり方にするどい非難の矢をはなった。これは正雪のつね日ごろの持論といえるものだが、こうまではっきりと舌鋒するどく頼宣へせまったのははじめてだった。
正雪は御三家の頼宣にたいし、倒幕の挙にでることを説いたにほかならぬ。
頼宣はじっと正雪の言葉にきき入っていた。正雪の意中はすでに頼宣の十分知っているところであ

った。正雪は幕府打倒の盟主として頼宣が立ちあがることをしきりにのぞんでいるのだ。

「幕府、将軍におかれましても、駿河大納言、および加藤忠広公らとしたしくまじわりを持たれていたわが紀州公にただならぬ疑いをいだいておることは、火を見るよりもあきらかにございます。熟慮いたすことは肝要でございましょうが、しすぎて時機をうしないましては後悔いたすすべもございませぬ。なによりもご決断が大切かと存じあげます」

正雪がさらに言葉をつづけたとき、

「その駿河大納言でござるが、遺児国松どのがかねて逃亡中のマカオからひそかに帰国し、わが屋敷でかくまいいたしておった」

頼宣が密事をうちあけた。

正雪の眸がそのときわずかにひかった。

「駿河大納言さまのご遺児でございますか」

正雪は国松の名をきいたとき、はやくも胸中に策をいだいたようだ。

「左様、国松どのじゃ。さりながら、昨月、さる者に国松どのをつれだされ、いまだ消息がなくなっておる」

頼宣は憂いを見せていった。

「その国松さまは、われわれにとっても大切なお方になられます。駿河大納言とおっしゃれば、かつては現将軍をさしおいて将軍位に擬せられたお方でございます。そのご遺児となれば、わが方の盟主におすわりなされてもご不足なきお方ではございませぬか。国松さまが盟主にすわれば、駿河大納言さまにご同情なされていた大名たちをうごかすこともできましょう。何者につれだされたのでございますか」

正雪は蒼い光を眸のなかにやどしていった。

「ひょんな油断からでござった。かねてわが屋敷に出入りいたしておった甲賀者がつれだした」

「それは迂闊でございましたな。まず、国松さまをさがしだされることが大切でございます。幕府に見つかれば、そのお血筋柄、お命を断たれますのはまちがいのないことでございましょう」

「目下、探索をつづけておるところじゃ」

「殿様、悠長になされてはおられませぬ。なんといたしても、一日もはやく、いや一刻もはやく国松さまをおつれもどしになることです」

「わかった。そういたそう」

頼宣は忠長とのかつての交誼から、不動丸に国松の身柄を依頼されたときこころよく引きうけたのだ。国松の血筋、身分をわがことのために利用する気持は今までもっていなかった。が、正雪の言葉をきいて、いくらかそれにこころをうごかされた。

「国松さまには大層なお値うちがございます。幕府に身柄をもっていかれては一大事です」

正雪はかさねていった。

正雪一行が紀州家を辞去してから、頼宣は用人の田辺喜左衛門を呼んだ。

田辺が早々に頼宣のもとに伺候すると、

「不動丸を呼べ。至急の用件じゃ」

頼宣は田辺に命じた。

不動丸と頼宣との連絡にはいつも田辺があたっていた。

「承知いたしました。一両日中にはかならず」

田辺がこたえると、

「一両日とはこころもとない。おそくとも明日中にはつれてまいれ」
頼宣は命じた。
「はっ」
田辺はかしこまって、頼宣の前から退参した。

四

六月大暑に入った一日。将軍家光の東叡山寛永寺参詣がおこなわれた。
寛永寺は二代将軍秀忠が家康の意をうけて上野の地に建立した、江戸城の鬼門をまもり、悪事災難をはらう鎮護国家の霊場である。西における比叡山の呼び名にならって、東叡山を号とする。天台四明の法灯をかかげ、仏乗三観の覚月をあおぐ。いわば徳川家の祈願所である。
将軍は毎年、大暑の一日、寛永寺に詣でて、疫病退散、国家安全、豊年満作をいのるのが恒例となっている。朝江戸城を発し、祈願をおえて夕方、江戸城にもどってくる。御三家、親族、老中、若年寄、譜代、外様の大名はもとより、直参旗本まで将軍にしたがう。
したがって将軍参詣の行列は壮大で、先頭が上野に着くころ、後尾はまだ江戸城の門をでない有様である。随行の諸大名の行列が壮大ならば、沿道と上野山内の警備は厳戒をきわめている。沿道の家々はみな大戸、雨戸をとじ、火の気を禁じ、各家々ごとに塩や砂を盛り、何間かおきに大番組、書院番組、槍隊、弓隊、徒士組、鉄砲隊などが警衛に立っている。江戸町内の目明しや五人組などまで駆りだされて、治安にあたった。
随行の諸大名が上野に到着するころとなると、江戸城すらも留守居をするわずかの大名のほか、大名、旗本、御家人たちはほとんどいなくなってしまう。もし幕府倒滅を意図する大名があるとするならば、今日のような日は狙い目である。むろん幕府は将軍や諸大名の留守の防備についてはこころをくだき、いろいろ手を打ってはいるが、江戸城が普段とくらべて手薄なのは否定しようがない。
参詣行列の沿道以外の往来や中通り、小路、裏道までもこの一日は人通りがすくない。
江戸城の膝元ともいうべき麹町通りでも、この日は目立って人影がすくない。参詣行列の沿道ではないが、人々は万が一にもさわぎに巻きこまれるのをおそれて、外出をつつしんでいるのだ。麹町通りは家康が関東に入国したとき最初に町割りをしたところであり、その後も何事によらず江戸の町々の規範になっている町だが、それでも大戸を閉じ、暖簾をひっこめている老舗が目につく。
麹町通りには老舗、名店がおおく、格式もたかく、繁昌している店々が軒をならべている。高台であるため、湿気をきらう麹づくりに適しており、麹屋がおおいのも特徴である。
「ええ、くずい、くずい……、紙くず」
その麹町通りに紙屑ひろいの声がひびく。人通りのあまりない、昼下りの大通りをのんびりと紙屑ひろいの声がながれていった。
紙屑ひろいはおおきな竹籠を背負い、地面にとどくような長い竹箸をもって、各家々をのぞくようにあるいていく。
麹町通りは一丁目から十丁目まで、やや湾曲しながらも一本道で長くのびている。江戸城下でいちばん距離のながい町である。
そのおよそ中ほど、六丁目のはずれに、南へまがる道がある。この道は坂になっており、ゆるゆるくだると、紀尾井坂につながる紀州家の裏通りにぶつかる。
「くずい、くずい……」

手ぬぐいで頬かむりをした紙屑ひろいは六丁目の角をまがった。曲り角には乞食が寝ており、そのそばにまるめた紙屑がおちていた。紙屑ひろいはながい竹箸でひょいとはさんで、自分の籠に投げ入れた。ように見えたが、南の道へまがると、くだんの紙屑を手にしてひろげた。そしてよくそれに見入ってから、籠に投げいれた。

紙屑ひろいはだらだら坂をくだっていった。

坂道の左手は神谷嘉太夫という旗本の屋敷であるが、右手は人もおそれてあまりちか寄らぬ服部半蔵の屋敷だ。

半蔵屋敷のくずれかけた長い土塀がつづく。

その坂道を紙屑ひろいがくだりきった。すると目前に宏壮な紀州家中屋敷のたかい白壁にぶつかる。半蔵屋敷の側面と紀州家中屋敷の裏側とは、紀尾井坂につづく道を境にして隣接しているのだ。

紙屑ひろいは坂道の右側が鬼もおそれ、泣く子もだまる半蔵の屋敷だとは知らぬようだ。裏門口のそばにおかれたゴミ箱のフタをあけ、中をあさりはじめた。

悠々とあさって、紙屑をひろっては籠に入れて、角をまがった。

ところが、まがったとたんに、紙屑ひろいの姿がこつぜんと消えた。

むこうの路上には人影ひとつとして見えなかった。

紙屑ひろいは角をまがったと見せて、そのじつゴミ箱を足場にして半蔵屋敷の土塀をこえて、中に侵入していたのである。

その紙屑ひろいはボロをまとい、尻端折りをして、草鞋をはいている。そのままの姿で、半蔵屋敷の裏の木戸をあけ、紙屑ひろいはなにもおそれる気配を見せず、すたすたとあるいていった。その先には勝手口がある。

紙屑ひろいは勝手口の杉戸に手をかけた。一、二度、杉戸の把手をうごかすと、コサルがおちた。

紙屑ひろいは大胆不敵にも杉戸をあけて、半蔵屋敷の母屋の勝手にあがった。

まず土間があり、そこをあがると厨である。

折から、厨は無人であった。というよりも半蔵屋敷にはほとんど人の気配がなかった。棟梁半蔵をはじめ、おもだった伊賀者たちはほとんど将軍警備のために上野寛永寺へ出張っていた。

しかし半蔵屋敷がまったく無人であるはずがなかった。留守をまもる伊賀者はいるはずである。

けれども、紙屑ひろいは伊賀者に見つかることをほとんどおそれていなかった。見つかったときに、それ相当の対応をする覚悟と余裕があった。

しかもこのとき、半蔵屋敷にはもう一人の人物が無断で入りこんでいた。この人物も、むさい男である。麹町六丁目の曲り角で路上に寝ていた乞食である。

この乞食も、紙屑ひろいにおとらず豪胆不敵な男であった。蓆をまるめてたずさえ、勝手の木戸から、母屋の庭へまわっていった。

この乞食もよごれた手拭いで頬かむりをしている。乞食は庭をゆっくりあるきながら、頬かむりをとった。

よごれた手拭いの下から、ややちぢれた髪があらわれた。汗や埃でよごれた顔は金剛のものである。

金剛はこの数日、ずっと麹町から紀尾井坂あたりで物乞いをつづけ、半蔵屋敷の出入りを見張っていた。

さいぜん、六丁目の角で紙屑ひろいにひろわせた紙屑は通信文である。

半蔵不在

としるした文字が紙屑にしたためてあったのだ。

紙屑ひろいは、ひろい屋敷のなかを一室一室あるいてまわった。いずれ留守をまもる伊賀者と顔を合わせることは必定である。紙屑ひろいも、今は頬かむりをとりはらっていた。

頬かむりの下の顔は、まごうかたなき不動丸である。

半蔵屋敷の母屋はなかなかひろい。中にどのような仕懸や罠がしくまれているかわからぬ。

不動丸は国松をたすけだすために半蔵屋敷に侵入したのだが、国松の居場所はなかなかわからなかった。各部屋部屋をまわり、押入などものぞいてみたが、国松の姿は見つからぬ。

納戸もあらためたし、蒲団部屋ものぞいてみた。それでも国松はいなかった。

いずれにしろ長居はできぬ。不動丸も内心焦りがめばえていた。

(はやくしなければ、伊賀者に見つかる)

不動丸は血眼(ちまなこ)になって、屋敷の中をさがした。

(母屋にはいないのかもしれぬ。蔵か長屋にとじこめられているのだろうか?)

不動丸のおもいはみだれた。母屋以外のところを金剛がさがしているはずである。

国松を見つけたら、口笛で合図することになっている。

不動丸はなおもさがしたが、国松の姿は見えぬ。

「オンデ　トゥ　エスタス!」

窮余の一策、不動丸はついに大声を発した。

(国松さま、どこにおいでになる?)

八年間つかいなれたマカオ、ポルトガルの言葉でいったのだ。国松の耳にとどけばわかるはずである。

「オンデ　トゥ　エスタス!」

不動丸はもう一度いった。静けさのなかに不動丸の声はひびいた。国松が母屋内にいたらきこえるはずである。

しかし返事はかえってこなかった。

そのかわりに、音もなく不動丸のいる場所にせまってくる姿なき伊賀者たちの気配がつたわった。

その気配を不動丸はしっかりとうけとめた。伊賀者との闘いは覚悟の上である。たたかわずして半蔵屋敷をぬけだすことができるとはかんがえていなかった。

「オンデ　トゥ　エスタス!」

三たび不動丸はさけんだ。

その直後、

「アキエス　トゥ!」

母屋内のどこからか、なつかしいポルトガルの言葉がきこえてきた。

(ここだ!)

という意味である。まちがいなく、国松の返事だ。

不動丸の胸にあつい激情がこみあげてきた。激情が闘志をかりたてた。不動丸と国松のあいだだけにつたわるマカオ、ポルトガルの言葉が今両者をむすびつけた。日本をのがれマカオですごした八年間の心情が瞬間、不動丸の胸にわきおこり、国松のこころにもつたわったのだ。

(今たすけにまいりますぞっ、国松さま!)

激情がふたたびほとばしった。

不動丸は国松の声がきこえた方角へはしりだした。

ながい廊下にでた。
そのとき、廊下のかなたから、低くとぶように伊賀者の影が二つせまってきた。
不動丸は全身を廊下にさらした。
突風のように二つの影はせまった。先頭の影は忍び刀をもち、二つめの影は大鎌をかまえている。
さらにすこしおくれて三つめの影がきた。
伊賀者の影が飛来したとき、不動丸は一瞬すばやく身をひるがえした。同時に、
ビュッ　ビュッ
神速のはやさで紙屑ひろいの長い竹箸が二本、弧をえがいた。
空中をひくく飛んでいた伊賀者が二人、音をたてて廊下に落下し、つぎつぎに転倒した。竹箸の一本は伊賀者の喉から首の後へ貫通し、もう一本はべつの伊賀者の胸をふかく突き刺していた。
伊賀者の大鎌は紙屑籠を斬り裂き、忍び刀は柱に突き刺さっていた。
不動丸は彼等には見向きもせずに、廊下をすすんだ。
三人めの伊賀者がさらに廊下をひくく飛んできた。その背後に国松の姿が見えた。国松は不動丸の声がしたほうにとびだしてきたのだ。
突風が廊下を吹きぬけるように、伊賀者がせまった。
伊賀者の忍び刀がひくく弧をえがいたとき、不動丸は廊下の天井へ跳躍し、同時に片足をするどく飛ばした。その足が伊賀者の顎を鋭角的に蹴りあげ、伊賀者の体は廊下の床にはげしくたたきつけられて、うごかなくなった。
不動丸は国松のいるほうへはしった。国松を抱きあげ、廊下の戸を蹴たおし、庭へとびだした。
だが、その前方にはまた伊賀者が二人姿をあらわした。将軍警備に伊賀者たちは出はらったと見られたが、数人やそこらは留守をしていたのだ。
不動丸は脱出の方向をさだめるのに一瞬、間をとった。
伊賀者たちが疾走してきた。
その伊賀者たちにむかっていった者がある。金剛である。
金剛は蓆を巻いてさげていた。その蓆をとくと、中から忍び刀があらわれた。
金剛の忍び刀がうなりをあげて伊賀者へおそいかかった。
不動丸は国松をかかえて、裏口にむかって疾走した。

五

秋は、まだ夜這いの季節である。
六月の赤い月にかわって、澄んだ月の光が江戸の郊外渋谷村にふりそそいでいる。
江戸も渋谷くらいの郊外になると、武家の下屋敷と寺院のほかはほとんど農家である。したがって周囲は田圃と畑と山林の農村風景である。
ここらあたりの農家でも、女は娘の年ごろになると江戸へ武家奉公や女中奉公にでる者がおおいので、女手がたりない。江戸は新興の町である。地方からながれこんでくるのは男がおおく、女がすくないので、近郊から女手をもとめることになるのだ。
江戸近郊や近国でも、慢性的に女不足になやまされている。そのため夜這いで憂さをはらそうとする男がおおい。渋谷村でもおなじである。
どこの農家でも、女は年ごろになると、村の男たちにねらわれる。後家や出もどりになると、いっ

そうねらわれやすくなる。

けれども、おもんの家では甲賀毘沙門天道順の後家と娘という身性がさいわいしてか、今までは手をだす者もいなかった。しかも、この春から夏にかけておもんも桔梗も紀州家中屋敷に身を寄せていたので、おもんの家は戸が閉められていた。この秋ようやく、おもんと桔梗は渋谷村にもどってきた。

新秋、盂蘭盆の明けた一夜……、おもんの家の庭先にひそんで夜這いをこころみようとしている男が二人いた。

庭先では秋の虫がさかんに声をきそっている。その虫の音をききながら、二人の男はおもんの家をうかがっていた。

灯りが消えてもう半刻はたっている。

「ぼつぼつ時刻はいい加減だ」

ひくい声でいった男は甲賀大黒天源心である。

「もう二人とも、寝入っているころでしょう」

おなじくひくい声でこたえたのは、さみだれの長次だ。

源心と長次は灯りが消えるすこし前からここにひそんでいた。

源心はすでに二度、おもんを自由にしていた。けれども二度とも〈不動呪縛〉をつかって、おもんを身うごきのとれない体にしてのことだ。術にしばられたおもんの体は生身とはいえぬ。源心はそうおもった。それで一度、生身のおもんを存分にわが物にしたいとおもっていたのだ。

ひさしくねらっていたおもんが、ようやく渋谷にもどってきた。桔梗は長次にゆずる約束をした。

「いくぞ」

一言のこして、源心は庭先の暗闇を這いだした。

長次もそれにつづいた。

庭を這いすすんで、母屋の縁側まできた。

女家族だけに雨戸をきちんと閉じている。

苦無ひとつで簡単に雨戸を一枚とりはずした。

源心と長次は難なく屋内に侵入した。

「おれはこっちへゆく。お前はむこうだ」

源心と長次はわかれわかれにすすんだ。勝手知ったる他人の家である。

おもんの部屋をあけると、女郎花のにおいがただよった。女郎花は秋の七草のうちでいちばんにおいがつよい。そのにおいがおもんの肌を連想させた。

部屋には有明行灯がついていなかった。闇のなかにおもんの肌がふんわりとにおった。

闇のなかでも源心はぼんやりと目が見える。けれども今夜は術をつかわなかった。

おもんの夜具のそばへ寄り、夜具をまくって、おもんのとなりへ入っていった。

「おもん様、おなつかしゅう存じます」

源心は尋常に声をかけた。正体をあかしたつもりだった。

「わたしの望みをかなえてくださいませ」

さらに源心は尋常な口説きを口にした。一人の男としておもんを抱きたかった。

「そなた、もう二度までも、わたしをおもいのままにしているではないか」

意外な言葉がかえってきた。こばまれるとおもっていたが、おもんはこばまなかった。

「おもん様、うれしゅうございます。源心は果報者です」

そういって、源心はおもんの胸へ手をのばした。夜着の下の胸が息ぐるしそうにあえいでいる。衿

のあいだの白い肌が夜目にもうつくしく、なまめかしかった。
「二度も抱かれてしまえば、女はもう駄目です。こころとは裏腹に、体はその男のものになってしまいます」
あえぐようにおもんはいった。
そんなものか、と源心はおもった。こころに余裕が生じた。生身のおもんをもう手に入れたも同然だとおもった。
「わたしも心底、おもん様におもい焦がれておりました」
源心は調子にのっていった。
「わたしの身もこころも、もうそなたのもの」
おもんはすっかり源心にまいってしまったようだ。以前の毅然たるところはかけらもなかった。
源心はおもんの夜着の衿をはいだ。
ゆたかな乳房がなまなましく息づいている。
源心はその胸へ顔を埋めていった。
乳を吸われて、おもんはうめいた。
源心は有頂天になって、おもんの腹へ手をまわした。夜着の裾をわけて、手を股間へ這わせた。
おもんはあえぎこそすれ、こばみはしなかった。すすんでむかえ入れる態度である。
源心は欣喜雀躍するおもいで、おもんの体を二つにした。股間へ腰を入れて、ひとおもいに突き入れた。
おもんの態度が以前と今とおおきくかわったことに今すこしかんがえをいたすべきであった。術と力で体をうばった女のこころがそうまでかわるものか慎重にかんがえるべきだった。

ところが源心はおもんのこころが体にひきずられて自分にかたむいたと信じたのだ。
源心はおもんを完全に征服したよろこびに酔った。酔いにまかせておもんに没入した。
おもんも源心をむかえて、よろこびに狂喜したようにおもわれた。おもんは遠慮のない声をあげて、我をわすれていった。
源心はさらにいっそう没入していった。源心はすでに自制心をうしなっていた。
そのとき黒い影が襖の隙間から入ってきたのを、源心ほどの忍者が気づかなかった。
「源心、大黒天よ」
黒い影が闇のなかからいった。
源心はかすかに人の声をきいたような気がしたが、まさかとおもって打ち消した。
「源心、立て、勝負だ！」
わすれるはずもない不動丸の声がそのとき部屋の中でひびいた。
一瞬のうちに源心は夢からさめた。そして、すべてをさとった。
「はかったな！」
しぼりだすように吐き捨てた直後、
きえええいっ！
ものすごい気合が室内に炸裂した。
気合と同時に源心はおもんの腹上から飛びあがり、夜具のかたわらにおいた忍び刀をぬきはなち、一閃した。
が、忍び刀は手にしたものの、源心はおもんの体からはなれていなかった。体の一部がおもんにくっついていた。股間のそれではなかった。一物はすでにおもんから抜けていた。源心の左腕が凍りつ

いたようにおもんに密着していた。
おもんが源心の義手をしっかりつかんではなさなかったのだ。いかに精巧につくられた義手とはいえ、神経はつうじていないので、おもんにかかえこまれているのがわからなかった。
「おのれっ、おもん！」
さけぶや、源心は怒りのすべてをこめ、おもんにむけて忍び刀を打ち振った。
その瞬前、源心の眉間に闇のなかから猛烈なまわし蹴りが見舞っていた。
源心の体が毬（まり）のようにとんで、部屋の隅の柱にはげしくぶつかった。
「源心、甲賀の棟梁の妻をけがした罰だ。もうのがれられまい、ゆるされまい！」
闇の中からわいた声はたしかに不動丸のものだ。が、姿は見えなかった。眉間を割られた衝撃で、夜目がきかなくなっていた。脳震盪（のうしんとう）をおこし意識もおぼろだ。
「おのれっ、不動丸、勝負をつけてやる！」
源心は盲滅法あばれながらわめいた。
「もうここらが勝負どきだろう。さもなくば伊賀者におくれをとる」
不動丸の声がふたたびわいた。
「不動丸のおもうようにはさせぬ。毘沙門天の称号はお前にはわたさぬぞ。おれがお前と半蔵をたおして、甲賀毘沙門天となるのだ」
「勝負！」
一声さけんで、不動丸は忍び刀でするどく斬りこんだ。
源心が体勢をくずしながらも、なんとか忍び刀でうけとめた。
「やあっ」

不動丸は再度勝負をかけて顔面へ斬りこんだ。
源心の忍び刀はもはやそれをうけ止める余裕がなかった。
「うぬ！」
源心はかろうじて左腕でうけ止めた。とおもったが、義手はおもんの腹上から蹴とばされたとき、二の腕からはずれていた。
忍び刀が無防備な源心の顔面を真二つに分断した。
源心の体はたまらず背後にたおれ、二度とおきあがらなかった。
「さみだれの長次とおぼしき者を討ちとりました」
そこに金剛がのっそりと入ってきた。

二代目毘沙門天

一

江戸は初冬のうらさびしさだ。

野の草は枯れ、木々は落葉し、田畑はとり入れのおわった荒涼たる風景である。日脚(ひあし)ははやくなり、とくに午後の日はふと気づくと、もう日没をむかえているあわただしさだ。

不動丸は将監(しょうげん)橋をわたって増上寺の門前にかかったころから、背後に人の視線を意識しはじめた。ふだんでも増上寺の門前は人通りがおおい。その上、今はお十夜(じゅうや)のさなかであるから、参詣人がふだんよりもおおいのである。江戸は慶長から元和、寛永をむかえて、人口はおおいにふえていた。江戸城の拡大とともに城下町がひろがり、武家屋敷がふえ、それとともに町人や百姓の数も年々増加している。お十夜に浄土宗寺院を参詣する善男善女の数もおおいのである。

不動丸はうしろからくる通行人にまじって自分を尾行する者がいるのを感じた。不動丸は尾行することにもされることにも慣れているので、尾行者の視線をすぐに感じわけることができるのだ。

こころみに、道筋をひとつまがると、その視線もすこしはなれてついてきた。

(ちいっ、うるさいやつめ)

肚(はら)のうちで舌打ちをして、元の道筋にもどると、やはりその視線の主ももどってきた。

不動丸は思案をめぐらしてみたが、こころあたりはなかった。ないとはいえ、自分の身状(みじょう)をかんがえれば、いつ人に尾行されたとしてもいっこう不思議はないのである。

前方の路上に茶店の縁台がでていたので、不動丸は無造作に腰をおろした。そして後からくる通行人たちを悠々とながめた。

おおくの者たちが何事もなく、不動丸の前をとおりすぎていった。

それらの後から、おカッパ頭をした六、七歳のよごれた身なりの童子が縁台の前まできて、行こうかもどろうか進退に窮してしまった。

「坊、なにか用事か」

不動丸は団子を一皿たのんでから、その童子にいった。尾行者がおもいがけぬ童子だったので、すぐにおもいあたらなかったのだ。

「手紙をたのまれたんだ。受けとっておくれよ」

童子は一瞬ためらったが、すぐにおもいなおしたかのように手にした封書をさしだした。

「誰かにたのまれたんだな」

不動丸がきくと、童子はうなずいて、もう片方の手ににぎっていたいくつかの穴あき銭を見せた。

「通りがかりの小父(おじ)さんにたのまれたんだ」

「坊の知らない人だな」

というと、童子はうなずいた。

不動丸は封書を受けとり、はこばれてきた団子の皿を童子にあたえ、自分は茶をのんだ。
「ありがとう、じゃあ、小父ちゃんわたしたよ」
童子は皿のうえの串団子だけとって、駆けだすようにその場を去った。
不動丸は封を切って、手紙をひらいた。

甲賀大黒天の百日法要を小石川三宝院において十月二十九日、酉の刻よりおこなふので、来会をもとむ。右相ねがひ候。

不動丸どの

寿の三郎
白浜の権三

文面を読むなり、不動丸はそれをまるめて袂の中におとした。
この七月渋谷村の屋敷におもんをおそった源心を不動丸が討ちはたしてから、はやくも百ケ日をむかえようとしていた。
百日法要にことよせて、源心の手下の寿の三郎と白浜の権三が仇討ちをしようというのだ。
名目にせよ、法要にまねかれたのなら、ことわるわけにはいかぬ。
(また三宝院で血がながされる)
そうおもうと不動丸のこころは滅入った。
その当日。
夕刻がちかづいたころ、不動丸は三宝院へむかった。
小石川伝通院の五重塔が、夕闇のなかに姿を没しかけていた。阿弥陀堂の甍も夕闇と判別がつきにくくなっていた。伝通院の広大な境内もほとんど人影がない。
不動丸は阿弥陀堂の裏から山林をぬけて、背後の廃寺の境内へ入っていった。ここがかつての三宝院である。

本堂、方丈、庫裡、鐘楼、山門などなかば朽ちかけた伽藍がのこっている。さかんだったころをしのばせるが、今は人間のにおいがまったくしない場所になっている。夏のころは境内に樹木がしげり、草がのび、地面にシダ類が這っていたが、今はそれすらも末枯れていた。
不動丸はその参道をすすんでいった。
かつてここは源心一味の巣窟であった。今も源心の輩下たちが巣食っていることは疑いない。いつ、どこから敵がとびだしてくるかわからなかった。
本堂の横手に方丈がある。不動丸は方丈へあるいた。
不動丸は方丈の扉をあけた。かすかに線香のにおいがした。
仏法によれば、死者の霊は四十九日までその家の棟下にとどまり、五十日めから黄泉路へ旅立ち、百ケ日めに極楽の門にいたるとされている。百日法要は、のこされた家族や知己、縁者などが故人の成仏をいわっておこなうものである。
耳をすますと、方丈の奥の間から読経するひくい声がきこえてきた。
不動丸は読経のする方へすすんだ。前方に燭台があり、闇の中に明りをはなっている。
不動丸は奥の間へ入った。簡素ながらも、祭壇がかざられ、灯明があがっている。そのそばに、

甲賀大黒天源心之霊

としたためた位牌が立てておかれ、線香の煙がたちのぼっている。
だが、部屋のなかは無人である。先ほど耳にした読経の声もきこえなくなった。

本来、忍者に法要は不要である。現世で業をかさねた忍者が極楽の門にいたって仏になるとはかんがえられぬことである。忍者はそれをもとめてもいない。かつて忍者が百日法要をおこなったという話をきいたことがない。

不動丸は位牌の前にすわり、線香をたてた。

無人の法要のなかで、不動丸はただ一人合掌した。自分のために命をおとした忍者が現世においてつみかさねた業の数々をしずかにおもいおこした。

「観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄、舎利子、色不異空、空不異色……」

不動丸は自分がたおした忍者のために、小声で般若心経をとなえた。となえながら忍者たちの攻撃をしずかに待った。

敵とはいえ、根は同根の甲賀者である。大黒天源心がよこしまな野心をいだき、不逞の行為にはしったがために、甲賀者同士で相たたかう羽目となった。その怨念を手下がひきついで、さらなる怨念を生もうとしている。

攻撃はなかなかおこなわれなかった。今や方丈の奥の間には人の気配もない。

般若心経をとなえおわっても、変化はなにもおこらなかった。

このときふと不動丸のこころがうごいた。

(もしかすると……)

寿の三郎や白浜の権三は本心から源心の百日法要をいとなむ気持でいるのかもしれぬ。仇討ちの気持ではなかったのかもしれぬ、と不動丸のこころに微妙な変化が生じた。

かなりの時間が経過し、不動丸は合掌をおえた。

が、待てども、寿や権三は姿をあらわさぬ。

不動丸は位牌に一礼して、立ちあがった。そして奥の間を後にした。

さらに方丈の入口へむかった。

扉をあけて、外へでた。

その瞬間、黒いおおきな影が、方丈の屋上から落下してきた。それも、一つや二つではなかった。いくつもの影がほとんど同時に落ちてきた。しかも彼等は全員、抜き身の忍び刀をかざしていた。

不動丸は一度上をあおぐなり、懐中から、ぱっと上空へ砂をまくように隠し武器を投じた。

それは鉄の撒き菱である。こういう時にそなえて懐中に所持していた。撒き菱は空中をとび、するどくとがった先端が甲賀者たちの顔や喉、首筋などをおそった。

本来、撒き菱は逃走の際に敵の追跡を断つために路上に撒くものである。それが飛び道具となって、甲賀者たちを攻撃した。

さらに、二度、三度と不動丸は撒き菱を投じた。

その隙をかいくぐって、忍び刀が不動丸をおそってきた。

「大黒天の仇っ」

「不動丸よ、覚悟しろ！」

「不動丸の首を大黒天の法要にそなえるのだっ」

甲賀者たちはおめきながら、果敢に攻めてきた。寿の三郎、白浜の権三、そのほか源心の手下たちだ。

「源心の法要とは見あげた心根だが、忍者に菩提心がおこったときはもう負けたもおなじだ」

不動丸は一喝して、相手の忍び刀をうばいとるなり、それを一閃した。

「あっ」
みじかくさけんで、甲賀者はおのれの耳をおさえた。一瞬はやく、甲賀者の耳は空へとんでいた。
かえす刀で不動丸はもう一度一閃した。
「ああっ」
甲賀者がまた悲鳴をあげた。もう片方の耳もそぎはなされて、地上におちた。
「お前が寿の三郎だな」
不動丸は両耳をうしなって呆然としている男へいった。
寿の三郎はかつて不動丸の蹴りを顔にうけて、顎がくだけた過去があるのだ。
不動丸は、つつ……と地上をはしり、今度はいちばん端にいた男にむかって、忍び刀をあびせた。
相手もすかさず反撃してきた。
しかし不動丸の攻撃のほうが一瞬はやかった。
「うっ」
声が抜けるような叫びをもらして、甲賀者は立ち往生した。その顔がなんとも奇異にうつって見えた。顔の中央の鼻がそげてなくなっていた。
「あと十年修業してからかかってこい」
いい捨てるや、不動丸は忍び刀を自分の膝に打ちつけた。
鋼の折れる音がして、刀身は真っ二つになった。
不動丸はそれをのこる面々の前へ投げ捨てて、後も見ずに三宝院の境内を後にした。
初冬の宵に照る月が、不動丸の後姿を照らしていた。

二

江戸城下に筑波おろしの空っ風が吹きすさんでいる。
関東平野にはこれといった山もないので、遠く筑波山から吹きおろす北風をさえぎるものがない。
北風が吹きだすころとなると、江戸の空は砂埃や赤土で曇ってしまう。
江戸城下はいまだ建設の途上にあるので、随所で建築工事がおこなわれており、槌音の鳴りやむときがない。建築資材をはこぶ車力の往来も絶え間がない。
江戸はこのように、砂埃と喧騒の町である。開府いらい、埃っぽさと騒々しさはかわらない。
「ええ、燗酒（かんざけ）、かんざけ……」
城下大名小路を屋台の燗酒売りがながしていく。
屋台をひくのは、四十代前半くらいの男である。
大名小路に屋台の燗酒売りがよくくるのは、大名屋敷の足軽、若党、中間、小者たちが体をあたために飛びこんでくるからである。彼等は屋台で燗酒を二、三本ひっかけては、また屋敷にもどっていく。
燗酒の屋台は道三橋をわたって、ゆっくりと大炊橋（おおいのかみばし）（のちの神田橋）のほうへむかった。大炊橋の橋詰には大老土井大炊頭利勝の屋敷がある。それが橋の名の由来である。
由来の主土井利勝は、家康、秀忠、家光三代にわたる幕府きっての功臣ながら、齢（よわい）すでに七十歳になんなんとしている。
『天下とともに利勝をゆずる』

家康が将軍位を秀忠にゆずったとき、そういったとつたえられる逸話が、幕府における土井利勝の重要性を物語っている。

秀忠が天下を家光にゆずったとき、何といったか知らないが、家光の時代になってから、いっそう利勝の重要性は増した。文字どおり幕府の重鎮となって、若い家光の政権をささえてきた。

その利勝が、この冬いらい、風邪で寝こんで、このところ登城していなかった。

「大炊ももう年だから、屋敷でゆっくりと静養いたせ」

家光は利勝にそういったとつたえられる。

燗酒の屋台を追いぬいて、黒塗りの大名の乗物が供をしたがえて大炊橋のほうへすすんでいった。

このところ、利勝を見舞う大名らの数が日に十人以上にのぼった。大名ばかりでなく、有力旗本や大奥の老女、幕府出入りの御用商人まで一日に何人も利勝を見舞っている。

大炊橋の袂までいくと、大炊邸に見舞いにきた大名などの供の者たちが大勢主人を待って、日溜りで日向ぼっこをしていた。その中から二、三人が屋台にやってきた。

「いいところにきてくれたな。熱いやつをたのむ。体が冷えきっちまった」

供の足軽、中間ふうの者たちはいった。

「へい、このところ、このあたりでよい稼ぎをさせてもらっています」

そういった屋台の主人は、鷲尾右源太という伊賀組与力で、服部半蔵の片腕である。かつてはおなじく伊賀組与力の鵜飼三十郎と二人で半蔵の両腕と呼ばれていたが、三十郎が不動丸にころされてからというもの、右源太は文字通りの片腕になってしまった。

「ご大老は風邪とはいえ、もうお年であるからご容態に安心はできぬ。それでみなお見舞いにきているのだ。おなおりになるまで、よい稼ぎになるだろう」

足軽はそんなことをいって燗酒をうまそうに飲んだ。

「ちかごろ、ご大老のご病気以外に、世上にたいしたうごきや騒ぎもありません。世の中がだいぶおさまったのでしょうか」

右源太はつぶやくようにいった。

一昨年、島原の乱がしずまってからというもの、昨年、江戸城に火災がおこった以外に大事件はおこっていない。家光の治世はさだまったといってもいい。世は一応、平穏つづきである。世に職をうしなった浪人がみち、不穏なうごきがないでもないが、それは今や磐石のようにさだまった幕府権力から見れば、なにほどのこともなかった。

それでも半蔵輩下の伊賀者たちは、世のささいなうごきにも注意していなければならなかった。一見平穏に見える世相の薄皮一枚下にどんな危険の芽が胚胎しているかわからないのだ。

半蔵輩下の伊賀者たちは、日に何人となく城下へでていき、おもいおもいの方法で世上のうごきや不穏な者たちへの探索をつづけている。

右源太は大炊橋の前をとおって、常盤橋のほうへむかった。

常盤橋の橋詰の日溜りにも、日向ぼっこする人影が見えた。その者たちは蓆をかぶったり、たずさえている。彼等は日溜りで横着に日向ぼっこをしながら、物乞いをしている。通行人に物を乞うと、ときには奇特な者が穴あき銭などを投げていってくれる。

屋台が橋詰にちかづくと、乞食が二人立ちあがった。その二人は屋台にちかづいてきた。

「親父、酒をくれ」

「あついのをたのむ」

二人はいっぱしの言葉をかけてきた。

「へい」
こたえたものの、右源太は腑におちぬ顔を見せた。乞食が屋台酒を飲んでわるいことはないが、あまり例のないことだからだ。
「心配するな、銭ならある」
右源太の意中を察して、乞食の一人が、袂のなかから穴あき銭をつかんで見せた。
右源太はおもいなおして、燗酒を二人前、乞食たちにだした。
食いつめた浪人たちが乞食に身をおとすこともある。建築現場などで日傭取りとしてはたらく手立もあるが、なまけ者は乞食に身をおとしたほうが世過ぎが安楽なのである。右源太はそういう手合かと想像した。
二人はうまそうに酒を飲みはじめた。ちびちびやるのかとおもったら、そうではなかった。ぐい、ぐいと飲んでいった。
「親父、もう一つ」
しばらくたって乞食の一人がいった。
「へい、もう一丁」
右源太は今度は小気味よく応じて、もう一本ずつだした。
「親父、大炊橋のほうからきたな。土井大炊頭さまのご様子はどうなんだ」
乞食はおもいがけぬことをいった。身はおとしても、前歴からして世のうごきには無頓着でいられぬのだろう。
「もうお年だから、風邪とはいっても、安心はできぬそうですよ」
右源太はあたりさわりのない返事をした。

「将軍さまがお見舞いにでかけてくるという噂もある。なんといっても、権勢第一のお方でいらっしゃるからな」
ついで乞食はそういった。
「左様ですか、将軍さまが……。もっとも、ご大老は将軍の若いころのお傅役でしたから」
右源太はとっさにこたえた。乞食が将軍のお見舞いのことまで知っていようとはおもっていなかった。
「そうだ、土井さまは将軍の傅役だった。今でも幕府の屋台骨だからな」
乞食はそういい、懐から酒手をとりだした。
そのとき、右源太は穴あき銭のなかに小粒や一朱銀がまじっているのを目ざとく見つけた。

三

「ええ、燗酒、ええ燗酒……」
声をたてながら右源太はさらに屋台をながしていった。
常盤橋から銭かめ橋一帯も大名小路である。井伊掃部頭、生駒壱岐守、藤堂大学、松平肥前守などの屋敷が塀を接し合っている。
常盤橋からまっすぐ大手門のほうへむかった燗酒の屋台が、井伊掃部頭の屋敷を左へまがった。その左手の先には道三橋がある。
ところが、まがったとたんに、燗酒の屋台が掻き消したようになくなった。あたりは大名屋敷ばかりで、そのほかにはなにもない。したがって、かくれるところも、屋台をかくす場所もない。もしこ

の場を見ていた者があったとしたら、その不思議さに呆然となっただろう。

「ええ、蕎麦、ええ、そば……」

しばらくたったころ、井伊家の屋敷をまがって常盤橋のほうにむかってくる一台の蕎麦の屋台があった。

屋台をひいているのは、腰のややまがりかけた六十代の年寄である。

江戸城下をながしてあるく屋台は燗酒屋だけとはかぎらない。そば屋もあれば、おでん屋、焼芋屋もある。そば屋の屋台が大名小路をながしてあるいていたとしても、いっこう不思議はないのだ。

しぶい声で屋台をながして、老人は常盤橋のほうにちかづいた。

橋詰の日溜りにくだんの乞食が二人寝そべっているのが見えた。

そのうちに乞食たちはむっくりとおきあがった。そして江戸城の濠の前に立ち、ゆっくりと大炊橋のほうへむかった。

蓬髪にボロをまとい、草鞋をひっかけた乞食二人が濠ぞいの道をのんびりとあるきつづけた。

大炊橋の橋詰のところには、相かわらず利勝を見舞いにきた大名などの供があちこちの日溜りで主人のあらわれるのを待っていた。

乞食たちはその前をとおりすぎ、利勝邸の塀のまわりをまわって大手濠へちかづいた。

ふかい濠のむこうは江戸城内である。濠ぞいに左へむかえば、江戸城の表門、大手門にいたる。

乞食二人は、晴れているとはいえ砂埃や赤土でくもりがちな空の下を漫歩するように大手門へむかった。

大手門外の濠端にたつ下馬札が見えてきた。ここはいわゆる大下馬である。江戸城に登城する諸大名はいずれも下馬札の前で馬をおり、ここから供の人数を減らし、規定の人数以外は腰掛けにかけて

待つのである。大下馬ちかくの腰掛けにかけて待つ供侍たちの姿が大勢見える。これはふだんにかわらぬ大手門の風景である。

乞食たちはそ知らぬ顔で、利勝邸から大手門にいたる歩数をかぞえていた。さらに大手門を見物するふうをよそおって、二人は大手門の警備をじっくりとながめた。

大手六門と呼ばれる中雀門、中之門、大手三之門、大手門、内桜田門、西丸大手門は警備厳重で知られているが、とりわけ大手門がもっともきびしい警備を敷いている。

大手門の警備は十万石以上の譜代大名が受け持っている。

（鉄砲三十、弓十、長柄槍五十、持筒二、持弓二……）

乞食二人はしばらくのあいだで、大手門の警備の実体を見てたしかめた。予想にたがわぬ厳重な警備であった。

大手門の左右十三丁にわたる石塁と門の桝形石垣は江戸城のほかとくらべてもきわだつほどいかめしくつくられている。これを工事したのは伊達政宗であり、富裕をほこっていた伊達家はこの工事のために台所がかたむいたといわれている。

乞食たちは存分に大手門の様子をながめてから、和田倉門のほうへ立ち去っていった。

その乞食たちが去っていく方向へ、くだんのそばの屋台が後からついていった。

屋台の主人は六十代に見える年寄だが、それは右源太が変装した姿である。さいぜん、井伊邸をまがった先で、そばの屋台をひく伊賀者笠置の雉子丸と燗酒の屋台を交換していたのであった。変装は白髪まじりの髭をつけ、口に綿をふくんで、顔に皺を入れ、着物を裏返して着れば、たちまち中年の燗酒売りから年老いたそば屋にかわった。

右源太は乞食たちが大炊橋の利勝邸と大手門の様子を探索するのをたしかめた上、さらに乞食たち

の尾行をつづけていった。

五日後の昼下り、くだんの乞食が二人、大手門をのぞむ大手濠のちかくに姿をあらわした。蓆を巻いて手に持ち、濠端の柳の木の根方に無造作に体を横たえた。

大手濠は桔梗濠と接しており、その二つの濠を分けているのが大手門である。大手門の広場の腰掛けには、今日も大名の供の者たちが大勢主人の下城を待ってひかえている。長柄槍を持った足軽や馬廻りの徒士、供目付、小姓たちなどである。主人について大手門の内へ入れるのは、供頭、草履取、傘持ちだけである。

乞食たちはとくに用事はないと見えて、今日も日向ぼっこをむさぼりながら時をすごしていた。ときどき、大手門や腰掛けの方をさりげなくうかがうばかりで、大欠伸をしたり、日溜りをもとめておりてくる寒雀を目で追ったりしていた。

時がたつうちに、下城してくる大名もあり、また登城してくる者もあって、腰掛けに待つ面々の顔ぶれもだいぶかわっていった。これはいつにかわらぬ大手門前の風景である。主人が朝登城して夕方の下城となれば、供の者たちはほぼ一日、腰掛けで待つことになる。

この日も、かなりつよい北風が吹いていた。大手門前の広場にも、時折、砂埃が舞いたっている。乞食たちは砂埃などいっこう気にすることもない。平然と顔をさらして、あたりをながめている。

やがて、未の刻（午後二時）がちかくなった。

そのとき、大手門のほうで、かすかなざわめきがおこった。

十数人の一行がにわかに城内からでてきた。大名の下城かとおもわれたが、一行の先頭ちかくをくる主人らしき者が、なんと馬上姿である。

大手門の大下馬を乗馬したまま通行できる人物といえば、天下ひろしといえども唯一人しかいない。すなわち、江戸城の主、将軍だけだ。

馬上颯爽たる馬乗袴に白小袖の人物は、遠目ながらもまだ三十代の凛然たる姿である。その前後、左右には側役、小姓、さらに少数とはいえ供の侍たちがついている。

（将軍家光――）

誰しもがそうおもった。家光の微行の外出はそうめずらしいことではなかった。家光は少年のころから、松平信綱、阿部忠秋、堀田正盛、阿部重次、三浦正次、太田資宗などの気に入りの小姓たちをつれてよく城下を徘徊したものである。今ではそのかつての小姓たちが老中や若年寄などに任じられ、幕政の中枢にすわりはじめた。それでも今でも家光は側役、小姓たちをつれて遠乗りにでかけたり、気楽に昵懇の大名の屋敷をおとずれたりしているのである。

家光が外出するときは、さすがに門の警備の者たちも緊張する。だが、家光は警備の侍たちを尻目に大抵は馬であっという間に城をでてしまう。

今回もそうである。大手門の警備がざわめきたったときには、もう後も見ずに門を出ていた。大手濠と桔梗濠とのあいだを一気にすすみ、大手濠ぞいに左へすすんだ。

すなわち、乞食二人が寝そべっている濠端からわずか十数間先を将軍一行はとおっていった。乞食たちはさすがにこのときは、目をこらすようにして将軍の通過を見まもった。

将軍一行は酒井雅楽頭の屋敷の前をとおって、土井利勝の屋敷の方向へむかった。将軍が今日、利勝を病気見舞いにいくことは、一部の者たちには知らされていた。

乞食の一人がそのとき、すっと立ちあがった。そして片手を高くあげて振った。それがまさに将軍襲撃の合図であった。

合図に呼応したのは、広場の腰掛けで待っていた約十人の男たちである。
「それっ」
「おお！」
「時は今だっ、かかれ！」
雄叫びをあげて、男たちは槍や太刀などの得物をとっていっせいに将軍一行を追って殺到していった。
その先頭にたつ荒武者こそは、かつての加藤忠広の側役五十嵐兵部である。ほかの面々はいずれも旧冬、小伝馬町牢屋敷を脱獄して行方不明になっていた加藤家の旧臣たちである。襲撃の合図をおくった乞食の二人も、彼等の仲間である。
加藤家の旧臣たちはこの日を待って、約一年人目をのがれながらすごしてきたのだ。
「加藤家旧臣、推参っ」
「旧主の恨みっ、将軍、覚悟！」
北風の吹く中、砂埃、土煙をあげて、加藤家遺臣たちは将軍一行を追った。その中には、むろん、二人の乞食もくわわっている。
大手門警備の面々はすぐさまそのうちの約半数が加藤家遺臣たちを追ってはしった。全員が追跡に立ちあがらなかったのは、大手門警固という本来の役目があるからだ。
将軍一行の対応も迅速であった。踏みとどまって賊をむかえ討つ体勢ははじめからとらなかった。瞬時のうちに、土井利勝邸へむかって全速で駆けだした。馬上の家光を先頭にして、全員、後も振りむかずに一散にはしった。
「将軍が逃げたぞっ」

「逃がすなっ、将軍を追え！　追いつめろ」
加藤家の旧臣たちはここを先途と追いかけた。今日もこれまで約半日、大手門の腰掛けにかけて、勢いがありあまっていた。しかも将軍襲撃は年来にわたる夢であった。その夢の実現にむかって、面々は必死で追いまくった。勢いにまかせて猛然と追いかけた。
距離はしだいにつまってきた。
将軍一行はひたすら利勝邸へ逃げこむ算段があきらかだ。
土井利勝邸の塀が大炊橋の橋詰に見えている。
利勝邸の中へ逃げこまれたら、もう勝負があやうくなる。加藤家遺臣たちは懸命に追った。
そのとき、利勝邸のちかくで、異変がおこった。橋詰にたむろしていた見舞客の供たちがいっせいに立ちあがり、加藤家の遺臣たちに迎撃の体勢を整然ととったのである。
「それっ、迎え討て！」
指揮をとるのは、橋詰で燗酒の屋台をだしていた鷲尾右源太である。
右源太の指揮で橋詰からにわかに攻撃の体勢をとったのは、見舞客の供に扮していた伊賀者たちである。笠置の雉子丸、長津田の頬白などの姿が見える。
「全員、取り押さえよっ、ころしてもかまわぬ」
右源太はそう命じて、みずから懐中の八方手裏剣をとって、追ってくる加藤家遺臣たちに投じた。
江戸城のすぐちかくであるから、鉄砲などはつかえないのだ。
シュッ
するどく大気を切って飛んだ矢車形の手裏剣が先頭ちかくを疾ってくる男の喉笛にふかく突き刺さった。

ヒュッ
喉笛が虚空に鳴って、一筋の血を吹きあげ、その男は前にたおれた。
シュッ
右源太はふたたび八方手裏剣を投じた。
これもつぎの男の眉間に命中し、男は血を噴いてたおれた。
雉子丸も頬白も八方手裏剣を投じた。ほかの伊賀者たちも投じた。距離のはなれたところでの戦いには、飛道具にまさる武器はない。しかも弓や半弓よりも手裏剣のほうが手軽であり、実戦に役だつ。
加藤家の遺臣たちはとつぜんあらわれた敵に、完全に機先を制せられた。むかえ討ってくる敵はあたかも伏兵のように、加藤家の遺臣たちの襲撃を予期し、それにそなえていたかのような感があったからだ。勇敢にして、精強。彼等はまったく戦慣れしており、手裏剣のつかい方にも習熟していた。
五十嵐兵部は追跡をあきらめ、踏み止どまって、太刀を抜き、八方手裏剣をつぎつぎに打ちおとしていった。
しかし、将軍襲撃計画は完全にはばまれた。こうした襲撃計画は一気呵成に目的をとげねばならない。一度中断したり、頓挫したら、まず成功はおぼつかぬ。
「ひくな、ひくなっ、踏みとどまって、将軍を討て！」
兵部は右に左に阿修羅のように太刀をふるいながら絶叫した。
兵部の左右で同志たちが八方手裏剣の犠牲になってたおれていった。
「亡き殿の恨み、晴らすは今ぞ！　明日はなきものとおもえっ」
兵部は絶叫をつづけ、手裏剣を打ちおとしつづけた。が、彼の肩や太腿、二の腕には手裏剣が突き刺さっていた。

前面の敵がぐんぐん距離をつめてきた。
遺臣たちはつぎつぎにたおれ、兵部の左右には数人の同志しかのこっていなかった。
そのとき、背後で喊声があがった。大手門警備の面々が大挙して押し寄せてきたのだ。
兵部たちは前後から敵襲をうけることになった。すでに敗北は歴然としていた。
「ひくな、ひくなっ、討ち死にせよ！」
兵部もついにあきらめざるを得なくなった。
必死でさけんで、前面の敵の中へ突入していった。

四

翌々日の朝。
日傭取り姿の男が二人、大手濠の柳の前にきて、大手門をのぞんだ。江戸は建築工事がおおく、日傭取りや車力がおおいのだ。
大手門はいつにかわらず、十万石以上の譜代大名に警備され、腰掛けには主人待ちの供の侍の姿が見える。一昨日、将軍襲撃という予想外な事件が突発し、このあたりはおおいにさわぎたったが、今日はもういつもとかわらぬ平静さをとりもどしていた。これは素直に幕府政権の安定と充実とかんがえられた。主謀者の五十嵐兵部をはじめとする加藤家遺臣たちはことごとく討ちとられるか、召し捕られた。
それでもさすがに昨日は、大手門から大手濠、土井大炊邸にいたる道筋には綱が張られ、検視の役人たちが大勢出動していて、日傭取りや車力などがちかづくことはできなかった。濠端で日向ぼっこ

をしていた乞食にも一味の者がまぎれこんでいたことが証言されて、附近一帯に聞きこみなどの調査がおこなわれた。

「五十嵐どのら、趣意を達することがついにできず、さぞ無念であったろう」

大手門をながめてひくい声でつぶやいたのは、日傭取り姿の不動丸である。

「将軍一行を一時はあわやというところまで追いこんだのはさすがだ。五十嵐どのだけのことはある。しかしそれをはばんだのは、やはり伊賀者たちだったようだ」

こたえた日傭取りは金剛である。

二人は生前の友誼から兵部らの一挙を惜しみ、無念のおもいにかられた。

「五十嵐どのがたてた戦略はじつに見事だった。大手門腰掛けに兵を伏せた戦法はさすがというべきだ。将軍を大手門にかえらせず、城外に追いたてた戦法もすぐれている。伊賀者たちが大炊橋に詰めていなかったら、将軍の首は討ちとられていただろう」

不動丸は、敗れたとはいえ、将軍一行を危機一髪の淵に追いこんだ兵部の兵の駆け引きを称賛した。

「かえすがえすも、憎きは伊賀者。おそらく五十嵐どのらの一挙にうすうす気づいておったのだろう。それでなくては、たまたま大炊橋に居合わせることなどできるはずもない」

金剛は今更ながら、歯がみするような悔しさを見せた。

不動丸と金剛は、一昨日の事件がおこった場所をたどり、大手濠から利勝邸、さらに大炊橋橋詰まであるいていった。一昨日の凄絶な修羅場を想像させる流血や斬撃の跡はきれいに洗いおとされ、後始末されていた。今日はもう何事もない濠端や大名小路にもどっている。その整然たる有様に不動丸と金剛は呆気にとられるおもいをいだいた。

「五十嵐どの、後はわれらにおまかせあれ。伊賀者と将軍へのけりはかならずつけるつもりだ」

不動丸は瞼のうちにえがいた兵部へ胸のうちで合掌し、くやみをかたった。

無念そうな兵部の顔が、何事か不動丸へかたりかけてきた。

（不動丸どの、無念だ。今一歩のところで将軍を討ちもらした。伊賀者らの出現がなければ大望をとげたものを……）

髭だらけの兵部の顔がそううったえかけているようだった。

「五十嵐どののご無念は想像にあまりある。そのご無念はかならず、わたしがかわって晴らす。やすらかにおねむりあれ」

不動丸は口のうちでつぶやいた。

「服部半蔵との勝負ももう後へは持ちこせぬ」

金剛はそういって、口をきびしくむすんだ。

「相手もそのつもりだろう。いつまでも勝負をのばすわけにはいかぬ」

不動丸は今その気になったのではなかった。この七月に甲賀大黒天をたおし、不動丸は事実上、甲賀の頭領にちかい立場にたっていた。甲賀毘沙門天の地位にもっともちかいところに不動丸は立っている。立場のうえからも、甲賀と伊賀との経緯のうえからも、半蔵との勝負は避けられぬものだった。大黒天の死によって、自分以外に半蔵と勝負を決する者がいなくなった。

不動丸は半蔵との決戦がちかづいたことを自覚していた。五十嵐兵部がその道をひらいてくれたような気もした。

徳川三代にして、世の中はもう確固としてさだまった。ゆるぎない世の中ができあがったことを不動丸も実感していた。家光の弟に駿河大納言忠長という人物がいたことすら、世上の人々はわすれかけている。その忠長が家光によって詰腹を切らされたことなどすでに忘却のかなたに消えている。忠

長のほかにも家光の従兄弟にあたる越前宰相松平忠直（ただなお）が豊後に配流され、はやくは家光の叔父越後宰相松平忠輝（ただてる）が改易されている。

一つの政権が確立されるには、その一族内部にさえ数おおくの犠牲者がでなければおさまらないのが、世の実相というものらしい。二代将軍の時世において、兄の家光には伊賀者服部半蔵がつき、弟忠長に甲賀甲沙門天道順がついた。これが、伊賀者と甲賀者の運命の岐（わか）れ道になった。

家光と忠長とが将軍位をあらそったために、伊賀者と甲賀者は不倶戴天の立場となった。ばかりでなく、道順のながれをくむ甲賀一党は後々まで反逆者の烙印をおされたのである。

不動丸は忠長の遺児国松がたまらなくいとおしくなった。本人の意思にかかわりなく、国松はこの政権がつづくかぎり、日本の国では生きられなくなった。他国へでる道も鎖国によってふさがれてしまった。幼年期をすごしたマカオへ逃げることすらできぬ身となっているのだ。

（国松さまをなんといたそう）

鎖国の日本に帰国していらいずっとつづけていた自問自答にたいする答は今もってなかった。

身は将軍の孫に生まれながら、この国において生きていく場所さえなく、命までねらわれている国松がいとおしくてならなかった。今のところは、父の忠長の叔父にあたり、生前友誼のあった紀州大納言頼宣の保護のもとにあるが、これとても十全の保障ではなかった。頼宣の意中は、不動丸自身にとっても奥底までは読みきれなかった。今後どう変化していくかもわからぬ。徳川三代にしてすっかり安定した幕府にたいして、頼宣がどう対処していくか、異心をいだき、世を転覆させるだけの実力と気魄があるかどうか、不動丸にも予想することはできなかった。

（おいたわしや、国松さま）

不動丸はおさない主人を今後どのようにしてまもっていくか、その方途になやんだ。

（今後をどうなされますか、国松さま？）

不動丸は胸中で問いかけた。

この世で、国松のためにもっともよいという道はないのだ。どの道をえらんだにしても、国松にとってはきびしい茨（いばら）の道である。死が待ちうけているかもしれぬ。

（フドウ、なにを心配いたしておるのだ。おもいなやむはフドウらしくないぞ）

マカオ時代の呼び名でこたえてくる国松のけなげな表情に不動丸は胸のつまるおもいをいだいた。

忠長の自害があってから五年め、鎖国が完成する年に国松をつれて、最後のポルトガル船サンビセンテ号に乗って日本にもどってきたのはまちがった判断だったのかと不動丸は過去をふりかえった。

（フドウ、一度きめたことに後悔するな。いさぎよく生きよ、勇敢に生きよ、というのがフドウのおしえてくれた言葉ではないか）

国松がふたたび瞼のなかにあらわれて不動丸を叱咤した。

「不動丸どの、勝算やいかに？」

このとき金剛がひくい声でつぶやきかけた。

金剛の顔には微塵のまよいも憂いもあらわれていない。半蔵をたおし、将軍家光の首をうばう意気にあふれた顔であった。

「むろん、勝つ。勝算われにあり！」

不動丸は晴ればれとした顔で返事をした。

五

江戸は寒い日々がつづいている。

冬雲雀（ふゆひばり）や冬の鵙（もず）が森や林の上空で声をたてている。

不動丸はふだん国松のいる紀州家中屋敷とおもんのいる渋谷村をいったりきたりしているが、このところは紀州邸に逗留をつづけていた。紀州邸にいるときは、朝はかならず一刻ばかり、国松に武芸の訓練をつける。これはマカオにいたころからずっとつづけている習慣である。

国松はあと半月ばかりで十二歳になる。ここ一、二年で背丈もぐっとのびたが、まだ幼さはぬけぬ。父や母がいなくても、真っすぐにそだった。国松がものごころついていらい自分のそばにいる不動丸だけをたよりにしているのは当然である。

この日、不動丸が国松を相手に太刀打ちや槍の訓練をおえたころ、外出していた金剛がもどってきた。

「不動丸どの、おもんさまがお呼びじゃ。手がすいたら渋谷村に顔を見せてくれと言づけをたのまれた」

金剛は不動丸のかわりに、ちょいちょい渋谷村へおもんの様子をうかがいにでかけていた。

「この半月ばかり、おもんさまに無沙汰をつづけていた。さっそく今日、でかけよう」

不動丸はおもんの用事には見当がつかなかった。五十嵐兵部の最期を噂できいて、少々不安をいだいているのかもしれぬとおもった。

おもんはかくべつ五十嵐兵部と懇意だったわけではないが、兵部は昨年、渋谷村におもんをたずねてきて、道順の位牌をおがんでいった。そのとき毘沙門天の後継のことなど心配してくれた。そんな人物の決起と最期がおもんのこころに動揺をあたえぬはずはないのだった。

この日、昼ごろ不動丸は紀州邸をでて、渋谷へむかった。

冬枯れの、田舎びた風景のなかにおもんと桔梗のすまう屋敷があった。屋敷とはいっても百姓家とほとんどかわらぬたたずまいである。

この家に不動丸の兄、甲賀毘沙門天道順が住んでいたのだ。そうおもうと冬枯れの光景のなかにもほっとするようなこころのぬくもりが感じられた。不動丸にとっても、自分の田舎を感じさせるものがひそんでいた。

屋敷の北側には空っ風よけの藁垣（わらがき）をほどこし、背戸（せど）には年木がつみあげてある。それは不動丸が初冬十月のころこしらえていった冬構えである。

おもんと桔梗は紅襷（べにだすき）に被りものも甲斐甲斐しく、下男を手つだわせて年末の煤払（すすはら）いをやっているところであった。

「丁度よいところにきました」

不動丸はそういってみずからも煤払いを手つだった。

とかくするうちに日が暮れたが、おもんは何もいいださなかった。

不動丸も何も口にすることはなく、一夜が明けた。

翌日、朝のうちに、金剛が姿を見せた。

金剛もおもんに呼び寄せられたようだ。

不動丸はおもんが切りだすのを待った。が、その日午前中もおもんは何もいいださなかった。

不動丸はややしびれを切らしてきた。

（何事か……？）

不動丸は自分なりにおもんの意中を推量してみた。

いくつかの事柄が浮かびあがった。けれども決定的なことはおもいつかなかった。

それで不動丸は自分のほうからききただそうときめた。

そのとき、

「不動丸どの、ここにいらしてくれませぬか」

おもんの声が仏間からきこえた。

不動丸が仏間へ入っていくと、おもんは道順の仏壇の前にすわって、位牌に合掌していた。

不動丸も仏壇の前に膝をそろえてすわった。

「道順が亡くなりましてから、七年がたちました。そのあいだ不動丸どのにはなんとか甲賀者のささえになり、旧主さまの遺児をおまもりとおしていただきました。この後も甲賀者を守りたてていく役目を不動丸どのにおねがいいたさねばなりません。それには空位になっております甲賀毘沙門天の位を不動丸どのについでいただくのが、いちばん適切な道だとかんがえます。そして二代目毘沙門天として、甲賀者をひっぱり、甲賀者の復興を不動丸どのに成してもらいたいのです。今は伊賀がさかえ、甲賀がおとろえている時ですが、ふたたび甲賀の世をつくっていただきたい。これがわたしばかりでなく、亡き道順のねがいです」

おもんはしずかな口調でかたった。

「もとより甲賀のためにはたらき、甲賀のためにたたかうのにはやぶさかではありません。けれども甲賀毘沙門天の位をうけつぐにいたしましても、まだその時期ではないとかんがえます。その前になすべきことがのこっているようにおもいます」

おもんのいう趣旨は大体不動丸のかんがえたとおりだった。

「その前になすべきことというのは、もしや服部半蔵との勝負をいうておるのですか」

おもんは手から数珠をはなさずききかえした。

「亡き毘沙門天は無念ながら半蔵とたたかい、やぶれて甲賀の面目をうしない、伊賀の下風（したかぜ）にあまんじることとなりました。その半蔵との勝負、まだ決着を見ておりません。半蔵をもしたおした暁には、晴れて毘沙門天の位をうけついで、今後甲賀者のたばねとなりましょう。勝負がつく前に毘沙門天を名乗るのはおこがましく、さらに半蔵にやぶれたときは、甲賀毘沙門天が二度までもおなじ半蔵におくれをとったことになります。それ以後の甲賀の復興は完全にのぞみを断たれることとなりましょう」

不動丸は自分のかんがえをうちあけた。これが過不足のない不動丸の本当の気持だ。

「不動丸どのの申されることよくわかります。けれどもわたしのかんがえは少々それとことなります」

おもんは不動丸の眸をひたと見つめていった。

「少々ことなるところは……」

「半蔵は伊賀の頭領、不動丸は甲賀の頭領分です。立場は双方五分五分のはずです。半蔵と毘沙門天とのたたかいにちがいありません。たたかって負ければ毘沙門天が二度半蔵に敗北するとは情ない言葉です。毘沙門天の二代目になろうというお方ならば、敗北はいたさぬはずです。きっと半蔵に勝つはずとおもいます。半蔵におくれをとるような者に、わたしは毘沙門天をついでくれとは申しません」

おもんはきっぱりといいきった。おもんの気持のはげしさが不動丸のこころを搏（う）った。おもんは戦

いにのぞむ気魄について不動丸を叱ったのだ。
その叱言が不動丸の身心につよくひびいた。不動丸はおもんの言葉を自分のうちでふかく受けとめた。おもんの言葉はまちがいではなかった。まさに半蔵とたたかうに際した自分の気持に活を入れてくれるものであった。やはりおもんは毘沙門天道順の女房であった。
不動丸はしばらく自分のこころがさだまるのを待った。
おもんも不動丸の決意を待った。
そのとき襖がひらいて、金剛が仏間に入ってきた。
金剛はだまって不動丸の背後にひかえた。
しずかな時がながれた。
「おもんさまのおっしゃることわかりました」
沈黙をやぶって不動丸はいった。
その瞬間、おもんがかすかに頬笑んだ。
「わかっていただければ、うれしいことです。不動丸どのはもともと道順の後をうけて、甲賀毘沙門天をつぐべきお人でした。この二年ばかりのあいだに、不動丸どのは毘沙門天をつぐべき器と力をお持ちであることを証しました。誰に遠慮いたすこともありません。つぐべき人がつぐだけのことです。覚悟をなさってくださって、ありがとうございました」
おもんのしずかな声が仏間にながれた。
「甲賀毘沙門天をついで、半蔵とたたかい、半蔵をたおすつもりです」
「よくいってくれました。不動丸どのの言葉をきいて、亡き道順もきっと黄泉路でよろこんでくれるでしょう」

「半蔵をたおした暁には、将軍家光の首級をあげて、駿河大納言さまのお恨みをはらします」
その言葉はほとんど無意識のうちに不動丸の口からでた。
「ありがとうございました。そのお言葉、甲賀毘沙門天の言葉としてうけとらせてもらいます」
おもんはそういってから、
「では、亡き毘沙門天のご位牌の前へ」
言葉をあらためて、不動丸を仏壇の正面にすわらせた。
これからは簡略ながらも、毘沙門天継承の儀式だ。金剛は立合人としての陪席である。
「南無阿弥陀仏、ただ今より甲賀不動丸をもって二代目甲賀毘沙門天といたしたく、仏前にてご報告申しあげます。不動丸、甲賀毘沙門天を継承いたしました後は、仏法にしたがいて身と技をおさめ、諸人をよく統率いたして甲賀をおさめることをお誓い申しあげます。もしこれに違背いたしました節は、身はほろび地獄におちるともおうらみ申しあげません。南無阿弥陀仏」
おもんはそうとなえてから、読経をつづけ、つつがなくこれをおえた。
この瞬間、二代目甲賀毘沙門天は誕生したのである。

落日燃ゆ

一

晩春の鐘が七つ（ほぼ午後四時）をつげた。

太陽は芝のお山の西へかたむいている。

増上寺の大門から墨染衣に香染の袈裟をかけ、網代笠をかぶり、草鞋ばきの僧侶たちが十人前後の一団をなし、それが何組も拍子木を打ち鳴らして、念仏をせわしく唱えながら市中へでていった。増上寺の名物ともいうべき七つ坊主である。彼等は夕暮れの点灯時まで江戸市中を足ばやに托鉢してまわるのだ。この修行僧らは誇りたかく、意気さかんで、事あるにのぞんで一歩もゆずらず、相手が武士といえども敵をくじいて帰山するのを誉としていた。

七つ坊主は烏の群れのように江戸市中へ散っていった。

ほどなくして、赤坂御門の坂の上から諏訪坂を墨染、網代笠の一団が駆けるようにくだっていく光景が見えた。これも七つ坊主の一団であった。

諏訪坂は赤坂御門から麹町五丁目にいたるながい坂道である。坂道の右手には旗本屋敷がいくつもならび、左側は紀州家中屋敷である。紀州家の裏は紀尾井坂であり、尾張家と井伊家の中屋敷が坂道をはさんで向かい合っている。おおきな武家屋敷ばかりがたちならんでいるところであるから、夕方ちかいころとなると、人通りはほとんどなくなる。

七つ坊主の一団は拍子木を打ち鳴らし、念仏を唱えながら紀州家の門前に立った。大名屋敷でも七つ坊主には一目おいている。無下に托鉢をことわったりはしない。頭分格の坊主が門番に何事かいうと、一団は門をとおされた。彼等は托鉢が目的で紀州家にきたのではなかった。

待つほどもなく、紀州家の用人田辺喜左衛門が玄関にあらわれた。

「ご用人どの、大納言さまにお目どおりねがいたい」

くだんの頭分格の坊主は網代笠をとって田辺にそういった。有髪、眉目秀麗、凛乎たる由井正雪の顔があらわれた。

「主人頼宣、お待ちいたしております。おあがりくださいませ」

田辺は正雪にたいして丁重にこたえた。

正雪は頼宣の軍学上の師であり、時折頼宣の講学のために紀州家中屋敷をおとずれる。正雪は幕府から疑惑をもたれている軍学者であるため、紀州家にくるときいつも七つ坊主に変装しているのである。正雪にしたがっている坊主たちは門人である。

その門人たちは供の詰所に待たされ、正雪一人が講学の間にみちびかれた。

やがて頼宣があらわれた。頼宣もまた、かつて家光の地位をおびやかした駿河大納言忠長と昵懇であったがために、幕府からつねに疑惑をいだかれてきた人物である。

「本日もご健勝にて、およろこび申しあげます」

師の正雪が丁重な挨拶をのべると、
「そちもつつがなくて何よりじゃ」
頼宣も師の無事をよろこんだ。おたがいにいつ危険や変事に見舞われたとしても不思議ではない立場だ。相似た立場がおたがいに共通感と親近感をもたらしていた。
「幕府の監視が旧冬より一層きびしくなっております。外出にもなにかと気をつかわねばならなくなりました。大納言さまにも同様でございましょう。さぞご窮屈なお暮しをなさっておられることと拝察いたします」
旧冬、五十嵐兵部一党が家光をおそった一件によって、幕府はそれ以降きびしい警戒態勢をしいているのだ。
「なに、ふだんは江戸城での暮しだ。窮屈さには慣れておる」
御三家の上屋敷は江戸城北の丸にあるので、頼宣は年中監視つきの生活といってよい。のびのびとできるのは中屋敷にきているときくらいなのである。
「今後ますます窮屈になられようかと存じあげます」
「いたし方ない。覚悟の上じゃ」
師弟は大胆とも不敵ともいえる言葉と視線をかわした。一方は市井の軍学者、片方は従二位大納言という身分ながら、将軍に疑いの念をいだかれていることにおいてはおなじである。
「公方さまはお疑いぶかきお人柄とうかがいおります。ひとたび疑いをいだきましたるや滅多とお解きになられぬやに推察いたします」
「上様は大納言忠長さまをとことん追いつめなさって、ついに死をたまわったお方じゃ。いったんいだいた疑いはけっして捨てぬ」

「左様ならば、大納言さまも忠長さま同様のご運命をたどられるやもしれません」
三歳年下の正雪は歯に衣きせずにいった。
「まことに左様じゃ。いつ改易のご沙汰がでたとしてもおかしくはない。改易の後には切腹の沙汰がくだるやもしれぬ。しかし、それはそちとて同様じゃ」
頼宣はそういってわらった。頼宣は一方において豪放磊落ではあるが、単にそれのみではない。片方において冷静な分析と的確な判断力をもっている。
「さればでございます」
正雪は頼宣の言葉を待っていたように応じた。
「本日、なにを申しにまいったか。講学のためではなさそうじゃな」
頼宣にはほぼ正雪の心中が読めているようだ。
「軍略軍学におきましては、なによりも戦機を大切にいたします。古来、名将といえども戦機をあやまてば敗亡の身におちいること必定でございます。大納言さまにも戦機を十分おかんがえになっていただきとうございます。改易のご沙汰がくだってからでは手おくれでございます。そうなってからでは手も足もでぬことは忠長さまの例をとればあきらかでございます」
正雪はいよいよ頼宣に最終的な決断をもとめてきているのであった。
「先んじても、機いたらねば敗亡す。正雪の申すこと、よくわかっておる」
頼宣は正雪を制するようにいった。正雪とて大勢の門人を擁する高名な軍学者であるが、身は一介の浪人者である。それにたいする頼宣は身は御三家にして、五十五万石の太守である。軽々しい行動は断じておこなえぬ。いかに〈南海の竜〉と呼ばれる豪毅果断をもってきこえているとはいえ、行動には慎重でなければならぬ。

「さればでございます」
「わかっておる。来月にも絶好の戦機到来すと申したいのであろう」
「左様にございます。絶好、絶妙の戦機でございます。それが来月のうちにやってまいります」
正雪はここぞと力づよくいった。
「たしかに四月はひとつの山じゃ。絶好の戦機となるやもしれぬ」
「四月をもし逃がすといたしますと、明年まで戦機はないものと存じあげます」
「将軍一行は四月十三日に江戸を発し、十七日に日光東照宮に詣ず。そして二十二日か三日、江戸城にもどる。今年も日光東照宮参拝はきまっておる。ことをおこすにはもってこいの好機であろう」
頼宣はつぶやくようにいった。四月十七日は家康の命日である。法要は日光東照宮でおこなわれる。
「江戸城へ討ち入って将軍をたおすことはまず困難と見るべきでございましょう。そういたしますと、日光社参の機会をとらえるのが最上の策とおもわれます」
眼の奥に蒼白い光をやどらせて正雪はいった。
将軍は遠駆けや鷹狩りにもでるが、その場合いずれも目的地や経路が不確定である。家光は目的地や経路がきまっていても、とつじょ気持のおもむくまま変更し、供を右往左往させることがおおいのだ。
「決行いたすならば日光社参をねらうのがいちばんじゃ。目的地も経路もきまっておる。そのほか段取りも手に取るようにわかっている。兵をあげるにはもってこいじゃ」
「ならばご決断くださいましたか」
正雪はひと膝のりだすようにいった。
「しかし将軍の方とて、それなりの警備はつくしておるだろう。簡単にはこぶわけもない。ことをはかるには十分な準備が必要だ。将軍の道中経路も日光街道と日光御成街道の二つがある」

「左様にござります。その両者を仔細に検討いたさねばなりませぬ」
正雪はそういうと、懐中からおもむろに折りたたんだ絵図面をとりだし、頼宣の前にひろげた。一枚は日本橋、千住から日光まで二十三駅の日光街道であり、もう一枚は岩淵、川口、岩槻、幸手をへて日光街道につながる御成街道の絵図面である。双方の絵図面には宿場内の距離や各村、川、渡し、関所、立場、宿場の本陣や脇本陣、休息所などがこまかく書き入れてある。この絵図面を見れば日光街道、御成街道ともに道中の情景まで目に浮かぶようである。
頼宣はその絵図面を手にとって見入った。
頼宣も何度か秀忠や家光の日光社参に随行している。絵図面を見て目をとじれば、将軍襲撃に恰好の場所がすぐにもいくつか浮びあがってくる。そこで兵をおこして将軍一行におそいかかれば、十中八九は逃がしっこないという場所もおもいあたる。頼宣のこころはしきりにうごくが、それでも軽挙はくれぐれもつつしまねばならぬ。十中八九の確率ではまだ兵を挙げる機は熟しているといいがたい。それが大名の戦略戦法というものである。
頼宣はほぼ十全にちかい戦略を胸中思案しはじめた。

二

おぼろな月の光が田舎道をうっすらと照らしている。
不動丸は宵の道を渋谷村へむかっていた。もう幾度となくかよった道であり、暗闇でも道筋をそらんじている。

夜道にむっとするような匂いがたちこめている。麦が黄熟する前の青々とした匂いである。青山あたりをすぎると、まわりは田や畑がおおい。

青麦の匂いから、不動丸は女の柔肌を連想した。白い女の肌が脳裡に浮かんだ。その肌がなやましげに男の愛撫を待っている。

不動丸は旧冬から何度かその肌を抱こうとして、おもいとどまってきた。不動丸がおもいとどまれば、女の肌はいっそう男をもとめてあやしげにもだえる。

おもんとてまだ三十路にいたって間もない体だ。夫をはやくうしなったからとて、女の体はおとろえるものではなかった。おさえればおさえるほど、いっそう女の色香がにじみでてしまう。男にはそんな色香の匂いがたまらない。無性にこころをそそるのである。

不動丸は夜道をあるきながら、何度かおもんのたおやかな裸身を想像した。今夜、その裸身をわがものとするために渋谷村へいそいでいるのだ。

今まで何度かおもんを抱く機会があった。そのたびにおもいとどまってきたのだが、旧冬、不動丸が二代目毘沙門天の位をうけついだときから、おもいとどまるべき理由がうしなわれた。毘沙門天という甲賀の称号におもんは付随しているものとかんがえられた。今は亡き大黒天源心が何度もおもんにいどんだのはおもんへの欲望はむろんとして、毘沙門天への称号に野心があったからだ。

このたび不動丸は毘沙門天の称号をはからずも手に入れた。このうえはおもんをも手に入れてやるのが、人の道にかなうとかんがえた。もう遠慮はいらぬ。なまじいな遠慮はかえって女のこころを傷つけるものだとさとった。

おもんはかつて兄の嫁であったが、今後は不動丸の嫁として生きるべき女なのである。今までおもんを宙ぶらりんにしてきた後悔に不動丸はさいなまれていた。一日もはやく、一刻でもはやくわがも

のにしてやろうと渋谷村へむかっているのだ。

おぼろな月の光の下に、おもんの家構えがぼんやりと見えてきた。あたりには靄がかかっている。

おもんの家へむかって不動丸はいそいだ。

家には灯りがともっている。おもんはまだおきているようだ。不動丸にはなんとなく、その灯りが恋しくおもわれた。自分のかえるべき家がそこにあるような気がした。いまだかつてこんなおもいをいだいた経験は一度もなかった。

勝手知ったる家である。庭先へまわり、母屋の雨戸を一枚くって、あがっていった。

そのとき丁度、灯りが消えた。今しも、おもんは床につこうとしているようだ。つい今しがたまでおもんと桔梗がかたり合っていたような雰囲気が家の中に感じられた。

不動丸はおもんの部屋にちかづいた。

「おもんさま」

襖の外から声をかけた。

「お入りくださいませ」

おもんのしずかな声がかえってきた。

かすかに不動丸の胸がさわいだ。おもんは自分の寝間に不動丸をまねいたのだ。

不動丸は襖をあけた。

寝間の中からふんわりと香の匂いと湯あがりの女の肌の匂いがながれてきた。ほのぐらい有明行灯の明りがともっている。

おもんはいったん床について、今おきあがろうとしていた。

「おもんさま、そのままで」

と、不動丸は制した。
おもんがかすかに返事をして、床にもどった。
もう男も女も気持はひとつになっていた。おもんにも不動丸のこころは読めているようだ。
おもんは上気しながら目を閉じている。胸のあたりの夜具が動悸で揺れている。
不動丸は無言で帯をとき、衣服を脱いだ。どんな言葉をかけるよりも、無言にまさるものはないとおもった。
おもんも無言をつづけている。女の無言は男の意をむかえることをあらわしている。
有明行灯に照らされているおもんの顔に不動丸は見とれた。かたい顔であるが、よろこびと恥じらいの表情を秘めている。
不動丸が夜具の中に身を入れていくと、おもんはわずかに体をずらしてむかえた。
おもんの体が小刻みにふるえている。
「おもん」
不動丸ははじめて嫂(あによめ)を呼び捨てた。
おもんはあえぐようにうなずいた。
夜着の紐(ひも)をぬきとると、ぴくりと体がふるえ、
「ああ……」
しのび泣くようなあえぎがもれた。
不動丸はあえぎつづけるおもんの口を自分の口でふさいだ。
手はおもんの夜着をはいでいった。熟れた裸身があらわになっていった。有明行灯の明りにぬめぬめとかがやくような裸である。

乳房のかたちはくずれず、腹部にたるみもない。肩や腰部にも贅肉はついていない。見事なまでに若さをたもちつづけている体だ。
不動丸ははげしい欲望につきあげられた。征服欲が不動丸をかきたてた。
乳房をやわやわと揉みたて、乳頭を吸うと、一瞬おもんの体にふるえがはしった。
「ああ……、ああ……、ああ……」
とぎれとぎれのちいさなあえぎがもれつづけた。
いつしか不動丸の足がおもんの体を二つに割っていた。
肉置(ししおき)ゆたかな白い太腿が男の腰をはさんだ。
おもんの体は弾力も艶も十分たもっている。不動丸をむかえていっそうかがやきを取りもどしたようだ。つやつやとして肌は生気にみちている。
おもんは上気しきっていた。
不動丸はおもんが上気したきわまりのなかで体を結合させていった。
おもんはうわ言のような声をしきりに口にしながら、あたかも天へのぼるような夢幻の世界をさまよいつづけた。
夢幻からさめて、おもんは身づくろいをはじめた。
不動丸はおもんが何をするのかとおもった。
おもんはだまって寝間をでて、勝手へたった。
しばらく待つと、おもんが銚子と盃を盆にのせて持ってきた。
「はじめての夜ですから、祝儀のお盃をいただきとうございます。わたしは今夜から二代目毘沙門天不動丸の女房となります」

おもんはさすがにややはじらいながら、盆を枕もとにおいた。
かたちばかりの祝言を二人でやろうというのだ。銚子と盃は三々九度のつもりであろう。
不動丸はおきあがって、盆の前にすわった。
盆をはさんでそのむこうにおもんが神妙にすわった。
媒人(なこうど)はもとより、介添人も酌人もいない祝言である。新夫新婦の晴れ着もない。
おもんがまず不動丸の盃に酒をそそいだ。
つぎに不動丸がおもんの盃に酒をそそいだ。
二人はその盃をかわして三度ずつかたむけた。
へ高砂や
　この浦舟に帆をあげて
　月もろともにいで潮の……
不動丸は口の中でつぶやいた。
おもんは陶然として目をとじている。あたりは夜のしじまだ。
へ波の淡路の島影や
　遠く鳴尾の沖すぎて……
そこまで口中でつぶやいたとき、不動丸は屋外へ注意をむけた。音もなく何者か庭先に侵入してくる気配を感じとったのである。庭先から殺気が屋内にしのびこんできた。
へはや住の江に
　つきにけり……
そこまで口中でつぶやいてから、

「おもん、不粋な客がやってきたようだ」
不動丸はおもんの顔を見ていった。
その言葉の意味がつうじたようだ。おもんの顔が一瞬だけ緊張した。
「心配はいらぬ。挨拶だけはきちんとしてやらねばなるまい」
不動丸がいうと、おもんの気持はしずまったようだ。おもんはさいぜん不動丸が乱れ箱においた忍び刀をとって、手わたした。さすがは毘沙門天の女房らしくおちついていた。
「おそらく伊賀者がまいったのでしょう」
おもんはひくい声でいった。
不動丸はうなずいて寝間をでた。服部半蔵をむかえ討つ覚悟がすでにできていた。
半蔵との対決は以前からのぞんでいたが、二代目毘沙門天をついだときから、二人の勝負は避けられぬ宿命となっていた。伊賀と甲賀の頭領はいつか勝負を決せねばならぬ因果の歴史でむすばれている。
不動丸は半蔵をたおす成算を胸にしまって、天井裏づたいに母屋の屋根へでた。上から攻撃をむかえる作戦をとろうとした。
ところが、豈(あに)はからんや、屋上から下を見ると、地上は一面の靄でなにも見えなかった。白い靄が地上をひろくおおっているのだ。屋敷の庭に半蔵や手下の伊賀者たちがいるはずだが、なにも見えぬ。すべては靄の中にうずまっていた。
不動丸は屋上から地上にたいする攻撃を断念した。屋上に長居をつづければ、いたずらに地上にいる伊賀者たちの攻撃の目標になるばかりだ。靄のながれの裂け目から、屋上の不動丸の姿が見えるおそれがあった。

不動丸は屋上から音もなく庭先の一画に降り立った。
地上は靄のながれの底に位置している。夜の靄にとざされれば、周囲はほとんど何も見えぬ。不動丸は夜目はきくが、靄をとおす目は持っていない。
不動丸はしばらく一点にひそんで、まわりの気配をさぐった。
かすかに人のうごく気配や呼吸の音がつたわった。靄の中に四、五人の伊賀者たちがひそんでいそうだ。相手の位置を知る以前に、こちらの位置を知られてしまうおそれがあった。
不動丸はおもいきって、地上に身を伏せた。
そして地上すれすれのひくい位置から周囲を見わたした。
大地と靄のながれとのあいだに一尺から二尺くらいの隙間があった。不動丸はその隙間をすかし見た。闇をとおしてじっとにらんだ。
やがて、徐々にではあるが、隙間に人間の足らしきものがおぼろに見えてきた。わりあいちかくにも伊賀者が一人いた。
不動丸は音もなく地を駆けて、跳躍しざま、伊賀者の後頭部にはげしい足蹴りを見舞った。
この一撃で伊賀者は昏倒していった。
「不動丸よ、いや二代目毘沙門天っ、伊賀者が挨拶にまいった。いざ、勝負じゃ！」
気配を察して、闇と靄のなかから野太い声がきこえた。
不動丸が想像した半蔵の声ではなかった。
「半蔵はどういたした」
不動丸はやや失望をおぼえた。
「毘沙門天の二代目など相手にわが頭領がでてくるまでもない。かわって鷲尾右源太が相手をいたす」

野太い声がかえってきた。
鷲尾右源太といえば、かつての鵜飼三十郎とともに半蔵の両腕と呼ばれた男だ。不動丸は鵜飼三十郎を以前にたおしている。
「半蔵の両腕とも捥ぐことになってかまわぬか」
不動丸は右源太を呑んでかかった。が、どうして半蔵が不在なのかいぶかしんだ。
「鵜飼の仇討ちもついでにやらせてもらう」
右源太はそういうなり、不動丸めがけておそいかかってきた。
不動丸はふたたびすばやく地に身を伏せた。
疾走してくる右源太の足が見えた。
不動丸はせまってくる足を見さだめて、ふたたび足蹴りをねらった。
しかしさすがに右源太は前車の轍はふまなかった。不動丸の攻撃をいちはやく察し、地上で一回転して空中へ跳んだ。
それを追って、不動丸も空中へ跳躍した。
右源太は母屋の庇へとび乗り、庇からさらに屋根へうつった。地上の闘いから屋上へ場所をうつしたのだ。
不動丸も庇へとび乗り、さらに屋根上へうつった。
シュッ　シュッ
闇を切り裂いて手裏剣がとんできた。
身をかわしてふせぐことは不可能であった。不動丸は忍び刀をぬいて、手裏剣をたたきおとしてい

った。

シュッ　シュッ

手裏剣は不動丸の顔や首、胸をねらって飛来した。

右に左に不動丸ははらいおとし、一瞬の間隙をついて、右源太めがけて屋上を突進した。

忍び刀が右源太の首をねらってするどく一閃した。

右源太の首が空中高くとんだとおもった刹那、それよりも一瞬はやく、右源太は自分の体を屋根に転倒させた。右源太の体は屋根の傾斜を目にもとまらぬはやさでころがりおちていった。

それを見て、不動丸も屋根の斜面を一気にはしった。

右源太は屋根から庇におちたところで、くるっとおきあがった。

不動丸は屋根の先端まで駆けおりて、踏みとどまった。

庇と屋根で両人は対峙した。

（技倆は五分五分）

と両者は相手をふんだ。気魄もほぼ互角と見た。

そのとき、地上では異変がおこっていた。

いつの間にか靄が消えかかっていた。異変は見とおしのきくようになった庭先でおこった。

一人の伊賀者がとつぜん風のように庭に姿をあらわした男と格闘したあげく、首の骨を折られてたおされた。

伊賀者を一人たおした男は息をつく間をおかず、もう一人の伊賀者に猛獣のようにおそいかかっていた。男は斧を武器にしており、それを振りまわして阿修羅のたたかいをつづけた。

不動丸は金剛だとすぐに見てとった。金剛が手にしている斧はおもんの家で薪割り用につかってい

る代物である。その斧が打ち振られるたびに、びゅん、びゅんとものすごい音がした。

伊賀者は忍び刀で応戦しているが、闘志あふれた金剛の一方的な攻撃に腰がひけていた。

金剛は不動丸の行く手にきっと伊賀者があらわれるだろうという予測をたてて、おもんの家にきてみたところなのだ。

一方、屋上での闘いは、大棟にちかい場所へうつっていた。忍び刀と忍び刀が打ち合い、火花を散らし、互角の攻防をつづけた。

不動丸は屋上からさらに上空へ跳ぶ機会をねらった。頭上からの蹴りで勝負をつける覚悟をしていた。

一瞬の隙を見て、不動丸は屋上から上空へ跳んだ。

右源太はそれを待っていたかのようだ。不動丸が落下する位置を見きわめて、右源太が忍び刀を一閃した。

不動丸は背をおもいきりそらし、空中でくるりと一回転しながら、右足のバネを存分にきかせて蹴りをくれた。踵（かかと）が右源太の顎にねらいどおりに命中した。右源太の体がおおきく跳ね、一度屋根ではずんで、そのまま庭へ落下していった。

庭ではまだ金剛と伊賀者との息づまる闘いがつづいていた。

三

三月も末のころ、

〈半蔵屋敷で葬いがおこなわれた〉

という噂が世間にひろがった。

「盛大な葬いだったといいますから、半蔵が死んだのやも知れませんよ」

おもんの家で金剛がいった。

「半蔵が死んだ、とは信じられぬ」

それが不動丸の実感であった。

つねに死と隣り合わせにいながら、半蔵ほど死が不似合な男はいない。

「半蔵は不死身だとでもいうのですか」

「半蔵は殺しても死なぬ男だ」

不動丸がそこまでいうと、金剛も不動丸の信念にもちかい言葉にひきずられた。

「左様かもしれません。葬いは別人だったのかもしれません。けれども、ちかごろ半蔵の気配がどこにも感じられない。先日もそうでした」

金剛が先日というのは、不動丸が伊賀者たちにおそわれたときのことだ。

「あのとき半蔵はこなかった。鷲尾右源太が半蔵の代りだといってきた。おかしいといえば、おかしい。本来ならば、半蔵がくる場面だ」

不動丸のこころにも、もしやという疑いがめばえた。先日の闘いは本来、二代目毘沙門天と服部半蔵の勝負のはずである。半蔵がこの闘いに代理をおくってきたというのは妙なことだ。そのために不動丸と右源太との勝負はつかなかったものの、伊賀者が三人たおれた。こちらは無疵だった。半蔵が健在だったならば、このような勝負はおそらくしなかっただろう。

「半蔵といえども、死ぬときがくれば死ぬ。人間死期をまぬがれることはできまい」

「尋常にかんがえれば、そのとおりだ」

「半蔵は尋常な人間ではないかもしれません。わたしが半蔵の生死をさぐってまいりましょう。半蔵がこの世に生きているといないとでは、大層なちがいがございます。将軍の命運にもかかわりないとはいえませぬ」

金剛は迷いをたち切るようにいった。

「深入りはいたすなよ。生死をさぐりにいって、おのれが命をおとしては詮ないことだ」

不動丸は金剛に釘をさすことをわすれなかった。半蔵の生死は重大事だが、金剛の命には代えられぬ。

「ちかいうちに、きっとつきとめてまいります」

「かまえて半蔵屋敷に侵入いたすようなことはやめよ。まだお前には当分生きていてもらわねばならぬ」

不動丸は再度釘をさした。

金剛はうなずきはしたが、不動丸には不安がのこった。金剛ならばやりかねぬとおもったからだ。金剛がいかに剛健で命知らずとはいえども、伊賀者の本拠半蔵屋敷に侵入しては生きてもどってくる望みはうすい。

「当分二代目毘沙門天の力添えとなって生きるのが望みです。死ぬわけにはまいりません」

金剛は不敵な笑いを見せた。

「道順の負けをきっちり半蔵にかえしてやり、駿河大納言さまのお恨みをも晴らさねばならぬ」

不動丸が二代目毘沙門天の称号をさずかったことは、甲賀者の頭領としての宿命を負ったことでもあった。

「国松さまは……」

金剛が不動丸の意中をたずねた。

「駿河大納言さまのお恨みをはらすことができれば、おのずから国松さまの将来の道がひらけよう。けれどもはらすことがもしできなければ、お気の毒だが、国松さまがこの国で生きていかれる道はないものとおもう」

不動丸はくるしい胸のうちをあかした。

「それならばどうしても、お恨みはらさねばなりませぬ」

「そのためにマカオからこの国にもどってきた。お恨みをはらすことができなければ、危険をおかして日本にかえってきた意味がなくなる」

不動丸はつぶやくようにいった。大納言忠長は前将軍秀忠の三男であり、もし家光をしのいで将軍にならなかったとしても、将軍の親族として親藩の大名にはなったはずだ。国松は当然世子（せいし）の地位が約束されていたところである。ところが現状の国松といえば、将軍に楯をついた罪人の子として世間の目をのがれる日々をおくっている。不動丸のねがいは忠長の罪をそそぎ、国松を日のあたる世界にもどしてやりたいという一心である。

「されど将軍をたおし、大納言さまの恥辱をそそぐのは並大抵のことではありません」

彼等の前によこたわる運命は過酷なまでに困難で、きびしい苦渋にみちている。本願を達するのは気が遠くなるほどむつかしい。幼い国松がけなげにその運命にたちむかっている姿が不動丸や金剛のこころをうち、本願を達せずにはいられぬ気持に駆りたてるのだ。

「望みのあるかぎり最後までやりとげる覚悟だ。金剛とておなじであろう」

「一歩一歩やりとげていくしかありませぬ」

「おれは旅にでる」

と不動丸はいった。

「日光でございますね」

金剛は不動丸の心中を見とおしていた。

「下見をいたしておかねばならぬ」

「十分にお気をつけください。先方も人をくりだしてくるやも知れません」

それは不動丸も承知していた。

金剛とかたり合った翌朝、不動丸は江戸を旅だった。画帳を懐に、矢立（やたて）を腰にさし、菅笠をかぶり、振りわけ荷物に草鞋ばきの旅絵師姿で本郷追分を出発し、岩淵（いわぶち）へむかった。

この道は日光街道からわかれた日光御成街道である。昔、鎌倉街道と呼ばれた古道である。

日光東照宮社参は元和三年のはじまりから、千住、越ケ谷をへて岩槻（いわつき）に入る道をとったが、寛永九年の社参のときから御成街道をとおるようになった。けれども、かならずしも御成街道をとおらねばならぬわけではない。往路と復路で御成街道と日光街道をとる場合もある。その時どきの事情でかわってくる。予定のたたぬのが不動丸にとっては難儀であった。御成街道をとるほうがおおいので、不動丸はまずこちらから下見をすることにさだめた。

晴天、無風の日和である。街道の風物、地理地形、道幅、坂道、人家の有様などを仔細に観察しながら道をすすんだ。おもいつくことがあると、画帳にかきこみ、写生しながら、岩淵、川口とすすんだ。岩淵と川口のあいだ荒川は船わたしである。

川口の平柳には、日光社参の途次の小休所としている真言宗錫杖寺（しゃくじょう）がある。秀忠がはじめに小休所としてもちいたのが前例になって、家光の代になってから、客殿上段之間が休息所にあてられ、寛永三年、御成門がつくられた。昨年四月にも、家光は日光社参に旅だち、御成街道をとり、十三日に

錫杖寺で昼餉をとり、この夜岩槻城に宿泊し、翌十四日には幸手で昼餉をとって、古河城に宿泊した。幸手の昼餉は聖福寺であった。

不動丸は錫杖寺の山門をくぐり、ひろい境内を一巡した。将軍の休息する寺だけに、周囲を堀と塀できびしくかこんでいる。伽藍を見てまわり、客殿にもちかづいた。参詣人の姿がちらほらと見えるほか、墨染を着た坊主の姿もあったが、不動丸は誰にも見とがめられなかった。画帳を手にしていたので、絵師が絵を描きにきたとおもわれたのだろう。客殿の周囲や出入口などを脳裡にきざみつけてはなれた。もし客殿をおそう場合の侵入路や戦法、脱出路などを思案し、脳裡にとどめた。将軍の日光社参には御三家、老中以下、おおくの諸大名や直参が行列にしたがうので、諸大名や直参の宿泊や警備状況もよく頭に入れておかねばならなかった。侵入するにも脱出するにも警備警固は厳重であろうから、よほど綿密な準備が必要だ。将軍が宿泊や休息をする場合の供の者たちは附近の寺や旅籠などに分宿する。末端の者たちはよほど遠くへ場所割りされることになる。当日将軍の宿所や休息所にちかづくには、至難が予想される。

ふたたび不動丸は御成街道を鳩ケ谷、大門とあるきつづけた。道はよく整備され、伝馬もととのっている。道中、松並木や杉並木が要所につづき、一里塚もきちんともうけてある。

道はほとんどたいらで、坂道はない。見通しはすこぶるよく、視界をさえぎる山はない。〈月の入るべき山もなし〉と詠まれているほど関東平野は真ったいらである。北に筑波、西に富士がはるか遠くにのぞまれる。周囲は野と田畑と森である。今ごろは田植えにはややはやく、麦刈りにも早すぎる。四月中ごろの季節ならば田植えに入り、麦刈りもはじまろうとする時季であろう。

不動丸は街道の要所は簡単に写生し、略図なども書き入れていった。

道中では今までのところ、襲撃に手ごろな場所は見つからなかった。なにせ山もない谷もない、坂

道もほとんどない関東平野特有の平坦な道である。見とおしがよすぎるあまり、戦略をことごとくするには不都合なのである。田や畑、野ばかりでは伏兵をおくこともできぬ。せめて森や林がほしいところであるが、街道ちかくにはないのが残念である。

不動丸は失望をおぼえながら道中をすすんだ。宿場で決行するには困難がおおすぎる。沿道には地蔵堂や薬師堂、観音堂などがあるが、そこにひそんで決行するのも無理である。

夕暮れちかく、岩槻城下に着いた。岩槻は五万石、阿部重次の城下である。江戸の北方の防衛地であり、関東でも有数の要地である。したがって岩槻城は小城ではあっても、堅固な要害である。城下も防衛に意をつくして地割りがおこなわれている。寺院や神社は万一の場合たちどころに出城に変化するようにつくられている。

不動丸は城下の旅籠武蔵屋に宿をとった。武蔵屋は将軍の日光社参のさい、供の諸大名の家来たちの宿泊所となる。そのときは一般の旅人客は宿泊できなくなるのだ。不動丸は一応宿を検分してみた。武蔵屋の店頭は街道から三間ばかりひっこんでいて、いざというとき兵が集合できるような広場となる。側面にも庭があって、広場につかえるようになっている。

翌朝はやく、不動丸は出立した。

岩槻のつぎの宿場幸手で御成街道は日光街道とひとつになる。御成街道は全長約十三里の道程である。幸手にいたるすこし手前でまた川がある。古利根川のながれは橋わたしである。江戸周辺の川には、江戸城防衛の見地から重要な川には橋がかかっていないのである。

船わたしといえば、幸手の先、栗橋と中田のあいだの利根川が江戸の重要な防衛線であり、関所がおかれている。ふだんは船わたしであるが、将軍の日光社参にさいしては船橋がわたされる。川幅百四十二間の利根川のながれに、鎖で連結した船五十余艘を横一列に浮かべ、その上に厚い板を幅三間

にわたって敷きわたし、菰や土を盛り、砂を敷きつめて歩行のできるような橋をつくるのである。不動丸はその利根川のながれを乗合船でわたった。居あわせた船客は行商人二人と旅の僧、さらに旅の老婆とつれの童児だ。

四

不動丸が下見の旅にでているころ、金剛は江戸にのこって、半蔵の消息をさがしつづけた。

（本当に半蔵は死んだのか、それとも長わずらいで床についているのか……）

半蔵の生死をたしかめることは、目下いちばん重要な事柄である。将軍家光をしとめるためには、まず半蔵の動向をたしかめねばならぬ。生きているなら、半蔵をたおさぬことには、家光をしとめることは不可能である。半蔵は終始家光の側ちかくからはなれぬものと予想された。

金剛はほとんど江戸中をあるきまわった。そして半蔵の噂や消息をさがしもとめた。半蔵屋敷の周辺はもとより、四谷の伊賀組屋敷の近辺はとくに入念にあるきまわった。伊賀組与力や伊賀者たちが立ち寄りそうな場所や店などもこまかくあたってみた。

半蔵が死んだという噂はたしかにあちこちから聞こえた。それによれば、

〈半蔵は頓死した〉

というのである。ある夜、江戸城見廻りからもどって急に高熱を発し、顔といわず体中に赤い発疹を生じて、一夜高熱にあえぎくるしんだ末、翌朝ころりと湮没したといわれていた。これまで数おおくの者を死にいたらしめた報いによって、死者の怨霊にたたられて、地獄の炎熱で熱死したというのだ。

半蔵らしい死だといえるかもしれぬ。しかしその死はあまりにも突然すぎる。たった一夜でころりと死んだ。半蔵の死を予感した者は周囲に一人もいないということだった。

（あの半蔵がそれほどあっさり死ぬものだろうか……）

金剛にはどうしても疑いがのこった。

たずねられるだけたずねた。半蔵の葬いがだされたのを見たという者もいた。しかしそれでも、信じるには逡巡がのこった。

今までにかんがえられる手立はつくした。金剛にとって、のこる手立はあとひとつしかなかった。金剛は思案しぬいたあげく、それを実行することを決断した。不動丸がいいのこしていった戒めをもやぶらねばならなかった。

（成否は五分……）

と金剛はみた。かならずしも成功するとはいいがたかった。

夕刻、金剛は麹町の善国寺へゆき、毘沙門天をおがんだ。善国寺と甲賀者とのかかわりはとくにはないが、同寺の本尊は毘沙門天である。毘沙門天は四天王の一つで、須弥山の中腹北方にあって北方世界を守護する武神である。身は黄金の色をして、忿怒の相をあらわし、甲冑を着け、片手に宝塔をささげ、片手に鉾を持って立っている。金剛はその毘沙門像に武運をいのり、本願成就を祈念した。

そして善国寺坂をくだり、麹町七丁目へでて、旗本六千石阿部駿河守の屋敷の前にきた。旗本といってもこれほどの大身になると、屋敷構えは大名屋敷にくらべてもさほどひけはとらぬ。二千坪あまりの広さがあり、百人以上の家来を屋敷に住まわせている。戦時となれば、一部隊としてあつかわれ、馬印をゆるされる身分である。表門、裏門は門番が守衛し、辻番小屋をおいている。

金剛は夕闇が濃くなるのを待ち、ころ合いをはかって裏塀へちか寄っていった。金剛の体がすうっ

と塀に溶けこんだ。薄茶色の塀とおなじ色の着衣に身をかためていた。

塀の高さは約二間。金剛は忍び刀を塀にたてかけ、鍔に片足をかけて手を高くあげると、塀の縁にようやくかかった。背のびをして体をもちあげ、屋敷内にすばやくとびおりた。

屋敷内でしばらく様子をうかがってから、金剛は屋敷の東側へ徐々に移動していった。立木や植込、物陰をつたって、木戸をくぐり、東側の塀のちかくにひそんだ。

しかし金剛は阿部家の屋敷にはなんの用もない。目的はそのとなりの屋敷にある。

阿部家の西どなりは稲垣信濃守の大名屋敷であり、東どなりは服部半蔵の屋敷である。阿部家と半蔵屋敷は塀一枚で隣接している。

半蔵屋敷は南北にながく、東西にみじかいほぼ長方形の敷地である。表門は坂道に面して東側についている。裏門は麹町側の北である。どこから侵入をはかるよりも、いったん隣屋敷に侵入し、その後塀を乗りこえて半蔵屋敷にうつるほうがたやすいのだ。

塀のそばで金剛は一刻（二時間）ばかり時をかせいだ。

宵闇がふかくなってきたころ、金剛はやおら塀を這いあがり、半蔵屋敷にとびおりた。鬼よりこわいとおもわれている半蔵屋敷に存外たやすく侵入することができた。どんなものにもかならず盲点はあるものだ。

金剛の目的は半蔵の存否、生死をたしかめることである。伊賀者との闘いが目的ではない。見つかっていどまれれば、たたかわねばならないが、できるならば避けたい。

金剛は半蔵屋敷の中で、しずかに暁を待った。塀のそばの植込の陰で身うごきもしないで待ちつづけた。夜闇があるうちに屋敷内をあるきまわりたい気持はやまやまだが、なんといっても伊賀者の総本山というべき屋敷だ。なまじうごきまわれば、発見されるのがおちである。

こころなしか、闇が灰色にしらんできた。暁がちかづいた。

金剛はやおら、身をもたげ、あたりに注意をくばりつつうごきはじめた。

屋敷内には名うての伊賀者たちがごろごろしているはずだ。発見されたら、逃げるしかない。そのときは目的を断念しなければならぬ。

半蔵屋敷といえども、表構えはふつうの武家屋敷とかわっていない。構造や間取りなどにいくらかのちがいがある程度であろう。忍者屋敷らしい仕掛けや工夫はほどこされているだろう。建物は母屋と別棟、長屋、土蔵、厩などで、あとはひろい庭である。庭は池や築山、立木、植込のたぐいでつくられている。

金剛は建物には見むきもしなかった。屋内に侵入する気持はないのだ。たった一人で屋内に侵入するほど金剛は無謀ではなかった。

金剛は伊賀者を警戒しつつ、庭のほうへむかった。

ひろい庭は暁闇のなかにしずんでいる。金剛は庭の背後にでた。

庭の一方の端には稲荷の鳥居がある。もう一方の端に苔むすような玉垣がめぐらされている。そこが金剛のめざす場所であった。

金剛は玉垣にちかづいていった。玉垣のなかは服部家の墓地である。

薄ら闇をすかすと、墓石や卒塔婆が立ちならんでいる。金剛は半蔵の墓があるかないかをたしかめにきたのである。

しばらく時間がたつと、暁の闇と夜明けの光が渾然ととけ合い、墓地のかたちもはっきりと見えてきた。比較的あたらしい卒塔婆の文字は凝視すれば読めるくらいになった。

金剛はもっともあたらしい墓をさがした。

ふるい墓や卒塔婆はいくつかあった。名をしるした卒塔婆も目についた。
半蔵のものらしいのはなかった。
それでも丁寧にさがした。なければ、半蔵は生きていることになる。この屋敷内にいるかもしれぬ。
金剛は念を入れてもう一度見た。
そのとき金剛の目が一点に吸い寄せられた。いちばん奥に墓石にかくれるように、真あたらしい卒塔婆がたっている。卒塔婆には名号が書きつらねられ、さらに名前らしき文字がある。
金剛は薄ら闇をすかして文字を読んだ。
〈俗名服部半蔵忠正之墓〉
とまさしく読めた。
(あった!)
金剛は声なき声をあげた。
(半蔵は死んでいた!)
不死身と信じられた三代目半蔵はもう世にいないのだった。先夜、おもんの屋敷に鷲尾右源太がやってきたのはそのためだった。
喜びとも哀しみともつかぬ感動が金剛のなかにおこった。怨敵ではあるが、伊賀の頭領の死をいたむ気持はいくらか胸の隅にあった。それはおたがいの立場や利害をはなれて、すぐれた忍者にたいする尊崇の念でもあった。
「南無阿弥陀仏……」
合掌し、名号を一言となえ、金剛は真あたらしい卒塔婆をひきぬいた。
「南無阿弥陀仏……」

もう一度となえて、金剛は懐中から苦無(くない)をとりだし、墓を掘りはじめた。
あたらしい墓だけに、土はやわらかい。音もなく掘りすすんだ。
墓がもし空ならば、半蔵の死は偽りであり、詐略(さりゃく)である。そこまでたしかめてみる必要があった。
掘りすすむ金剛が手ごたえをおぼえた。土の下にたしかに遺骸はうまっていた。苦無に代えて、金剛は自分の手で土をかいた。手で新仏の遺骸をあらためていった。
あらためおわってから、金剛は丁寧に土をかぶせ、墓を元どおりになおして、その場をたち去った。

五

四月十三日朝、将軍の日光社参の大行列が江戸城を出発した。土井利勝と松平信綱が江戸城の留守を命じられ、前駆けに松平式部大輔、稲葉正則、堀田正盛、朽木(くつき)植綱がたち、酒井忠清、安藤重長、阿部忠秋、内田正信が後備えをつとめた。供奉の諸大名は御三家をはじめに閣老以下親藩、譜代大名を中心に編成し、さらに直参旗本をしたがえた壮麗なまでの大行列である。秀忠のころはこれほど大規模な日光社参はやらなかった。日光東照宮が竣工した寛永十三年から大袈裟な規模で社参がおこなわれるようになった。今回も祐筆、鉄砲役、千人頭、儒役、医員、諸番士や扈従(こしょう)の女房や小姓まで多数くわわって、総人数十三万の大行列となった。
大行列は日光奥州街道の千住へむかわず、日光御成街道をすすんでいった。これほどの大行列がとおると、御成街道の場合、前後五日間、朝から夕まで供奉の通行がつづくことになる。沿道の村々は御成街道の掃除を命じられ、左右数間間隔に塩をもり、沿道は五、六丁にわたって樹木や竹の切り取りにはたらかされる。したがって、御成街道からの見通しはきわめてよい。

秀忠はつねに乗物をもちいたが、家光は馬の場合がおおく、今回も雨天ながら騎乗してすすんだ。家光のまわりは側役、小姓、小納戸、供頭、目付などがかためている。小十人組、大番組、書院番組などがその前後にしたがっている。豪華壮麗、将軍の大行列は粛々と雨中の御成街道を行進していった。

沿道には将軍の行列を見物にきた近在の老若男女多数が、雨にぬれながら、土下座している。なかには弁当持参、泊りこみで行列の見物にやってきた者たちもいる。

したがって幕府の沿道警備も大がかりである。数日前から沿道の人改めはきびしくなり、御成街道筋の各町内ごとに火消道具をそなえた自身番をたてて厳重な警備にあたっていた。定番をやとうほか、昼夜にわたってまわりもちで自身番につめた。

将軍一行は例年のとおり、昼ごろ、川口の平柳で錫杖寺にたち寄り、弁当をつかった。その夕方ちかく、岩槻城に入城した。

十四日は古河城、十五日には宇都宮城に宿泊し、十六日日光に到着した。

十七日に東照宮祭礼がおこなわれ、将軍はおごそかなうちに本宮および宝塔を参拝した。家康は元和二年のこの日、駿河城に歿し、遺言によって久能山にほうむり、社殿をたてた。のちに日光山に社殿を造営し、奥社の宝塔に改葬した。神霊を社殿に安置し、東照大権現の神号をさだめ、朝廷から正一位の神階をうけたのである。幕府は日光神領二万五千石を寄進し、日光奉行をおき、輪王寺門跡、東照宮別当をおいて日光山を管理している。

十八日、一行は日光を下山して江戸にむかった。ふたたび壮麗きわまりない行列をつらね、その夕宇都宮に入城した。

翌朝、宇都宮城を発し、夕にいたって土井利勝の古河城に将軍一行は入った。

この夜、更けてから雨が降りだした。

翌朝はまだ雨がつづいていた。雨のなかを将軍一行は古河城をたった。

昼前から、中田、栗橋間の利根川越えにかかり、例の船橋を将軍一行は馬でわたった。川の手前は下総であるが、わたったとたんに武蔵となる。水上には船影は一艘も見えぬ。水上交通は上流で遮断されていた。

利根川をこえたころから、雨があがった。そして太陽が見えはじめた。

将軍の行列は幸手から日光御成街道へわかれた。往路も復路も御成街道をとることになった。

幸手からつぎの宿場岩槻までは四里八丁の長丁場である。幸手の先、下野村と下高野村とのあいだを古利根川がながれている。古利根川の橋をこえたころ、日が西へかたむきだした。

行列は広漠たる関東平野の一本道をすすんだ。ひろい野が遠くまでつづいている。見はらしはとてもよい。沿道からすこしはなれたところに土下座する人影が見える。近在の村からやってきた見物人たちであろう。左右にわかれて約十人ずついた。いずれもふかぶかと頭をたれて、土下座をしている。

彼等から数間はなれたところに、一人ぽつんと土下座をしているややむさくるしいでたちの若い男がいた。そこからさらに半丁ほど先に、三十人ばかりもの見物人がいた。彼等はひとしく網代笠をかぶり、墨染をまとった坊主たちだ。

将軍のすこし先をいく小十人組がとおりかかったとき、土下座をしていた男がわずかに顔をあげた。百姓ふうのいでたちだが、その顔はまぎれもない金剛であった。

金剛が顔をあげた正面に小十人頭にひきいられた小十人組の面々が見えた。

金剛は小十人頭へむかって片手をあげた。

小十人頭が金剛をふりむいた瞬間、白い煙のようなものがぱっとあがった。

小十人頭は顔一面に灰に砂をまぜた目つぶしをうけて、激痛とともに視力をうしなった。
その一瞬に、金剛が行列にとびこんだ。小十人頭の太刀の柄をにぎるや、金剛は一気にひきぬいた。
「狼藉者っ」
「曲者でござる！」
小十人組の面々は大声をあげ、いっせいに太刀をぬいて金剛へ攻めかかっていった。
しかし金剛は小十人組の面々を相手としなかった。一気にそこを駆けぬけ、小納戸、側役らの近習がいる後方へと猛然と突進した。小納戸、側役らがいっせいにむかってきた。
金剛は身をおどらせ、正面の小納戸を真っ向唐竹割りで斬りたおした。
「推参っ」
なぬ横手の小納戸にも一太刀あびせ、むらがる近習たちを蹴散らして、金剛は将軍の馬前におどりでた。
「将軍家光！」
もう一度さけんで、金剛ははったと馬上を見あげた。
たくましい栗毛に騎乗している威風堂々たる馬上姿の主の笠にまぎれもない葵の家紋が染められていた。紋服にも葵紋が入っている。
金剛がえたりやと斬りかかった瞬間、
「下郎っ、さがれ！」
すさまじい叱声が将軍の口からとんだ。
ところがなんと、将軍のすぐちかくに、まったくおなじ装束をまとい、葵紋の笠をかぶった紋服の馬上姿があと二人いた。年ごろもよく似た三十代後半だ。一人は葦毛、もう一人は鹿毛に騎乗してい

る。馬がことなるほかはまるで同一人物のようによく似ている。
（将軍が三人いる！）
まさに金剛はそうおもった。一人が本物で、あとの二人は影武者である。
金剛は一瞬、惑乱におそわれた。いずれが本物で、いずれが影武者であるか見分けがつかなかった。三人一度におそいかかるわけにはいかぬ。
金剛は直感的に鹿毛に騎乗している人物を家光だと見分けた。その人物のまわりに小姓、小納戸、側役たちの近習があつまり堅い警固をしているからだ。あと二人の騎馬のまわりは比較的警固が手薄である。
「家光っ、覚悟！」
大声で吠えて、金剛は猛然と斬りかかった。
するりと絶妙な手綱さばきで金剛の一刀をかわし、その人物は背後にひいた。
金剛はもう一度体ごとぶつかるように猪突していった。
が、目標のところにすでに家光と見られる人物はいなかった。再度巧妙に手綱をたぐって、横によけ、背後へさがっていった。その前面を近習たちが固くまもっている。
そのとき、三十人ばかりの坊主たちがとつぜんいっせいに立ちあがり、手に手に錫杖をふるって行列になだれこんでいった。外見だけ見れば平柳錫杖寺の修行僧のようだが、将軍休息所の坊主たちが将軍の行列におそいかかっていくはずがなかった。
行列がみだれたち、整然たる隊伍がくずれ、小姓番組、大番組、書院番組の面々が時をうつさず坊主たちに応戦していった。とくに小姓番組、書院番組は将軍親衛隊であるから、命を的にして将軍をまもる役目がある。坊主たちを押しつつんで一網打尽にしようとした。

ところがこの坊主たちはただの修行僧ではなかった。武術、軍学の修業をつみかさねた由井正雪門下の粒よりだった。正雪自身に指揮されて、一丸となって将軍へ肉迫していった。個々にたたかえば圧倒的に多数の番士たちに討ちとられてしまうのは必定である。約三十人の集団で正雪一門は将軍へせまった。

将軍は十三万人以上をひきいているが、長い行列の一点を衝いておそいかかられたのであるから、実際に将軍をまもって応戦できる者は千人にみたない。いや本当にたたかえるのはせいぜい百人であろう。あとの大多数はただ右往左往するにすぎぬ。これが大行列の編成の盲点である。

正雪一門はその盲点をたくみについて、整然と行動した。大行列の一点を集中的に攻めまくった。行列はくずれ、隊はみだれ、編成はとれなかった。道幅三間の御成街道に番士たちはいたずらにあふれ、左右の野に叫喚がひびきわたった。

金剛は短期決戦をこころがけた。奇襲作戦は速戦即決が鉄則だ。ながびいたら失敗である。家光の鹿毛をどこまでも追いせまった。

しかし家光はこの危地にあって、こころにくいばかりに身の処理がたくみであった。金剛がいくらせまっていっても、二間以内の距離にはちか寄らせなかった。するりするりと身をかわして金剛の猛進をかわした。

金剛は躍起となったが、あせりは増すばかりとなった。いくら太刀をふるっても、何人相手をたおしても家光にはとどかない。周囲の近習たちといつまでも太刀をまじえるばかりであった。

時はしだいに経過した。正雪一門もなかなか家光をとらえることはできなかった。接近するのさえしだいにむつかしくなった。

一時は不意をつかれてみだれたった行列も、やがて落着きをとりもどしたかに見えた。大番組、小

十人組や徒士組などが前線にたってたたかい、小姓番組、書院番組が後衛にまわり、将軍は近習たちにまもられて、御成街道を先へ先へとすすんでいった。

金剛は阿修羅のごとく奮戦をつづけ、数多の敵をたおしたが、自分もすでに身に何カ所も傷を負っていた。背や肩、腕、臑などにうけた太刀傷や槍傷で体がおもくなっていた。うごきがにぶくなり、おもったところに体がついていかなかった。金剛はそれを闘志でおぎない、果敢なたたかいをつづけていた。

正雪一門も、一人討たれ、二人たおれ、三人傷つき……、約半数に減っていた。

近習たちにまもられた将軍一行は西粂原のあたりまで先にすすんだ。

六

四界は黄金の原である。麦畑がどこまでもひろがっている。

しかも麦畑は黄熟していて、西陽に照らされ黄金の毛氈を敷きつめたようである。あたりにはむっとするような熟れた麦の匂いがみちている。

不動丸はもう半日もむせるほど麦の香と土のにおいをかいでいた。不動丸の鼻先に土があり、麦の穂は顔にかからんばかりである。ひろい麦畑のなかでもう何刻もすごしていた。

不動丸が寝ころんでいる麦畑から半丁ほど先に御成街道が見えるが、御成街道からは不動丸がまったく見えぬ。不動丸は着衣に麦の株をいくつも縫いつけている。菅笠にも麦をつけている。不動丸が麦畑のなかでうごいても、御成街道からはすこしも気づかれぬわけである。今日も街道警備の役人たちが何度も御成街道を検分にとおったが、一度も気づかれなかった。

不動丸は太陽のかたむき加減を見ながら、
（もうくるころだ）
とおもった。
太陽は関東平野の西におおきくかたむいている。平野の西の空が赤々とそまっている。その残照をうけて麦畑もあかい照りかえしをあびている。いかにも関東平野らしい光景である。
やがて、夕日に染まる御成街道に人影が見えてきた。
人影はいくつもいくつも雲が湧くようにあらわれた。大行列の先頭である。
行列とはいっても整然たるものではなかった。金剛と正雪一門の奇襲攻撃によって行列はみだれたまますすんできた。
不動丸は麦畑のなかを匍匐（ほふく）して前進しながら、行列を凝視しつづけた。行列のなかに家光の姿をさがしもとめた。
やがて騎馬を中心にした一隊があらわれた。
さらに御成街道に接近していきながら、不動丸はその一隊の中心人物が馬上姿に葵紋の入った笠をつけているのをみとめた。よく見ると紋服にもおなじ紋が入っていた。
（将軍家光！）
不動丸はこころがおどった。とうとう家光をとらえたという感動がおこってきた。寛永十六年マカオから日本にもどってきて二年めにして駿河大納言忠長の仇を目の前にした。
だが、家光と見られる人物は三人いた。騎乗している馬こそ鹿毛、葦毛、栗毛の三種だが、馬上の主たちはいずれもおなじ容儀装束におなじ笠をかぶっている。しかも周囲をほとんどおなじくらいの警固の近習でかためていた。

（いずれが、本物の家光？）
不動丸は思案しながら、金剛と正雪一門が奇襲攻撃の目的を達しえなかったことをさとった。彼等のくわだては失敗に帰した。あとは自分が達するしか道はなかった。
しかし将軍一行は金剛と正雪一門の奇襲をうけた衝撃と狼狽をあきらかにあらわしていた。往路では一糸みだれず整然としていた旗、長柄槍、長刀などが順序不同に入りみだれている。金紋の先箱や挟箱もあわただしくすすんできた。供奉する旗本たちにも落着きはらった様子は見えなかった。動揺し混乱しているさまが見てとれた。
不動丸は鹿毛、葦毛、栗毛三頭の家光へ燃えたつ眸をすえた。三人とも馬上凛然たる態度でちかづいてきた。どれもこれも家光にふさわしい風采、振舞である。
不動丸はいずれが本物であるか判断ができなかった。
（三人みなごろしをはかるか）
それができるくらいなら苦労はいらぬ。いずれか一人をたおすのさえ至難事である。
不動丸はさらに匍匐しながら麦畑のなかで、半弓に矢をつがえた。
距離は十数間にちぢまっていた。不動丸はこころみに、三人の家光の真ん中の人物にむかって射はなった。
矢は真ん中の人物すれすれにとび去った。
つぎの矢をつがえるあいだに、行列が衝撃に揺れたったのが見てとれた。
不動丸は三人の家光をじっと見くらべた。
三人の家光もこちらを凝視している。近習たちも行列をとめて、麦畑をにらんでいる。
不動丸は麦畑のなかから第二矢をはなった。

矢は先頭の家光の顔面にむかってとんだ。
不動丸はおもい手ごたえを感じた。
矢は先頭の家光の顔に吸いこまれていった。かに見えたが、家光がすばやく抜いた鉄扇で矢を見事にたたきおとした。
不動丸は三たび矢をつがえながら、麦畑を疾走した。家光にむかって猛進をつづけた。
「甲賀不動丸っ、二代目毘沙門天！　行列をみだすことはゆるさぬ」
先頭の家光が馬上から叱咤した。不動丸と見知っての言葉だ。
不動丸は疾走をつづけながら、その人物の正体を翻然とさとった。半蔵が黄泉路からたちもどって、御成街道に姿をあらわしたかと一瞬おもった。
（半蔵っ、生きておったか！）
半蔵屋敷に墓ができていたのは詐略であった。不動丸は生きている半蔵を見て、こころがおどった。好敵手の死は不動丸にとってこの上ない無念であった。不動丸としては最高の忍者とたたかう機会が復活した。毘沙門天道順の仇をとる機会が生まれた。
「不動丸、さがれっ、さがらねば相手をいたす！」
半蔵が家光の姿かたちのままでいった。
「よき敵、ござんなれ！　甲賀道順の仇討ちだ」
さけびながら不動丸は矢を射はなった。
矢は近距離から半蔵へとんだ。
半蔵がふたたび鉄扇であざやかに矢をたたきおとした。
不動丸は半弓を投げ捨て、大地を蹴ってはしった。

見る見るうちに半蔵の姿がちかづいた。
「やあっ！」
気合を発し、不動丸は地上から猛然と跳躍した。ぐんぐん高く舞いあがり、半蔵の頭上にちかづいた。上空から不動丸は蹴りの用意に入った。空中で脚をたたみ、半蔵の頭上に舞いおりながら葦毛のながい顔の中央、眉間にねらいをさだめた。全身の力を足に集中し、葦毛の眉間を蹴りつけた。
壮絶な馬の悲鳴があがり、葦毛はいったん竿立って前足から大地にくずれおちた。
半蔵は地上に投げだされる瞬前、軽々と身を投げ、地上に立った。不動丸の足が自分をねらってくるとおもい、対応がほんの一瞬おくれた。そのために半蔵の着地がややくずれた。
不動丸が今度は地上をひくく跳んだ。跳びながらふたたび足を飛ばした。唸りを生じた足が半蔵の顔に入った。が、かろうじて半蔵は左腕で不動丸の足をはらった。右手の鉄扇をつかう余裕がなかった。
不動丸は足に半蔵の腕をうけたが、同時に半蔵の顔をしたたか蹴りあげていた。
半蔵の体が地上からはじけ飛んだ。顎がくだけて、歯がとび、血が口から吹きだした。
しかし不動丸も左の膸を骨折していた。片膝をつきながら、半蔵の様子をうかがい、周囲を見た。
二人の家光はこのあいだにすばやく近習たちにまもられて御成街道を先にすすんでいた。大勢の番士たちが不動丸をおしつつんできた。
半蔵も不動丸も傷を負っているが、気力と闘志はすこしもくじけていなかった。
半蔵がおきあがり、脇差をぬきはなって、土煙をあげて猛進してきた。真っ赤な夕陽に半蔵の形相が照りはえた。
不動丸は懐中から鎧通しをとりだし、よろよろと立ちあがった。が、左の足がきかず、右足一本で

立った。
半蔵の脇差がせまった。
不動丸は最後の一瞬がきたとおもった。金剛はすでにたおれ、正雪一門もことごとくたおれたかと見えた。紀州頼宣はついに起たなかった。もし御成街道で家光が要撃されて命をうしなえば、頼宣は時をうつさず兵をあげる用意をしていた。が、今のところ頼宣がうごいた気配はなかった。
（おいたわしや、国松君……）
こころに一点のこるのは、自分がマカオからつれもどってきた国松の運命であった。
できることなら、再度国松をつれて日本を脱出し、海外に道をひらきたいと不動丸は瞬時のうちに希望をいだいた。
「不動丸っ、勝負じゃ！」
半蔵の怒号が炸裂した。
不動丸は全身全霊の力をしぼって片足一本で地を蹴った。
不動丸の体が夕陽にむかって舞いあがっていった。落日のかがやきのなかを空高く跳んだ。燃える夕陽のなかに不動丸は国松の顔を見た。
（フドウ、死ぬな！）
国松の声がきこえた。
「国松君、不動丸は死にませぬぞ。もう一度マカオへ脱出いたしましょう」
不動丸は夕陽にむかってさけんだ。
不動丸は半蔵の脇差をかいくぐって、右足をとばし、半蔵の首根に命中させていた。
半蔵の体がはじけ、毬のように十間もとんでうごかなくなった。

しかし不動丸も同時に半蔵の脇差で胸を薙ぎはらわれた。
不動丸は御成街道の端（はた）にくずれおちた。
もう立ちあがれなかった。死のおとずれを不動丸は感じた。国松の必死な声がかすかにきこえ、消えていった。
意識がやがて遠のきはじめた。
真っ赤な夕陽がうごかなくなった不動丸と半蔵にいつまでも降りそそいでいた。
御成街道の行列はつづいている。

本書は「問題小説」'87年4月号、9月号、'88年1月号、6月号、11月号、'89年4月号、11月号、'90年3月号に連載された作品です。

徳川忍法系図

一九九〇年一〇月三一日　第一刷

著　者　南原幹雄
発行者　荒井　修
発行所　株式会社　徳間書店
東京都港区新橋四―一〇―一
郵便番号一〇五
電話　東京四三三―六二三一（代表）
振替　東京四―四四三九二
印刷所　本文・本郷印刷株式会社
カバー・真生印刷株式会社
製本所　ナショナル製本協同組合
〈編集担当　今井鎮夫〉

© Mikio Nanbara, Printed in Japan, 1990
落丁本・乱丁本は本社またはお買い求めの
書店にてお取り替えします。

ISBN4-19-124374-8

黒い炎の戦士[1]～[5]	白石一郎	新書判
鳴門血風記	白石一郎	四六判
明治ざんぎり剣侠伝	津本　陽	四六判
新選組銘々伝	早乙女貢	B6判
風分けて時次郎	西村　望	四六判
敦煌	井上　靖	B6変型
びいどろの筆	泡坂妻夫	四六判
武器商人	高橋義夫	四六判
風の呪殺陣	隆慶一郎	四六判
嫋々の剣	澤田ふじ子	四六判

徳間書店■好評既刊